

ことばと文化

相互理解をめざして

国際文化フォーラム設立

10周年記念





国際文化フォーラム設立10周年記念

ことばと文化

相互理解をめざして





刊行に あたって

(財)国際文化フォーラム 会長

野間佐和子

国際文化フォーラムは、本年6月22日に設立10周年を迎えました。設立を目前に控えた1987年6月10日、財団設立に精魂を傾けておりました講談社前社長野間惟道の急逝という悲しい出来事がございましたが、設立以来今日に至るまで着実に事業を進めてまいることができましたのも、ひとえに理事・評議員・賛助会員の皆さまをはじめ、多くの方々からの温かいご支援・ご協力の賜物と心より感謝申し上げます。

この10年を振り返ってみますと、事業の内容からみまして大きく二つの時期に分けることができると思います。87年度から91年度までの5年間は、日本の国際的立場の変化に応じて、70年代より国内で盛んに唱えられるようになった「対日理解促進」の標語の下に、当財団も海外における日本語の普及と、日本文化の発信に専念した時期でありました。

その後、国際社会が新たな秩序の構築に向けて、構造変化を遂げるなかで、



日本の民間財団として、対日理解だけをめざした事業を推進することでいいのか、という観点から見直しを行い、93年度より日本国内のアジア言語教育の促進を事業に加えること、また海外の日本語教育、国内のアジア言語教育ともに、対象を若い世代に絞り込むことといたしました。日本にとって最も関係の深いアジア・太平洋地域を中心として、若い人々が相互の言語を学習し、文化理解を深めていくことを事業の目標に掲げ、92年度より96年度までの5年間、私どもは、新たな事業の基盤を作ることに専念してまいりました。

97年度より、当財団の事業はまた新たな局面を迎えることとなりますが、これまでに蓄積してきたノウハウと人脈を財産に、相互理解の芽を大事に育てていきたいと思っております。

今後とも相変わりがせぬご指導ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

国際文化フォーラムの 10年

〔財〕国際文化フォーラム 理事長

黒田瑞夫

国際文化フォーラムが発足した当時は、海外における日本語教育の支援を中心として、文化交流活動を行うという一般的な活動目標が与えられていただけであった。海外といっても広大であるし、文化交流といっても多面にわたる。まるで大海に小舟を乗り出すという感じであった。

当財団が事業の枠組みを確立するのは、4、5年を経て蔚山での日韓学術文化セミナー(1991年)、バンコクでの日本・タイ学術文化シンポジウム(92年)、米国ウイスコンシン州のJALCAPの支援(92年)の頃からであった。それぞれ実りの多い企画で、いまでも誇りに思っている。その他、ロシア極東地域日本語教師派遣事業も印象に残っている。

米国との交流は、ウイスコンシン州教育長グローバー氏講演会(92年)、日米教育長交流プログラム(94年)、全米州教育長協議会専務理事アンバック氏講演会(94年)に発展していった。いずれも日米間の教育関係者に画期的な刺激を与えたものと確信している。

日本語の授業アイデアコンテスト(95年)はすばらしい発想で、日本語教育に携わる人びとから高い評価を受けている。93年から発行しはじめた英文ニュースレターは、米国など英語圏諸国に配布され好評を博している。

中国関係の企画として最初に取り組んだのは、中国放送大学日本語講座の教材作成への協力(88年)、全中国大学生日本語弁論



大会後援(89年)などであったが、92年から全中国外国語学校中高生日本語弁論大会・日本語教師研修会を主催するようになった。この企画は、今は教師研修会だけに絞り込んでいるが、中国における中等レベルの日本語教育に大きな貢献をしていると思う。

当財団の図書寄贈事業は、内外において外国人のための日本語教育に従事している学校やNGOの有力な支えになってきた。What Is Japan? 特別図書寄贈プログラムも英語圏諸国の日本研究・日本理解に幅広い貢献をした。

10年にわたり発行して来た国際文化交流情報誌『ワールド・プラザ』を休刊し、今年からインターネットによる情報の発信と受信を行うこととした。この通信の活用は、当財団の今後の活動の焦点となるであろう。

当財団は、日本の学校でのアジア言語教育についての調査を始めている。新しく視野に入れるべき分野としては、在日外国人留学生および海外への日本人留学生をめぐる諸問題の調査であろう。今後の課題としては、民間財団の強みを発揮できる企画を見つけ出すことだろう。

当財団がここまで発展してきて、幾多の意義ある事業を遂行できるようになったのは、第一に野間会長の確固たるリーダーシップによる。次いで、歴代の常務理事、事務局長として活躍して来られた市原氏、高嶋氏、牛島氏の創意とご努力によるものと思う。

目次

刊行にあたって—会長 野間 佐和子	2
国際文化フォーラムの10年—理事長 黒田瑞夫	4

I

国際文化フォーラム(TJF)10年の歩み

1. プロローグ	設立前後の時代背景	10
	設立の経緯	12
	設立の背景と出捐母体	12
	6社共同による財団の誕生	13
	10年の概要	14
	財政と事務局運営	15
	人のネットワーク	16
	事業のあらまし	16

2. 事業を ふりかえって

日本語教育 第1期	19	
	海外で高まる日本語教育のニーズへの対応	19
	諸外国における日本語教育の現状と課題の把握	20
	一般成人を対象とした実用日本語教育への対応	21
	大学から初等中等教育へ広がった日本語教育	22
日本語教育 第2期	24	
	海外の初等中等教育における日本語教育のインフラ整備	25
	文化理解のための日本語教育の研究・促進	31
アジア言語教育	32	
	日本国内のアジア言語教育の普及状況の把握	32
	日本の高校中国語教育への支援	33
日本文化紹介	35	
	出版メディアによる日本文化紹介	35
	出版文化を素材とした日本文化紹介展の開催・参加	35
図書寄贈	39	
	文化交流の媒体としての本の重要性	39
	TJFの図書寄贈プログラムの方針	40
	図書寄贈プログラムの概要	41
	受託事業	45
学術文化・教育交流	45	
	アジア・太平洋地域の人々との対話	45

国際文化交流の推進	47
『ワールドプラザ』の発行	47
『ワールドプラザ』特別事業	49
広報出版活動	50
広報出版物の編集出版	50
図書資料の編集出版	51
受託事業	53
インターネット・ホームページ	53
パソコンの導入とデジタル情報の共有化	53
TJFのホームページ開設	54

II

国際文化フォーラム(TJF)がめざすもの	57
----------------------	----

1. 事業の展望

「ことばと文化」
をキーワード
として

若い世代への外国語教育を推進	58
文化理解教育としての言語教育の促進	58
国内外の外国語教育を連繫	59
本を通じての文化理解プログラムの展開	60
事業プログラム一覧	61

2. メッセージ— TJFに期待するもの	63
3. 言語教育と文化理解プログラムを考える— 10周年記念座談会より	81

III

資料でみる国際文化フォーラム(TJF)10年の軌跡	85
年表— 国際文化フォーラムの10年	86
海をわたった日本の図書	92
文化交流としての編集・出版活動	94
『ワールドプラザ』— 文化交流情報を発信し続けて	97
『国際文化フォーラム通信』— 一人の輪を求めて	107
<i>The Japan Forum Newsletter</i> — 海外とのネットワークを広げて	113
財団のプロフィール	115
あとがき	118



日本の小学生の一日の生活を紹介



タマサード大学と共催した
日本・タイ学術文化シンポジウム



第3回全中国中高生日本語弁論大会の
入賞者たち

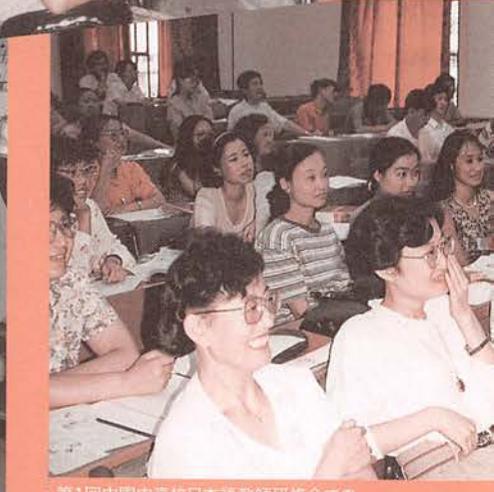
全米優秀教師賞に輝いた
ベギー・ハグマン教諭の日本語クラス



身振り手振りや筆談で自分の考えを伝え合う日中の高校生



米国教育関係者を招いたSTARプログラムで小学生と交流



第1回中国中高校日本語教師研修会での
授業風景



教科書を追う目つきは
真剣そのもの

I

国際文化フォーラム (TJF)10年の歩み



米国でも人気を呼んだ日本の漫画



日米教育長交流プログラムで有意義な意見交換



子どもたちは日本の漫画に目を輝かせた

国際文化フォーラム通信



私の好きな字

「龍」は、中国の神話に由来する伝説的な生物で、雲を駆け、雷を鳴らし、水を操る。また、龍は皇権の象徴として、中国の皇帝は「龍天子」と呼ばれた。日本でも龍は神聖な存在とされ、龍宮や龍神信仰が盛んだった。龍は、力強く、勇敢で、知恵に富んだ生き物と見られてきた。

「龍」は、中国の神話に由来する伝説的な生物で、雲を駆け、雷を鳴らし、水を操る。また、龍は皇権の象徴として、中国の皇帝は「龍天子」と呼ばれた。日本でも龍は神聖な存在とされ、龍宮や龍神信仰が盛んだった。龍は、力強く、勇敢で、知恵に富んだ生き物と見られてきた。

「龍」は、中国の神話に由来する伝説的な生物で、雲を駆け、雷を鳴らし、水を操る。また、龍は皇権の象徴として、中国の皇帝は「龍天子」と呼ばれた。日本でも龍は神聖な存在とされ、龍宮や龍神信仰が盛んだった。龍は、力強く、勇敢で、知恵に富んだ生き物と見られてきた。

『国際文化フォーラム通信』

創刊号表紙

設立前後の時代背景

1960年代から70年代にかけて、日本の高度経済成長と海外への経済進出によって、日本の世界における経済的プレゼンスは高まる一方でしたが、日本の輸出超過による貿易収支の不均衡は海外諸国との間に摩擦を生みだすようになりました。ニクソン・ショックに代表される日米間のコミュニケーションギャップも深刻化し、欧米文化に属さない国で唯一経済大国となった日本は、国際社会で孤立化する危機感をもつようになりました。日本社会の特異性が云々され、日本人論がブームとなるなかで、日本人は「エコミックアニマル」などと呼ばれ、必ずしも世界の人々に理解される存在ではなかったのです。このような動向に対処するために、国家的課題として国際文化交流を活性化し、海外における対日理解を促進させる必要があることが各界で指摘されるようになりました。そうした状況を背景に72年10月、公的機関として国際交流基金が設立されましたが、国際文化フォーラム(TJF)が設立された80年代に入っても、経済大国日本への期待と同時に、顔のみえない日本への不信感が強まっていました。

しかし一方、日本の目覚ましい経済発展は日本経済や科学技術に対する関心を世界的に喚起することとなり、70年代に入ると日本との経済関係を重視する観点からも、日本語学習に対する海外の関心が急激に高まりました。80年代に入ると、ジャパノロジストなど、それまで限られた人々のものであった日本研究や日本語学習へのニーズが質的に多様化し、量的にも増大したのです。高まる海外の日本研究者・日本語学習者からの要請に対し、日本は積極的な対応を迫られていたのです。

80年代に入って日米貿易摩擦を解消するために、日本企業がアメリカでの現地生産に乗り出すようになったのがきっかけとなり、経済界でも日本的企業経営のあり方や、企業と地域社会との関係が次第に見直されるようになりました。特に米国の企業が地域社会の公益活動をどのように支援しているかを調査する過程で、企業の民

間公益活動支援すなわち「企業フィランソロビー」に対する関心が高まりました。好景気を背景にして、90年前後より「1%クラブ」の発足などを含め経済界全体が「良き企業市民」や「企業の社会貢献」に関心を示すようになったのです。「企業メセナ、すなわち企業による文化支援」が関心をひいたのもこの時期でした。企業が利潤を離れて公益活動に関わる時代が日本にも訪れていたのです。

TJFは、こうした大きな時代の潮流のなかで、国際文化交流の推進と対日理解の促進、といういわば日本の国家的な課題に対して民間の企業財団としても取り組むことが期待されて設立されたのでした。財団設立当初、日本語・日本文化の普及と、それを通じた国際相互理解と日本国内の国際文化交流の推進を事業の基本方針としたのは、まさにこのような時代背景があったからでした。

しかし、80年代末から90年代にかけて、冷戦の終結に伴って国際社会の構造も変化し、新たな国際社会の秩序が模索されるようになりました。通信・交通手段の飛躍的進歩により、国際的な人・物・情報の移動が劇的に増大し、様々な領域で国際的な相互依存関係が日増しに緊密になっていきました。また、解決しなければならぬ地球的課題が次々に浮上してくるなかで、次第に地球共同体の意識も少しずつ芽生えてきました。国境を超えた人々の協力関係が生まれ、国際文化交流の役割もまた変化してきたのです。

日本においても、この時期から内なる国際化が盛んに叫ばれるようになり、国際文化交流の目的や形態も変わっていきました。国家間の友好親善や相互理解という目的のもとに、公的機関が主体となって行ってきた国際文化交流が、共に協力しあって働く共生社会を地球に構築することをめざして、より実践的で日常化した活動となっていきました。交流の主体も、地方自治体、民間の公益団体、市民レベル、草の根レベル、NGO、ボランティア、若者と多様化し、特にこれまで個々の立場で活動してきた民間レベルの交流団体が中心的な役割を担いはじめるようになりました。

国際文化交流は、日本人が世界に向かって自己を表現するプロセスであると同時に、地球共同体を形成する世界の人々と接触しながら、相手を理解しようとするプロセスでもあり、またその接触を通じて自己を変革していくプロセスでもあります。「対日理解」という視点だけでは、国家を超えた協力関係を志向する新しい時代の文化交流の使命を全うすることはできなくなってきたのです。民間の立場から、その強みを生かして公益のために活動することの重要性がますます増してきたといえます。

国際文化フォーラム通信



『国際文化フォーラム通信』
第11号表紙



設立当時の「こあんない」

TJFの10年は、まさに世界が激変した時代であり、それに対応して日本の民間財団としての自覚と重層的で広い視野をもつことが何よりも要求されていたといえます。

設立の経緯

設立の背景と出捐母体

TJF設立の背景には確かに国際文化交流や企業フィランソロピーを志向する日本社会全体の動向がありましたが、TJFの場合は、このような動向とは別に、出捐企業の中心母体である講談社の企業風土に、もともと文化や国際交流に対する深い理解があったことを見逃すことはできません。歴代オーナーの指導力もあって、狭い企業益の枠を超えた公益に対する見識が、国際文化交流という日本の枠を超えた幅広い公益活動支援を可能にし、また大きくそれを推進させていく原動力となったのです。

日本の出版人の代表として積極的に出版界の国際交流を推進した野間省一氏(1911-84、第4代講談社社長)は、その幅広い国際的活動を通じて、国際社会における日本の立場を鋭く認識していました。

野間氏は、日本の国際的立場や文化交流について次のように語っています。「日本は経済大国とよくいわれますが、この際、われわれ文化に携わるものといたしましては、単に経済大国ということではなくて、日本が文化大国となるという理想のもとに、そのリーダーシップを出版界がとっていく、といった意気込みで進む必要があるということを感じております」「世界の国々、各民族は、それぞれ固有の文化を有している。わたしは、各国、各民族が互いに他国の文化に接し、それによって自国の文化の向上をはかれば、人類の生活はさらに豊かになるはずであると常に考えています。また、世界の国々がそれぞれの文化と社会を互いに理解しあえば、平和的に共存し、戦争を防ぐことができるという信念をもっています。他国、他民族に対する理解不足や誤解が数々の悲劇を生んできたことは、歴史が私たちに示している通りです。従って、あらゆる国が文化交流を行うべきであると思います。それは一方通行ではなく、相互交流でなくてはならないし、相互理解なくして真の理解はありえないともいえます」

そして出版社という企業について、「本は文化財であり、出版社は文化財を生産する文化産業であるから、一般企業と違って儲かれ

ばいいというものではない」という信念を持ち、文化に深くかかわっている企業として、その利益の幾分かは社会に還元すべきであるという考え方は、その後もずっと後継者に受け継がれてきました。

事実、野間氏は、まず英文図書による日本文化の海外紹介活動を推進するため、63年に講談社インターナショナル株式会社を設立し、69年には、ユネスコ本部からの勸奨をうけて、アジア地域の図書開発と振興を目的とした財団法人ユネスコ東京出版センターを設立するのに奔走しました。同センターは71年には現在のユネスコ・アジア文化センターに改組され、その活動はアジア太平洋地域の文化の保存と発展、そして識字事業へと拡大発展しました。さらに79年には野間アフリカ出版賞の創設や野間アジア・アフリカ奨学金留学生制度の設立など、一出版企業としては他に類を見ないフィランソロピー活動を展開していきました。

6社共同による財団の誕生

このような講談社の企業風土のもとで、野間省一氏の後を継いだ第5代社長野間惟道氏(1937-87)が、周囲からの要請もあって当時海外に高まりつつあった日本語学習への支援、さらに21世紀のグローバル化に向けて、異文化間の相互理解促進のための活動を行なうことが必要であると考え、財団の設立を提起するに至ったのです。

この提案は、長年にわたる講談社のフィランソロピー活動の流れから生まれたものですが、それとともに野間惟道氏自身、文学に造詣が深く、特にそれぞれの言語の奥にある文化を相互に認め、理解することによって初めて真の国際相互理解、文化交流が生まれるという強い信念をもっていたからにほかなりません。とりわけ日本語の普及に関して野間惟道氏は、日本文学を翻訳して海外に紹介するとともに、世界中の日本語学習者を支援して、直接日本語で日本の文学を読める人を一人でも増やしていきたい、と考えていました。戦後教育をうけた人間として、次の時代を担う若者に、相互理解のために尽力して欲しいという強い願いが財団設立にこめられていたのです。

86年7月、講談社の社内に財団設立準備のためのプロジェクトチームが発足し、「言語と文化」をキーワードに財団設立の第一歩を踏み出しました。一般企業の資本金にあたる財団の基本財産については、財団の独立性を明確にするため、講談社一社の出捐ではなく、講談社と業務上の関係が深く、かつまたフィランソロピー活動に





設立間もない頃の理事・評議員会

熱心であった王子製紙株式会社、十條製紙(現日本製紙)株式会社、大日本印刷株式会社、凸版印刷株式会社、株式会社三菱銀行(現東京三菱銀行)の計6社の共同出捐によることとしました。財団の名称も、出捐企業名を冠するのではなく、広く世界に向けて公益活動を実践する意味で、国際文化フォーラム(The Japan Forum)としました。

87年6月2日、講談社内に国際交流推進室が設置され、財団事務局の体制を整え、6月22日、財団法人国際文化フォーラムは外務省を主務官庁として産声をあげました。ただ惜しむらくはTJFに熱情を注ぎ、自ら陣頭指揮をとっていた野間惟道氏が発足10日余り前の6月10日、思いを残しながら急逝したことです。あまりにも突然の死に、TJF関係者はただ茫然自失、仕事も手につかない有様でした。

志半ばで倒れた夫の遺志を継いで、89年よりTJFの運営にあたったのは、現会長であり現講談社社長である野間佐和子でした。そして、発足まもないTJFを応援し支えてくださったのが出捐企業5社のトップをはじめとする理事・評議員の方々でした。野間惟道氏自らの強い意志によって委任された理事・評議員の各氏は、それぞれ重職にあつて多忙を極めるなか、この10年間終始変わることなく財団の運営に参加してくださいました。こうして設立から今日にいたるまで、出捐企業や賛助会員をはじめとする、多くの方々のご理解、ご支援、ご協力のお陰で、TJFは公益性の高い事業を追求して行くことができました。

10年の概要

民間公益財団の歴史の古い米国では、財団の独立性が厳しく問われます。財団同士の国際会議でも、資金を提供する企業や政府のコントロールから独立して活動することの難しさがよく話題にのぼります。狭い国益や企業益に振り回されると、真の公益活動ができないからです。社会が必要としているにもかかわらず、往々にして第1セクターや第2セクターではできないことをやるところに、第3セクター(the third sector, 日本では半官半民をさして使われる場合が多いが、本来は民間非営利部門をさす)の存在理由があるのです。

財団の独立性を左右するのは、その財政と組織の仕組みであり、「自主独立の事業」を可能にする「人と資金」が確保されていることが



『ワールドプラザ』副刊号表紙

必要です。TJFも、「第2の創業」(第2期)と位置づけた92年度(設立5周年)を迎えるにあたって、より社会性・公益性の高い財団活動を遂行するために、資金・人・事業という三つの側面から、財団の独立性を強化することに努めました。その概略は以下の通りです。

財政と事務局運営

まず財政の自立について検討し、基本財産の運用益で安定して事業を継続できるようにするために、講談社および出捐5社はTJFの基本財産の増資を基本的に承認しました。92年3月の理事会において、設立当初3億円だった基本財産を向こう5年間で20億円にする増資計画が正式に決定されました。増資計画は予定どおり実施され、10周年を迎えた今年、基本財産は20億円となっています。

しかし、20億円となったとはいえ、最近5年間の予想外の金利の低下により、基本財産の運用益だけでは事業を実施することが困難で、引き続き出捐企業6社から寄付金をいただいております。「第2の創業」にあたって意図した財政の自立は残念ながらまだ達成されてい



状です。民間企業や個人からの無償の支援をお願いして事業支出をおさえるとともに、自助努力として他の機関からの助成金や民間企業・個人からの賛助金を得て、事業費の捻出に取り組んでいます。TJFの基盤を強化するには、今後より広く一般に呼びかけ、TJFの事業に賛同していただける賛助会員を増やす努力をしなければならぬと痛感しています。

設立以降4年間、TJFの事務局は実質的には、講談社の一部局(国際交流推進室)によって運営されていましたが、第3セクターとしての財団活動を行うためには独立性を確保することが必要であると考え、91年国際交流推進室を解消し、TJFの事務局を講談社から独立させたのです。スタッフも、設立当初は出向者で構成されていましたが、91年12月にTJF独自の職員として国際交流活動プロバ一の人材を外部から公募し、事務局を再スタートさせました。

人のネットワーク

設立当初は、事務局のインフラ整備を進めながら、未だ日本では歴史の浅い民間の公益財団として国際文化交流事業のあるべき姿を模索していくことは容易なことではありませんでした。事務局のスタッフも、編集・出版の分野においてはノウハウを身につけていたものの、国際文化交流の分野は初めてというメンバーがほとんどでした。しかし、編集・出版の経験が国際文化交流事業に新風を吹き込むことも一方では期待されていました。

この誕生まもないTJFを見守り、様々な情報を提供し助言してくださったのが外務省、国際交流基金、(社)日本語教育学会、(財)ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)、(財)日本国際交流センター(JCIE)、(財)国際文化会館などの国際文化交流の先人たちでした。初期の事業に、他の機関との共同・共催事業、あるいは後援・協力事業などが多いのは、そのような事情が働いていたためでした。共に仕事をしていく過程で、一歩ずつ着実に文化交流のノウハウを身につけ、力をつけて成長していくことができたのは、これらの多くの方々のお陰であると感謝しています。

財団の理念や考え方をしっかりもって事業を進めていき、その上で志を共にする人々に協力を求め、また協力をしていく。言い換えれば、人のネットワークこそが財団の財産であり、支えであることを肝に銘じて歩んできました。事実、TJFの自主事業に対して、個人、ボランティアグループ、民間の財団、企業、そして公的機関など、あらゆる分野の方々が協力の手を差し伸べてくださっています。今後は海外のカウンターパートとのパイプの強化や、関連事業を実施している国内の他の機関との情報交換や協力関係が一層大切になってくるものと思われます。



中国日本語教師と大連在住日本人との集い

事業のあらまし

TJFは「日本語と日本文化を通じて国際相互理解と国際的な文化交流を促進するための事業を行う」ことを目的として設立されました。しかし、その遠大な使命を全うするための具体的な内容と方法は、時代の移り変わりのなかで常に将来をにらんで探っていかなければなりません。TJFは、助成財団の多い日本の財団のなかで、数少ない事業型財団(助成事業も一部実施しているが)の一つであり、そのことによって自らの事業理念を掲げ、コン



日本語教育を行っている小学校(米国)



日本語の授業の様子(米国)

セプトを定め、時代を先取りしながら主体的に事業を実践していかなければならなかったのです。TJF10年間の事業の歩みは、設立5周年にあたる1992年を境に、第1期(1987-91年度)と第2期(1992-96年度)の二つの時期に分けてたどることができると思います。

第1期は、いわば揺籃期を経て、事業の3本柱が定着していく5年間でした。日本語・日本文化

化を通じての国際相互理解を基本テーマに、対日理解の促進と日本国内の国際文化交流の推進という二つの目標に向かって、1)海外における日本語教育に対する支援事業、2)日本文化の海外への紹介と文化交流事業、3)『ワールドプラザ』の発行を軸とする日本国内の国際文化交流の推進事業、という三つの事業の骨格がこの時期に形成されました。

91年度に財政・組織の両面でTJFの独立性が高まったことは、先に述べたとおりですが、事業面でもそれまでの5年間の蓄積のもとに、国内外の状況や、時代の流れを読み取りながら91年度から92年度にかけて事業の見直しが行われました。見直しのなかで最も重要な点は、国際的な相互理解を深めるためには、日本語や日本文化を一方向的に海外に普及するのではなく、相手の言語や文化との双方向的な交流のなかでお互いの理解を深めていく活動を進めることが必要だという認識に立ったことでした。すなわち、それぞれのことばと文化をもつ世界の人々と、共に生活し、働き、協力しあう社会を作ること、もはや避けられない時代の要請であり、とりわけ日本にとっては、アジア・太平洋地域の人々とお互いに固有の文化を尊重しながら、普遍的な文化を豊かにしていくために、たゆまない努力を続ける必要があるという考えでした。

その遠大な目標を達成する一つの方途として「ことばと文化」を通じた文化間の相互理解の促進事業を、特にこれからの時代を担う若い世代に対する教育と出版メディアを通して実施すること、すなわちアジア・太平洋地域の若者たちが、お互いの「ことばと文化」を学びあえるような環境をつくっていくことが設立者の遺志でもあり、また出版関連企業が支援する財団にふさわしい事業ではないかと



日本語の授業アイデアコンテストに応募した日本語教師と生徒たち(オーストラリア)

というのが見直し案の骨子でした。

その結果、日本語教育事業を言語教育事業という、より大きな枠組みのなかに位置づけ、日本語教育への支援事業に加えて新たに国内のアジア言語教育への支援事業を実施することが提案されました。日本にとって最も協力関係が必要なアジア・太平洋地域の人々との相互理解を深めるために、アジア・太平洋地域の日本語教育を支

援するとともに、日本の若い人々が英語ばかりでなく、アジア地域のことばも学べるように支援しようというものでした。そして両者の橋渡しをすることがTJFの使命ではないかという趣旨でした。

こうして93年3月の理事・評議員会(93年度の事業計画を決議する会議)において、今後TJFの事業は「ことばと文化」をキーワードとして、多言語・多文化時代の認識にたつてさまざまな文化間の相互理解を最終的にめざすことを確認しました。その手段として言語教育事業では、アジア・太平洋地域(中国、米国、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、インドネシア、タイ、極東ロシアなど)の初等中等教育における日本語教育と文化理解プログラムを推進するとともに、新たに双方向の交流を行うために、国内の中等教育におけるアジア言語教育と文化理解の促進を図ることが承認されました。また、文化紹介・交流事業は、図書寄贈事業を中心とする「本」を通じての文化理解の促進に絞り、国際文化交流の推進事業としての『ワールドプラザ』は引き続き充実していくことを決定しました。まさに野間惟道氏が標榜した「21世紀を担う若者のために」という財団設立の基本理念は、その後の財団活動にしっかりと根づいていったといえます。

以下、具体的に、1)言語教育事業(日本語教育支援事業、アジア言語教育支援事業)、2)文化紹介・文化交流事業(日本文化紹介事業、図書寄贈事業、学術文化・教育交流事業)、3)日本国内の国際文化交流推進事業としての『ワールドプラザ』の編集・発行や、その他の広報出版活動について、10年間の軌跡をたどってみたいと思います。

2.

事業を ふりかえって



日本語を学ぶ小学生(オーストラリア)

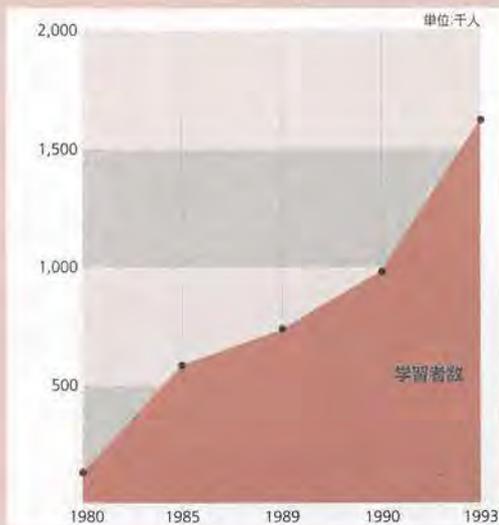
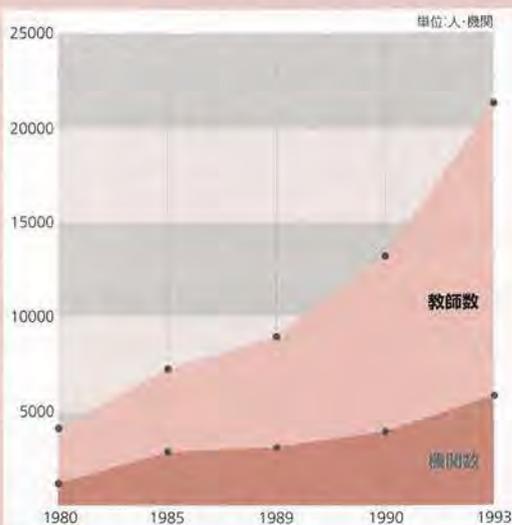
日本語教育 第1期

海外で高まる日本語教育のニーズへの対応

80年代に入ると、海外における日本語学習熱が急速に高まりましたが、これは日本経済の発展と日本の国際的プレゼンスの向上に伴って、仕事や観光などで日本語を必要とする一般成人が日本語に関心をもちはじめたことと、各国の学校教育に日本語教育が導入されたことによるものでした。言い換えれば、一般成人向け目的別実用日本語と低年齢層向け学校教育の教科としての日本語教育に対するニーズが急激に高まり、日本語学習者は量的にも、質的にも大きな転換期を迎えました。

このような要請に応じて、日本語の学習を希望する人々を積極的にサポートしていったらば、現地要請主義に基づいた望ましい形で日本語に習熟した人がもっと世界に増えたでしょうし、一方、外国語

グラフ2-1・2-2 ■ 海外の日本語教育実施機関数・教師数・学習者数の推移



参考資料: 国際交流基金「海外の日本語教育の現状-日本語教育機関調査-1993年-」

の苦手な日本人も、かれらと直接日本語でコミュニケーションができ、相互理解を深めることによって内なる国際化につなげることができたかもしれません。しかし、その重要性を十分日本人が認識しなかったのは大変残念なことでした。外国語としての日本語の目的別学習者別教授法の整備どころか、教材も教師も極端に不足している状況が続きました。本来はもっと抜本的な対応策を練らなければならない状況のなかで、TJFは民間の立場から少しでもこうしたニーズに応えようとしてきました。

第1期(1987～91年度)は、海外における対日理解の促進をめざして、日本語や日本文化を海外へ発信することに専念した時期でした。海外での日本語教育を支援する機関としては、国際交流基金、国際協力事業団、通産省の海外技術研修協力、JETROといった政府レベルの機関や地方自治体(日本語教師派遣など)のほか、少数の民間団体がありましたが、海外で高まる日本語教育へのニーズに応えるには、教師の養成・教材開発などのインフラ整備は不十分な状態でした。

TJFは、海外の日本語教育を支援する事業として、外務省や国際交流基金などからのバックアップをうけながら、まず海外の日本語教育の問題点や課題を整理することを目的として、TJF設立記念と銘うった日本語に関する国際シンポジウムやセミナー、研究会、講演会、調査研究を実施しました。これらの事業を通じて、日本語教育に関する情報や人脈が蓄積され、TJFの具体的な事業の方向性が形成されていきました。地域的には、中国と米国に日本語教育支援事業の基盤を構築し、特に中国において先駆的なプログラムを開発しました。内容的には、当時最もニーズの大きかった一般成人を対象とした目的別実用日本語教育に焦点をあてて調査研究を進めていくとともに、初等中等教育レベルの日本語教育に対するサポートプログラムの開発にも着手していくことになりました。

諸外国における日本語教育の現状と課題の把握

日本語国際シンポジウム(1988年)



■「日本語国際シンポジウム：諸外国での日本語教育の現状と問題点」(1988年3月14-15日、東京、国際交流基金と共催)

諸外国における日本語教育の現状と課題を明らかにすることを目的として、設立記念シンポジウムを2日間にわたって開催しました。両日とも300人を超える聴衆が参加するなか、インドネシア、オーストラリア、韓国、タイ、中国、日本を代表するパネリスト11名が各国の日本語教育の現状につ



第2回北京市青少年日本語コンテスト(中国)

いて報告し、熱のこもった討論を行いました。特に日本語学習者の増加と学習目的の多様化の二点が指摘され、教師、教材の整備について日本側の対応が求められました。

(シンポジウム報告書:『海外における日本語教育の現状と将来』)

■エレノア・H・ジョーデン講演会「日本語をどう教えるか」(1989年1月18日、東京)
ジョンズ・ホプキンス大学の言語学の教授で日本語教育の第一人者として、長

年日本語教授法の開発・研究と実践に従事してきたジョーデン氏の来日を機に、講演会を開催しました。講演会でジョーデン氏は、ジョーデン・メソッドによる日本語教育法を紹介しつつ、日本語習得と日本文化理解は表裏一体であること、日本語教師は日本語・日本文化とともに、学習者の母語・母文化も理解しなければならないことを力説しました。

一般成人を対象とした実用日本語教育への対応

■国際文化フォーラム研究セミナー

「実用日本語教育の問題点」(1987年12月16日、東京)や「実用日本語研究会」(1988年7-10月、東京)などを開催するとともに、内部でも調査研究を始めました。

■北京市青少年日本語コンテスト(1988-96年、北京市、北京市青年連合会と共催)

中国の改革開放政策の推進により、日中間の交流も経済、医療、学術、芸術など様々な分野で盛んになるとともに、日本語のできる人材に対する需要が高まっていましたが、一般の人が自分の日本語の能力を客観的に測定する機会は、当時まだありませんでした。その要請に応えるため、北京市在住の青少年の日本語学習を奨励することを目的として、実用日本語の能力を測定する日本語実力試験、日本語弁論大会、カラオケ大会などからなる日本語コンテストを北京市青年連合会(会員約70万人の大組織)と共催しました(88年は後援、89年より共催)。

しかし、同コンテストは国際交流基金の日本語能力試験が普及するようになったこともあって、96年5月、第10回の記念祝典をもって一応一つの区切りをつけました。同コンテストは毎回盛況をきわ

め、10年間で6歳から39歳までの北京市民が延べ約10万人参加しました。日中共同で作成した過去9年分の試験問題を、実用日本語の教材としても使えるように公開することとし、『北京市青少年日本語コンテスト10周年記念日本語実力試験問題集1987年～1995年』として96年5月に発行しました。

■中国放送大学日本語講座の教学大綱(シラバス)の策定と教材制作への協力(1988年7月～1991年10月、北京市、中国放送大学への協力、NHKインターナショナルとの業務提携)

実用日本語の普及にかかわる主要事業として、日本の政府と民間の援助により中国の放送大学「中央広播電視大学」が90年9月の新学期から開講したテレビ衛星放送「日本語講座」のための4種類のシラバスの策定と教材制作に全面的に協力しました(中国放送大学出版社と講談社の共同発行)。1年目は基礎日本語の教科書2冊、2年目は専門日本語講座として科学技術、観光、外国貿易の3種類の実用日本語の教科書各1冊を制作しました。放送大学の正式受講者だけでも10万人を超え、このような大量の人を対象とする実用日本語教育は世界でも初めてのことでした。またテレビ放送というメディアの機能を十分に生かし、映像、音声、活字教材を立体的に組み合わせた教授方式を採用したことも注目を浴びました。

大学から初等中等教育へ広がった日本語教育

■全中国大学生日本語弁論大会(1989年12月20-22日、北京市、北京外国語学院[現北京外国語大学]主催の大会を後援。以後92年6月の第4回大会まで共催)

89年、中国で初めて全国的な日本語弁論大会が開催され、これを後援しました。全中国の19の大学から選抜された学生21名が参加しましたが、この大会は、当時まだ多くの困難を抱えていた中国の学生を力づけたばかりではなく、日本語教師間の情報交流を

促進し、教師にも力強いエールを送ることができました。TJFとしては同大会を後援・共催することによって、中国各地の主要大学における日本語教育の状況を把握するとともに、大学レベルの日本語教師と緊密な関係を築くことができました。同弁論大会は、他の大学でも類似の大会を開催するようになったため、第4回をもって一つの区切りをつけましたが、「若い人を育てる」という大会の理念は、TJF

茶の湯を楽しむ留学生





JALCAPプログラム：
 Wisconsin州の小学校での日本語の授業

の第2期の事業として始まった全中国外国語学校中高生日本語弁論大会に引き継がれていきました。また、北京外国語大学、上海外国語大学、吉林大学など諸大学の教授陣からは、その後のTJFの中等教育レベルの日本語教育支援事業に対して変わることのないサポートをいただいております。

■米国における日本語教育助成プログラム

米国では、初等、中等、高等教育を問わず、最もニーズの高かった日本語

教師の養成と日本語教材の開発に対応するいくつかの助成プログラムを実施しました。特に、米国で中等教育レベルの日本語教育が最も盛んなワシントン州において、初期の段階から助成事業を行いました。また、その後のTJFの米国における日本語教育支援事業の重要な拠点となったウィスコンシン州に対する協力事業もこの時期にはじまりました。

各州、各地域および各大学主催の日本語教師研修会、ワークショップ、研究会に対しても助成を行いました(助成対象となったプログラムについては資料編の「年表」参照)。

■ワシントン州日米協会主催事業への協力

州内に広がる高校の日本語教育に対応するために、ワシントン州日米協会は数々の先駆的なプログラムを実施していましたが、TJFは過去10年にわたって良きパートナーとして同協会と協力関係を築いてきました。特に米国ワシントン州高校生日本語スピーチコンテスト(シアトル市)や、ワシントン州高校生サマーキャンプ(イトンビル)には、人的および財政的な面で協力しました。後者は米国の高校生が1週間、日本語だけで生活し、日本を疑似体験するという、米国でも初めての試みでした。その後、これにワシントン州在住の日本人家庭にホームステイするプログラムを組み込むなど、ワシントン州日米協会のユニークな日本語・日本文化理解プログラムに協力したことは、TJFの文化理解プログラムを推進する上で大変参考になりました。

■中等教育向け日本語教材の開発

中等教育用教材の不足を補うため、ワシントン州の高校生用日本語教科書、井上啓子著 *Hello in Japanese* (『こんにちは日本語』、第1巻～第3巻、1990-95年刊)への編集制作に協力しました。



日本語の授業で箸の使い方を勉強
(英国)

■第2回JALCAP(日本語と日本文化の教師助手派遣)事業(1990年8月～91年6月。ウィスコンシン州、ウィスコンシン州教育庁主催への協力。91年度からは後援)

JALCAPは、日本の若者がウィスコンシン州の小・中・高校の日本語の授業の助手や日本文化紹介役として1年間ボランティア活動に従事するプログラムで、この種のプログラムとしては先駆的なものです。ウィスコンシン州では教育庁が州内の小・中・高校に日本語教育を導入することに関心をもっていたこともあり、同プログラムの受け入れを機会に、多くの学校で日本文化理解に重点をおくクラスを開設しました。これをきっかけに、同州の教育庁とTJFの共同作業が始まり、それまで日本語教育の素地さえなかったウィスコンシン州の小・中・高校に日本語教育を導入することに取り組むことになったのです。JALCAPプログラムは1993年に全米を対象とする国際交流基金のJALEXプログラムに引き継がれ、現在も6名の日本語教師助手が同州に派遣されています。

日本語教育 第2期

第2期(1992～1996年度)を迎えるにあたって、日本語教育支援事業に関して次のような検討を行いました。

第一に、財団の事業を明確にするため対象を絞り込むこと。まず学習者については、第1期においては青少年から、大学生、研究者まで幅広く支援してきましたが、何よりも大事なことは、異文化理解(国際理解)教育の立場から次の時代を担う小・中・高校生に対する外国語教育(日本語教育)に取り組むことではないかということになりました。海外における日本語学習者の低年齢化に应运の選択でもありました。対象地域についても、アジア・太平洋地域に限定することにしました。

第二に、日本語教育の最終目的を文化理解・国際理解におくこと。第1期では、一般成人向けの実用日本語の普及に関心をもっていた時期がありましたが、相互理解という目標に照らして、子どもたちを対象とする文化理解・国際理解教育の一環としての日本語教育に焦点をあてることになりました。多言語・多文化の共生が時代の要請であるという認識にたつて、日本語・日本文化を捉え直すとともに、小・中・高校での外国語教育の目的は、実際のコミュニケーションに使える言語の運用能力を習得することだけではなく、新たな言語と遭遇することによって、自言語・自文化を見つめ直し、地球的視野と



第6回北京市青少年日本語コンテスト

多文化理解への態度を身につけることであり、そのためのサポートをすることに意義があったとしたのです。

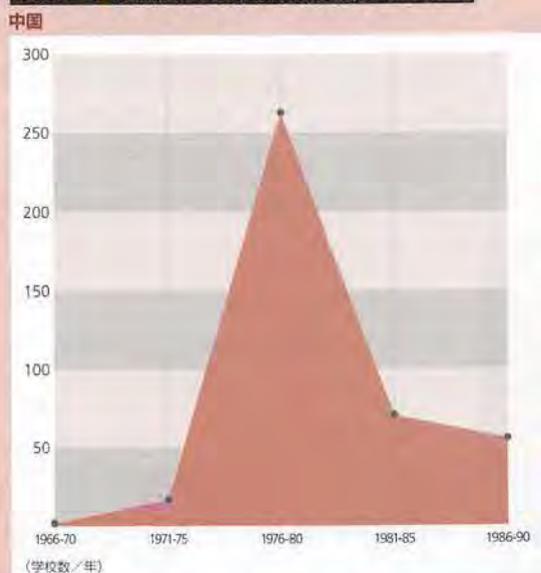
第2期の日本語教育支援事業は、1)アジア・太平洋地域の初等中等教育における日本語教育のインフラ整備への協力と、2)文化理解のための日本語教育の開発プログラムの実施に大別できます。前者については第1期で事業を開始していた中国と米国を中心に事業を推進しました。

海外の初等中等教育における日本語教育のインフラ整備

海外の日本語学習者の低年齢化は80年代に入って急速に進み、初等中等教育における学習者数は90年には全学習者の67%を占めるようになりました。特に韓国、オーストラリア、中国において著しい増加をみました。

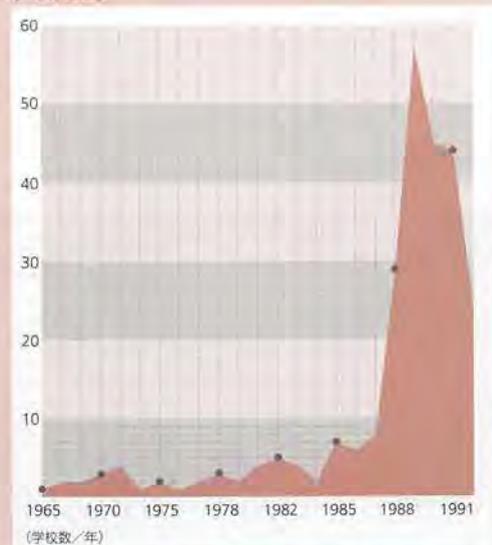
中国においては、72年の日中国交回復以降、改革開放政策の影響もあって社会的に日本語学習ブームがひろがり、70年代後半には大学のみならず中・高校でもめざましい勢いで日本語教育が導入されました。中国の中等教育における外国語教育の主流はもちろん英語ですが、第1外国語として日本語は英語、ロシア語に続いて盛んでした。特に77年に全国統一大学入試科目に日本語が加えられたことと、78年に日中平和友好条約が調印されたことによって、東北三省と内蒙古自治区を中心に(91年の調査では中等教育における学習

グラフ3・4 ■ 中等教育における日本語教育開始学校数の推移



資料：『国際文化フォーラム通信』第21号(1993年12月)

オーストラリア



資料：Unlocking Australia's Language Potential: Profiles of 9 Key Languages in Australia, Vol. 7-Japanese, 1994

注：調査対象となった713校の内、回答のあった258校に関する調査結果

グラフ5 ■ 米国公立高校の外国語学習者数

	上段：1990年	下段：1994年	伸び率(倍)
スペイン語	2,611,367	3,219,775	1.2
フランス語	1,089,355	1,105,857	1.0
ドイツ語	295,398	325,964	1.1
イタリア語	40,402	43,838	1.1
日本語	25,123	42,290	1.7
ロシア語	16,491	16,426	1.0
その他	178,789	247,414	1.4

資料：Foreign Language Enrollments in Public Secondary Schools, 1994
American Council on the Teaching of Foreign Languages, 1996

者数全体の9割を占めている)日本語教育を実施する中・高校が飛躍的に増加しました。しかし外国語教育が第1外国語のみとあって、英語を志望する生徒が増えるにつれて、中・高校の日本語学習者は83年(推定30万人)を境に減少傾向をたどり、90年には約12.2万人に落ち込みました。日本側からの援助のないなかで、教師や教科書・教材の不足が深刻化していきました。本腰を入れて教師の養成や教材開発に乗り出すべき時がきていたのです。

一方、米国やオーストラリアなど北米、大洋州地域の国々では、80年代後半に初等中等教育レベルの日本語教育機関が急増し、教師、教材の不足を訴える声が高まっていました。現在も米国においては、公立の中・高校の外国語教育はスペイン語、フランス語、ドイツ語が主流で、日本語は学習者の少ない外国語の一つですが、それ

でも学習者数の伸びが一番高い外国語として注目されています。

- 全中国外国語学校中高生日本語弁論大会
第1回…1992年7月19-22日、長春市、長春外国語学校と共催
- 第2回…1993年10月15-19日、武漢市、武漢外国語学校と共催
- 第3回…1994年10月3-7日、南京市、南京外国語学校と共催
- 第4回…1995年10月9-13日、上海市、上

第4回全中国外国語学校
中高生日本語弁論大会





第2回中国中高校日本語教師研修会
(中国・大連市)

海外国語学校と共催

中国の中等教育における日本語教育支援事業の一環として、中国各地の外国語学校(中国の中高校の外国語教育において指導的役割を果たす中高一貫のエリート養成校)を拠点に、年に一度、日本語弁論大会および小規模の日本語教師研修会を開催しました。

大学生を対象とする日本語弁論大会は、TJFが開催して以来、中国各地で行

われるようになりましたが、中高生を対象とする全国レベルの大会はこれが初めてでした。首都北京市で行われるイベントが多いなかで、地方で開催したことも注目されました。日本語教育が盛んな東北地方の拠点である長春市を皮切りに、武漢、南京、上海の各外国語学校で4回連続して開催し、中国各地に外国語学校、大学関係者とのネットワークをつくることができました。

弁論大会には毎年日本語教育を実施している外国語学校8校と外国語学校に匹敵するレベルの普通中学3～5校(中高一貫校)からそれぞれ代表選手2名と引率教師1名が参加し、極めて高いレベルの弁論を披露しました。会期中、引率教師のための短期教師研修会も行いました。南京大会では修学旅行で南京を訪れていた日本の高校生との交流も行い、また上海大会では上海日本人学校の生徒2名に弁論大会へ特別参加してもらおうとともに、日本人学校の中学生全員と大会参加選手および上海外国語学校の生徒たち(英語・フランス語・ドイツ語科からも参加)との様々な交流プログラムも実施しました。日本人の生徒と会うのは初めてという選手も多く涙の別れの一幕もありました。

本弁論大会と並行して課題テーマによる作文コンクールを実施し、大会に参加できなかった生徒の作文の中から優秀作を選び表彰しました。これらの作文や弁論をまとめて弁論集(中国語の教材としても使えるように中国語も併記)として刊行し、94年度からはこの弁論集を中国語教育を実施する日本の高校に寄贈しました。

弁論大会は年々盛り上がりを見せていたものの、日本語教育のインフラを根本から整備するには、弁論大会や作文コンクールよりも教師の養成と教科書・教材の制作の方が急務であるとの意見が日中双方で大勢を占めました。TJFとしては、資金の制約もあることから、96年度より集中して本格的な教師研修会の開催に取り組むことにしました。

■中国中高校日本語教師研修会

第1回 1996年8月5-16日、長春市、長春外国語学校・中国教育学会外国語教学研究会・吉林省教育学院と共催

第2回 1997年7月20日～8月1日、大連市、大連教育学院・中国教育学会外国語教学研究会ほかと共催

中国側からの強い要請を受けて、前記弁論大会に参加していた外国語学校の教師に加えて、中等教育の日本語学習者が集中する東北三省・内蒙古自治区の普通中学(中高一貫校)の教師も対象に入れた教師研修会を行うことにしました。第1回は、弁論大会の第1回開催地であった長春で、外国語学校の教師17名、東北三省・内蒙古自治区内の拠点となる普通中学の教師26名、各地域の日本語コンサルタント4名を対象に、教師の日本語能力および日本語教授法の向上を図ることを目的として開催しました。

第2回は、研修機会の少ない普通中学の教師のみを対象として、42名の教師と6名のコンサルタントに対し研修を行いました。2回の研修会とも、若手からベテランまでを含む日本語教育専門家に講師をお願いし、10日間という短期間でしたが、密度の濃い講義を行っていただきました。第2回の研修会では、大連在住の日本人との交流を行うとともに、日本の高校の中国語教師との交流も行い、両国の外国語教師の交流の第一歩を踏み出すことができました。同研修会には官民間問わず多くの方々からの資金援助や協力をいただき、日中共同事業として大きな成果をあげることができました。

■中国中高校日本語教科書の編集協力

4事業年度にわたる弁論大会の開催を通して蓄積されたノウハウとネットワークを基盤として、1996年度以降は普通中学(中高一貫)をも含めたより根本的な中・高校の日本語教育のインフラ整備支援、すなわち教師研修会の実施と教科書編集協力に事業の重点を移しました。

中国国家教育委員会の指導により、中・高校の日本語教育に関する教学大綱が95年10月に改訂されたのに伴い、向こう6年間にわたって、中・高校生向けの日本語教科書6冊が改訂されることとなりました。国家教育委員会の直属機関である課程教材研究所の強い要請に応じて、国際交流基金は教科書編集への財政的支援をすることを決定し、TJFも課程教材研究所、中国日本語教材日本側編集委員会、国際交流基金からの要請を受けて、教科書編集事業の日本側事務局として協力することとなり、編集会議の設営、中国側との連絡、著作権交渉や写真の提供などに尽力しています。97年6月



日本語カリキュラムガイド制作現場

には高校1年生用の第1分冊が完成しました。

■米国ウィスコンシン州日本語カリキュラムガイドの制作助成

米国では、東海岸や西海岸、ハワイなど日本語教育がもともと盛んな地域ではなく、あえてそれまで未開拓の地であったウィスコンシン州を拠点として事業を展開しました。同州の教育庁が主導する州内の公立小中高校への日本

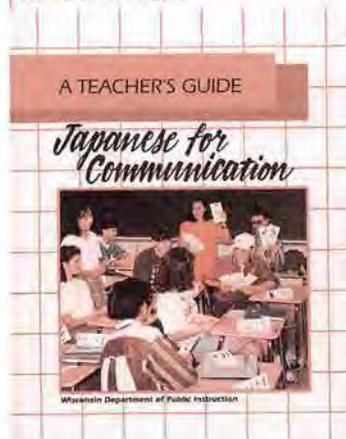
語教育の導入に協力して、米国における初等・中等教育レベルの日本語教育のモデルを構築することをめざしました。

まず教育庁が主催する日本語教師助手の派遣プログラム(JALCAPプログラム、1989-92年に計104名の若者を派遣)を後援する一方、州内の小・中・高校の日本語教育の学習指導指針となる日本語教育カリキュラムガイドと教師用指導書(*Japanese for Communication: A Teacher's Guide*)の制作に対して、4事業年度(92年7月~95年12月)にわたって計40,000米ドルを助成したほか、物心両面で完成まで協力しました。

本カリキュラムガイドは全米で初めて教育庁によって出版されたもので、小・中・高校における日本語教育の達成目標を明確にし、テーマ別に学習内容(文法項目、語彙、構文、表現例)を網羅するとともに、多様化している日本語教育現場に対応できるよう、日本語のレベル、学習期間を問わず、どこからでも始められる弾力性のある構成になっています。本ガイドの内容および使用に関して、教育庁主催で州内の日本語教師を対象に研修会も開催されました。小・中・高校レベルの日本語教育の指針となるものが少ないだけに、本ガイドは現在TJFのホームページにも掲載されていますが、今後ウィスコンシン州ばかりでなく、米国各州、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドなどの英語圏の小・中・高校で日本語教育の指針として利用されることが期待されています。

また州内のオピニオンリーダーの理解を得るために、教育関連の各界の代表13名を日本に招聘するとともに、現地の日本語教師の養成にも協力してきました。その結果、同州は今では初等中等教育レベルの日本語教育が盛んな州のひとつに挙げられるまでになりました。84年には日本語教育を行っている学校(高校)はたった1校、生徒数15名でしたが、93年には72校、生徒数約1,400名、96年には68校、生徒数は2,100名に増加しています。

カリキュラムガイド表紙



TEACHING HIRAGANA IN 48 MINUTES

THE JAPAN FORUM

WITH

PROFESSOR HIROKO C. QUACKENBUSH



日本語ビデオ教材

■日本語教育副教材パックの寄贈

初等中等教育向けの日本語教材が不足していることを考慮して、教材開発の事前調査も兼ね、まず既存のもので使える教材を広く収集し、現場でのモニター調査を行うことを計画しました。日本の児童向け図書・教具なども含め、柔軟な発想と広い視野から教材選定委員会に初等中等教育用のパックリスト各1種類を選定していただきました。パックは各種視聴覚教材、教具、副読本、辞書、教師用参考書で構成され、絵カード、日本語かるた、絵本、おもちゃのお金なども含めました。選定した教材は、国内のインターナショナルスクールをはじめ、オーストラリア・米国の小・中・高校に寄贈してモニター調査を行い、現場のコメントおよび初等中等教育向け日本語教材についてのデータベースを作成(93年10月)した上で、TJFの教材制作計画をたてました。

■日本語教育のためのホームページ制作(1997年3月開設)(「インターネット・ホームページ」の項参照)

日本の子どもたちの生活紹介、日本語・日本文化項目説明、レッスンプラン、学習項目、情報の提供などから構成されています。

■米国日本語教師会・教師研修会に対する助成

米国西部中・高校日本語教師夏期訪日研修(1993年6月29日~7月25日、東京ほか)に対する助成、全米日本語教師会年次大会における初めての中等教育部会開催(1994年3月25-26日、ボストン、米国北東部日本語

教師会主宰)に対する助成、全米外国語教師協議会(ACTFL)年次大会への全米中等教育日本語教師会の初参加(1994年11月18-20日、アトランタ)に対する協力など、主に全米レベルおよび各州の初等中等教育日本語教師会主催の研修会に対して助成しました。

■「初等中等教育向け日本語副教材」ワークショップの開催(JSAA:オーストラリア日本研究学会第8回大会、1993年7月10日、オーストラリア・ニューキャッスル市)

オーストラリア日本研究学会において、TJFで選定した副教材の説明とそれを使ってのワークショップを開催。オーストラリアでは初めての事業でした。

■「ひらがな教授法」研修会(1993年7月12日、オーストラリア・シドニー市、国際交流基金シドニー日本語センターと共催)

上記ワークショップに続いて、カッケンブッシュ寛子教授による *Teaching Hiragana in 48 Minutes* を使っての模擬授業を開催、その模様をビデオに取め、教材を制作



ロシアでの日本語の授業風景

しました(1994年3月刊)。

■ロシア極東地域への日本語教師助手派遣事業(1992年10月～93年6月、ウラジオストク市、ユジノ・サハリンスク市)

外務省の強い要請を受け、日本・ロシア極東交流協議会の日本語教育支援の重点施策の一つとして単年度のみ実施しました。ウラジオストク市の極東国立総合大学と小・中・高一貫の第51番普通学校、およびユジノ・サハリンスク市のサハリン教育大学とリッツェ芸術学校に日本語教師助手をそれぞれ1名ずつ9ヵ月間にわたって派遣しました。教師助手は日本語教育および日本文化の紹介にあたるとともに、現地の大学でロシア語を学び、ロシア人と交流しながらロシア文化への理解を深めました。第2回以降は、国際交流基金と(財)外交協会が引き継ぎ、派遣地域を中央アジア諸国にも広げています。

文化理解のための日本語教育の研究・促進

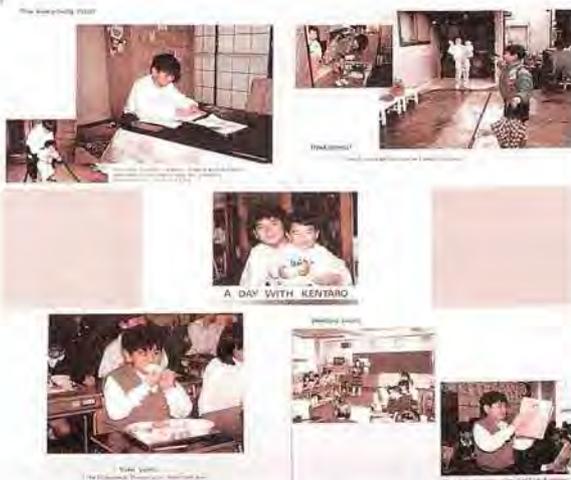
■日本の小学生の一日紹介写真パネル『けんたろうくんの一日(A Day with Kentaro)』の制作

1995年4月、金沢市に住む日本の小学校3年生、高峰憲太郎君の一日の生活を紹介する写真パネル20枚(展示用)と、日本語・日本文化理解教育用のA3判の写真カード20枚、教師用指導書、ワークシート、テープからなる教材セットを制作しました。モニター希望者にカードのセットを寄贈するプログラム(95年度に100セット)を実施するとともに、要望に応じて写真コピーを寄贈してきました。写真パネルは、ジャパンウィークでの展示会をはじめ、米国やオーストラリア各地に貸し出し、展示を行ってきました。この教材のねらいは、子どもたちにとって身近な現代の生活文化、同世代の暮らしなど共有する部分の多い題材から入って、自分たちとの違いにも気づかせ

ながら文化の学習に引きこんでいくところにあります。TJFとしては、文化という広い概念のなかで、特に言語と密接なつながりのある生活文化や人間関係に焦点をあてながら、文化理解を深める教材や教授法の開発に取り組んでいますが、この教材はその初めての試みでした。

■「第1回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト」の開催(募集期間1995年4-12月、1996年1月TJF日本語教材制作諮問委員会による選考実施)

写真パネル『けんたろうくんの一日』





日本語の授業アイデアコンテストに応募した教師の生徒たち

日本語の授業に文化的要素を取り入れることの重要性は広く認識されているものの、実際の教授法や素材になるとまだ難しいのが現状です。そのような現状を考慮してTJFは、言語と文化に関する基礎的な研究を続けるとともに、海外の優秀な教師による授業の実践例、アイデアを幅広く収集することにしました。同コンテストを隔年で継続的に実施し、ノウハウや実践例を蓄積しながら言語学習と文化理解に関する枠組みづくりを試みていくとともに、異文化理解に関心をもつ有能な教師を発掘し、それらの教師とのネットワークを強化していきたいと考えています。また95年の特賞受賞者2名を日本に招待し、日本理解を深めてもらうとともに、意見交換を行いました(96年6、10月)。また優秀な作品を選んで『異文化理解のための日本語の授業実例集』(授業アイデアコンテスト優秀作品集、英語版、一部日本語)として96年12月に1,000部発行し(反響が大きく、直ちに1,000部増刷)、ホームページにも掲載してノウハウの共有化を図りました。

■「日本語の習得と文化理解」研究委託プロジェクト(1993年9月～95年、異文化間教育学会への委託研究)

異文化間教育学会に、日本語学習と文化理解の相関関係について基礎的な研究を依頼、特に教材化にあたって留意すべき点を探りました。研究プロジェクトチームは在日の留学生を対象に調査を実施し、その研究報告書『日本語の習得と文化理解』は、97年3月異文化間教育学会の調査報告シリーズの第1号として発行されました。

アジア言語教育

日本国内のアジア言語教育の普及状況の把握

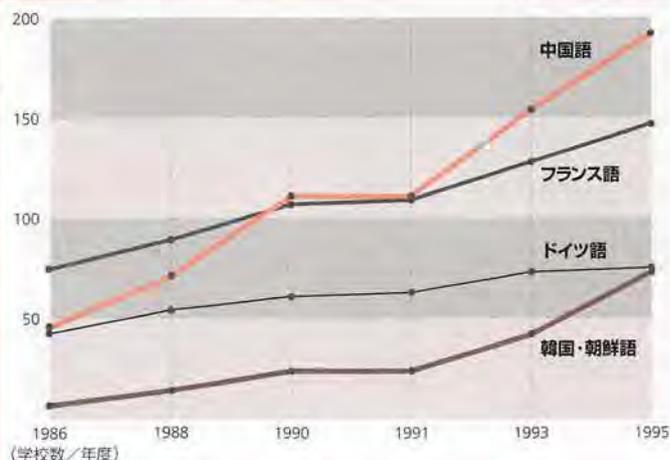
「10年の概要」の項で述べたように、双方向性のある言語教育事業にするために、日本語教育支援事業に対応する事業として93年度より新たに日本国内におけるアジア言語教育支援事業に取り組みました。特に、日本にとっての隣国である韓国、中国をはじめ東南アジア地域の言語を日本の若い人々がもっと学べるようにするとともに、言語の学習を通じてその背景にある文化を理解してもらうために、TJFとして果たして何が出来るかを探るべく、まず日本におけるアジア言語教育の普及状況を調査することにしました。

■日本におけるアジア言語(中国、韓国、タイ、インドネシア)の普及実態調査(1993年5-10月、グローバルリンク総合研究所への委託調査)

プログラムを開発するにあたって、まず93年度に日本国内のアジ

グラフ6 ■日本の高等学校における英語以外の外国語科目開設状況

文部省調べ



ア言語教育の普及状況をインタビューや資料を通じて調査しました。アジア諸国における日本語教育との連繋を図るために、中等教育で日本語教育を実施している中国、韓国、タイ、インドネシアの言語に焦点をあてて調べた結果、日本の高校で教えているのは、中国語と韓国・朝鮮語のみであることが判明しました。中国語は、実施校数156校(全高校の2.3%)、学習者数約11,000人(同0.38%) (95年2月現在、TJF調べ)と、数は少ないながらも、一定数の学習者、教師が存在していることから、社会のニーズもあると判断し、当面高校の中国語教育の支援に焦点を絞ることにしました。90年を境に、高校レベルの外国語教育において英語に次ぐ位置を占めていたフランス語やドイツ語を追い抜いて、中国語の学習者が増えているにもかかわらず、教師研修会の機会も、教材も、情報も不足しているばかりでなく、文部省の学習指導要領さえなく、教える基準となるものがないことが深刻な課題となっていることも把握できました。

日本の高校中国語教育への支援

■高校中国語教育実施状況に関するアンケート調査の実施(1994年5月～95年2月、全国高等学校中国語教育研究会協力)

高校中国語教育のサポートプログラムを実施するにあたり、まず教育現場が抱えている問題点・ニーズを明らかにすることを目的として、中国語教育を実施している可能性のある高校197校を対象にアンケート調査を実施しました。195校(回収率99%)より回答を得て、158校で中国語教育を実施していることが明らかになるとともに、多くの学校で教員の待遇・確保・養成・再研修をめぐる問題、ネ

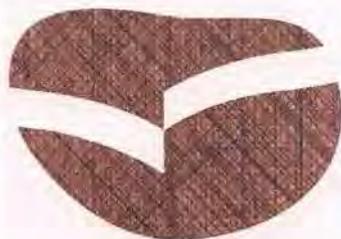
「いま高校の中国語教育を問い直す」

3

いま高校の中国語教育を問い直す

中国語教育の現状と課題

全国高等学校中国語教育研究会



THE JAPAN FORUM

「いま高校の中国語教育を問い直す」



高校中国語教育ガイドライン研究会
夏季合宿

ネットワーク・情報の不足、標準的単位に合わせた学習指導ガイドラインと、ガイドラインに沿った高校向け標準教材の欠如など、問題が山積していることが判明しました。

調査結果は『いま高校の中国語教育を問い直す』(国際文化フォーラム事業・調査レポート 言語と文化シリーズ3、96年4月刊、発行部数1,000部、8月増刷1,000部)としてまとめましたが、同報告書は他に類書がないこともあって、メディアにも取り

上げられ大きな反響をよびました。調査の結果を踏まえ、TJFでは全国高等学校中国語教育研究会の代表と協議し、まずインフラ整備のなかで最も要望が強くまた急がれるガイドラインの作成協力に着手することに決めました。

■高校中国語教育ガイドライン作成への助成(1995年8月～、高校中国語ガイドライン研究会(現全国高等学校中国語教育研究会)主宰)

当初は全国高等学校中国語教育研究会の理事を務める関東・関西支部の有志4名によって高校中国語ガイドライン研究会が設立され、大学レベルの専門家の監修および指導を受けながら数回にわたる合宿討議、全体会議と両支部での作業を経て、1996年3月にガイドラインのドラフトをまとめました。同試案は96年6月の全国高等学校中国語教育研究会の年次大会で発表された後、同研究会の公式のプログラムとして承認されました。その後も多くの中国語教師の意見を取り入れながら、97年度末の完成を目標に作業を続けています。

■教師研修会・研究会開催への協力

全国高等学校中国語教育研究会全国総会への参加・協力、研究会各支部主催の研修会開催への助成、大学・高校レベルの中国語教育関係者が参加する中国語教育研究会開催への助成および会場提供などを通じて、教師間の情報交換、ネットワークの拡大、教授法の研究促進などに協力しました。

■中等教育レベルにおける中国の日本語教育と日本の中国語教育の連繋

中国での中等レベルの日本語教育事業と、

日中教師の交流会



日本国内の高校中国語教育事業とを連繫させるために、両国の教師、生徒の交流を図るなど橋渡しに努力してきました。具体的には、文通相手(友好クラス)の紹介、姉妹校提携への協力、情報交流のためのミニ通信・国際文化フォーラム通信の発行・配布、中国の中・高校生日本語弁論集の日本の高校への配布などを行ってきました。97年7月には、中国大連市で行われた第2回中国中高校日本語教師研修会で、初めて中国の日本語教師と日本の中国語教師との交流会を開催しました。言語や文化理解の学習が実際の交流と結びつくことによって、学習の動機づけが高まると同時に文化理解がさらに深まるので、例えば最近とみに増えてきた中国への修学旅行や短期研修でも、日本語教育実施校を訪問して交流を深めれば、双方の言語教育の効果が上がるのではないかと思います。

■日本の高校におけるアジア言語教育事情調査(1997年6月～)

現在、第2回目の中国語教育の実態調査と、さらに第1回目の韓国・朝鮮語教育の実態調査を開始しており、97年度中に調査結果の分析をまとめ、98年度に報告書を発行する予定です。

日本文化紹介

出版メディアによる日本文化紹介

日本文化の海外への紹介は、他の機関によっても多く行われてきており、その範囲も生け花、茶道、能、歌舞伎、劇、音楽、舞踊、彫刻、絵画と多方面にわたっています。TJFはこの10年間、一貫して日本語という言語を通じて日本文化を伝えるとともに、本をはじめとする出版関連メディアを媒体として日本文化を海外に伝えてきました。すなわち「文化財としての言語」教育の促進事業とともに、「文化財としての本」を中核にした文化紹介事業を展開してきたわけです。まさに出版関連企業によって設立された財団としての特色を十二分に生かすことをめざしたのです。設立当初は現代の出版文化という新たな発想を取り込んで、各種の日本文化紹介のための展覧会を各国で開催したり、出展したりしました。

出版文化を素材とした日本文化紹介展の開催・参加

日本文化といった場合、一般的には美術、芸能のような狭義の文化を考えがちですが、現在最も外に向けて発信すべきものはより広義の文化ではないでしょうか。日本人の人間関係やコミュニケー



『日本の漫画展』
(米国 ヒューストン市)

ションのルール、思考方法、行動様式、価値観を、まず日常の生活のレベルで伝えることが大切なのです。能や歌舞伎、生け花、茶道といったエキゾチシズムにもとづくステレオタイプ的な伝統文化の紹介から脱却して、日本文化の固有性ととともに、その普遍性あるいは共通性を伝えることに努めなければなりません。

このような考えにもとづいて、TJFは特に出版文化、漫画文化、現代日本事情な

どをキーワードとした各種の展覧会を各国で開催しました。日本の伝統文化の紹介という従来のパターンを離れ、日本の現代事情、日本人のありのままの姿を伝えることをめざしたのです。漫画やアニメーションによる現代日本文化紹介は、反響も大きく、新基軸の文化紹介として注目を集めました。

92年度以降は言語教育と文化理解プログラムの充実を図るために、大型展覧会の開催を漸次控え、日本文化紹介事業は図書寄贈事業に絞こんでいったため(「図書寄贈」の項参照)、展覧会などの開催は日本関連図書展など図書に関連するものに限るようになりました。

展覧会は、88年10月に北京で行われた日本現代文化芸術展に写真展・ポスター展を出展したのに始まります。これを皮切りに、蔵書票展、書籍装幀展など、相次いで出版文化を素材とした展覧会を各国で開催するとともに、大規模な国際展に出展参加しました。これらの展覧会の展示物の多くは、日本の出版文化をリードする出版関連企業の協力を得て収集、借用したのですが、91年には初めてTJF所有の写真による日本事情紹介写真展「日本の若い世代」を中国で開催しました。

過去10年間に主催および出展参加した主要な展覧会は以下のとおりです。

■日本現代文化芸術展に写真展、ポスター展を出展(1988年10月23-27日、北京市、中華全国青年連合会と共催)

本芸術展は、日中平和友好条約締結10周年記念事業として、中華全国青年連合会、中華全国婦女連合会、在北京日本大使館、裏千家、池の坊華道会などが主催しました。TJF出展の日本紹介写真展「日本」は、「1988と東京」、伝統的美の世界を表現した「和様文化」、「ハイテクの美」の3部から成り、なぜ日本がハイテクの分野で成功を取めることができたか、が全体を貫くテーマでした。現代



日本事情紹介写真展「日本の若い世代」

日本ポスター秀作展は大日本印刷の協力を得て、写真、デザイン、印刷、用紙にわたって広告表現技術の最高水準を展示しました。

■ユーロバリア89ジャパンに日本の蔵書票展、アニメーション・ビデオ・シアターを出展(1989年10月20日～11月10日、ブリュッセル・ジャパンセンター)

2年に一度開催されるヨーロッパ最大の文化芸術祭で、ヨーロッパ以外の国がテーマ国になったのは日本が初めてでした。ブリュッセルを中心に15都市40カ所の会場で、「日本のイノベーション」をテーマに多彩なイベントが繰り広げられました。TJFの蔵書票展では、日本書籍出版協会主催の「日本図書展」と会場を隣接して、日本書票協会と凸版印刷の協力を得て収集した版画家26名の作品450点を展示しました。アニメーション・ビデオ・シアターは、出版ビデオ懇話会の協力で各社から提供をうけた20本の最新のアニメをテレビで放映しました。

■日中書籍装幀芸術展(1990年8月30日～9月5日、北京市、中国出版工作者協会、中国出版科学研究所と共催)

日中両国の優れた装幀の図書約1,000点のほか写真パネルによる装幀の秀作約300点を展示するとともに、ブックデザイン論に関する講演会を開催しました。

■ジャパン・フェスティバルUK1991へのVisions of Japan展出展に参加(1991年9月16日～92年1月5日、ロンドン、国際交流基金協力、ヴィクトリア&アルバート美術館主催)

日本の3人の建築家が日本人の精神構造を三つの空間で表現した現代日本総合紹介展[ジャパン・イン・パースペクティブ]には、企画立案の段階から参加して財政的協力をするとともに、カタログやレアリア集、リーフレットの制作にも協力しました。

■ヒューストン・インターナショナル・フェスティバル日本年に日本の漫画展を出展(1991年4月10日～5月6日、ヒューストン、同フェスティバル委員会主催)

現代日本を理解するためのキーワード「漫画」をテーマに、日本のコミックを解説したパネル、約500冊のコミック図書、アニメーション、ファミコン、キャラクターグッズなどを豊富に展示、総合的に日本の漫画文化を紹介しました。展示にあたっては、漫画は日本で娯楽としてのみならず語学学習や日本の現代文化の伝達に役立つメディアであることが分かるように工夫し、異文化間コミュニケーションの媒体としての漫画の可能性と将来性を探りました。



英字漫画 Teenage Tokyo



「文化のぎずな——日本の童話とイラストレーションの祭典」

■写真展「若い世代・日本と中国」に日本事情紹介写真展「日本の若い世代」を出展(1991年5月4-10日、北京市・中日青年交流センターと共催)

都会、農村、家庭、学校、あそび、スポーツ、祭りなどをカラー写真パネル63点で構成、日本の若い人々の生活、社会を紹介しました。中国側も中国の若い世代の写真展を同時に開催しました。

■日本のマンガ展 The Amazing World of Japanese Comics 巡回展(1992年8月25日～9月4日、9月14-25日、10月10-20日、シドニー、メルボルン、パース各市の日本国総領事館と共催)

シドニーのジャパンフェスティバルに参加し、膨大な読者層に支えられ独自の発展を遂げている「現代日本」(フェスティバルのテーマ)のマンガを、パネルと雑誌、単行本、ファミコン、キャラクターグッズなどの展示とアニメーションの上映によって紹介しました。TV、新聞でも大きく取り上げられ、近隣の学童、2,000人以上が見学しました。シドニーの他2都市でも巡回開催しました。

■ティーン・トーキョー展に *Teenage Tokyo* を出展(1992年4月、ボストン、ボストン子ども博物館主催、同博物館と共同で制作)

本展は、現代のありのままの日本人、とりわけ子どもたちの日常生活を紹介する画期的な試みで、TJFのその後の文化紹介の基本的モデルとなった展覧会です。展示場には地下鉄の車両、喫茶店、子ども部屋、カラオケボックス、相撲のチャレンジコーナーなど東京の生活を再現しました。TJFはボストン子ども博物館とともに、日本の中学生の日常生活をマンガで描いた *Teenage Tokyo* (英語版)を共同で編集制作し、同展のために出版、寄贈しました。

■文化のぎずな——日本の童話とイラストレーションの祭典(1993年5月26日～6月15日、バンクーバー市、サイモン・フレーザー大学異文化言語コミュニケーションセンターと共催)

童話や絵本が世代から世代へ文化を橋渡しするとともに、日本文化と異文化を結んでいることに着目、異文化間コミュニケーションの媒体としての絵本と童話の可能性を探ることを目的としました。53の出版社から寄贈していただいた日本の童話、伝説、おとぎ話、むかし話など約300冊の本と絵本の原画55点を展示するとともに、文化と世代を結ぶ児童図書の意義と重要性についてのシンポジウム、日本の絵本における伝統と現代性の問題についての講演会も開催しました。TJFの今後の図書関連プログラムを考えるベースとなる展覧会でした。

図書寄贈

文化交流の媒体としての本の重要性

出版メディアを通じての国際文化交流事業のなかでも、「本を通じての文化理解」は、一貫してTJFの事業のキーワードとして重視してきました。TJFが本に焦点をあててきたのは、一つには出版関連企業からサポートを得ていることの特徴を出すためですが、それとともに、近年電子メディアがめざましい発達を遂げているとはいえ、本のもつ使命は非常に重要であると考えます。本は「もの」としては単なる紙の塊りですが、実質的には無形の文化財であり、国際文化交流の媒体、つまり文化の担い手として重要な役割を担っているといえます。このことは、日本の代表的出版企業であるとともにTJFの中心的支援企業である講談社の出版文化観とも関連しています。

「世の中を動かすような知性・知識を、一般に伝え広めていくのが出版の仕事であり、出版という仕事は、人類の進歩発展の基盤をなすものである。世界の国々が相互にそれぞれの文化を真に理解しあうための、最も有効で現実的なものは図書である。一つの出版物は、その時代、その民族の文化の水準を示すバロメーターであるが、これは国境を越え、古今を通じての人類の共有財産ともなるものである。地味であるかも知れないが、出版文化の交流は各国の人々の相互理解、人間的共感を培い育てていく萌芽となるものである」(『野間省一自伝』より)

特に図書寄贈事業は、言語教育事業と並んでTJFの重要な事業です。日本語教育を通じて、日本語や日本文化の理解に役立つ情報、とりわけ言葉の理解と密接な関係をもつ日本人の生活文化や人間関係に焦点をあてた情報を日本語教師や児童生徒向けに発信していますが、設立初年度より10年にわたって、日本語・日本文化関連図書寄贈事業(英文図書を中心に、日本語への需要のあるところには日本語図書も寄贈。一部アジア言語の図書も含まれている)を通じて日本関連情報を発信してきました。10年間で合計74ヵ国・地域、3,157件、81,529冊の日本関連図書を海外の教育・研究機関、公共図書館などに寄贈しました(資料編参照)。



『英文日本大事典』

日本は自らの考えや意見を世界に向かって発信することが不得手で、その立ち後れは極めて深刻であり、いまだに海外では日本の顔が見えないといわれています。TJF設立時に掲げられた、日本語と国際語である英語を通じて世界の人々に日本のありのままの姿や日本人の考えていることを正確に伝えなければならないという課題は、今なお克服されているとはいえません。

TJFの図書寄贈プログラムの方針

TJFの図書寄贈プログラムの基本は、「顔の見える相手への寄贈」であります。本当に必要な本を、最も必要とする人に届けることを目的としています。公募と書類審査、選定委員会によって寄贈先を決定するのではなく、国際文化交流の第一線の人々からの紹介をもとに、実際に本を手にする人々の顔を思い描き、ニーズを把握しながら寄贈先や寄贈図書を決めてきました。したがって寄贈先機関が図書の発送費用を負担できない時は、仲介してくれた人々が負担する例も少なくありませんでした。そして、寄贈先の人々からフィードバックを得て初めてプログラムが終了するという、まさに図書を通じて人の輪を広げることをモットーにした手作りの図書寄贈事業であったといえます。

本の収集については、プログラムの中立性と質を保つために、講談社グループに限ることなく、日本出版販売、トーハンなどの大手の販売会社をはじめ、数十社にのぼる国内の出版社から幅広いご協力をいただきながら、限られた財源を最大限にいかす努力をしてきました。また特別図書寄贈プログラムの図書輸送に際しては、全日本空輸、日本航空、日本通運、近鉄エクスプレスなどの協力を得ました。

英文日本関連図書は、市場が小さいため、営業ベースにのらないものが多く、その供給は限られています。専門学術書は別としても、英語教材や日本語教材、観光ガイドブック、お土産用の豪華本など国内市場向けのものを除くと、出版状況は深刻です。とりわけTJFが今後必要とする小・中・高校生向けの日本関連図書が極めて少ない

日本の漫画を読むこどもたち





日本文化紹介のための寄贈図書

のです。日本は近代化の過程で、盛んに欧米諸国の著作物を日本語に翻訳出版し、知識の普及に大きな役割を果たしましたが、日本の著作物を外国語に翻訳して出版し、海外に輸出することは戦前は無きに等しかったとい

えます。欧米諸国からの出版物の輸入超過を改め、均衡を図るために設立されたのが、講談社グループのひとつである講談社インターナショナルです。同社は、一企業でありながら、長年の国際文化交流への貢献により、94年の国際交流基金奨励賞を受賞しましたが、TJFにとっては、優れた英文日本関連図書を出版してくれる出版企業があってこそ初めて海外の人々に日本文化を紹介することができたのです。

図書寄贈プログラムの概要

1992年度以降、言語教育と文化理解プログラムの充実を図るために事業費の支出配分を再検討し、文化紹介事業は漸次図書寄贈を中心とする図書関連事業に絞りこんでいきました。他方、言語教育・文化理解プログラムと、本を通じての文化理解プログラムの連繋を図るために、図書寄贈プログラムのなかに、初等中等教育向けの日本語教材、特に絵本、教具、資料などの副教材を選定する委員会を設置し、精力的に収集、寄贈を行ったり、また中国語教育の支援にも繋がる図書寄贈を始めるなど、プログラムを充実する努力も重ねてきました。

TJFの図書寄贈プログラムは、言語教育支援のためのものと、日本文化・日本紹介のためのものとに大別されます。基本的には内外の教育・研究機関、公共の図書館などの要請を受けて、目的別、分野別にバック方式または選択方式で寄贈してきました。

また、対象地域・対象分野を限定せず、対象者も子どもからオピニオンリーダーまで幅広い層に寄贈してきました。

■フォーラムAバック(英文日本紹介・美術書)

やきもの、根つけ、版画など21冊のセット

Naoko Matsubara, *Kyoto Woodcuts*; Toshiko Ito, Motosuke Imaizumi et al., *Famous Ceramics of Japan Series*; Hirokazu



ヴィジョンの会よりの寄贈図書

Arakawa, *The Tsujigahana*, etc.

■フォーラムBパック(英文日本紹介・美術工芸書)

彫刻、版画、書など、11冊のセット

Jiro Sugiyama, *Classic Buddhist Sculpture*; Hisashi Mori, *Japanese Portrait Sculpture*; *Contemporary Japanese Prints*; Robert Vergez, *Early Ukiyo-e Master Okumura*

Masanobu; Sylvan Barnet, *Zen Ink Paintings*, etc.

■フォーラムCパック(英文日本紹介・文学書)

代表的現代日本文学作品、31冊のセット

Kobo Abe, *Beyond the Curve*; Junichiro Tanizaki, *A Cat, a Man, and Two Women*; Sawako Ariyoshi, *The Doctor's Wife*; Edward G. Seidensticker, *Genji Days*; Yasunari Kawabata, *The Lake*; Shusaku Endo, *The Silence*; Kenzaburo Oe, *The Silent Cry*; Donald Keene, *Some Japanese Portraits*; Yasushi Inoue, *Tun-huang*; Saburo Shiroyama, *War Criminal*; Haruki Murakami, *A Wild Sheep Chase*, etc.

■フォーラムDパック(英文日本紹介・社会科学関連図書)

宗教、観光、経済など、18冊のセット

Stuart D. B. Picken, *Christianity and Japan*; Donald Richie, *Discover Japan*; Paul Hunt, *Hiking in Japan*; Noboru Makino,

Decline and Prosperity; *Corporate Innovation in Japan*; Tatsuro Uchino, *Japan's Postwar Economy*, etc.

■講談社現代新書パック

宗教、歴史、経済、法律ほか50冊のセット

■ブルーバックスパック

自然科学書特選30冊のセット

■講談社英語文庫パック

45冊のセット

日本語副教材パックの一部





第11回日本語弁論大会入賞者に
図書を寄贈

黒柳徹子著、D.ブリトン訳 *Totto-chan: A Little Girl at the Window* (窓際のトットちゃん) ほか

■ ヴィジョンパック (英文日本文化紹介図書)

毎年、英文日本関連図書パック(60セット)を、海外在住の日本人を通じて、現地社会への感謝の印として、学校・公共図書館等へ寄贈しているボランティアグループ「ヴィジョンの会」の活動に必要な図書を提供することで、同会を通じて図書を寄贈してきました。同会

には、例会の会場を提供するなどして、会の活動に全面的に協力してきました。

■ 日本文化研修会・セミナーへの寄贈

留学生秋のスポーツフェア、国際留学生交流全国大会「夢半島のと・Japan Tent」、国際草の根教育シンポジウム、ジュニア大使友情使節団など国内外の外国人のための研修プログラムに事典『THE 日本』などを寄贈しました。

■ 初等中等教育向け日本語副教材パック

日本語能力初級・中級の学習者向けの副教材(教師用参考書、辞書、事典、おもちゃのお金、絵本、日本事情図書、絵カード、ゲーム、地図、図鑑などを広い視野から選定)、初等教育向けパック30点セット、中等教育向けパック38点セットの2種類を選定し(1993年度)、現場でのスクリーニングを行った後、北米、大洋州諸国の小・中・高校を対象にモニタリングを希望した46校に寄贈(1994年度)。モニタリングアンケートの結果を踏まえ、1995年度に英語圏の日本語教育における日本語教材へのニーズを分析し、TJFの教材開発の参考にしました。

■ 日本語弁論大会への寄贈

バージニア州高校生日本語弁論大会、ワシントン州高校生日本語弁論大会、日本語学習外国人留学生日本語弁論大会、日本語学習就学生・留学生日本語弁論大会、ビジネス日本語スピーチコンテスト、全国専門学校日本語学習外国人留学生日本語弁論大会、いっくから国際文化交流会日本語スピーチコンテストなど国内外の弁論大会の賞品として 辞書、事典などを寄贈しました。

■ 日本語研修・セミナーへの寄贈

国際交流基金日本語国際センター研修プログラム、ハワイ大学学生日本語研修とスポーツ交流プログラム、高麗大学学生夏季日本語集中講座、日本語研修プログラムなど国内の日本語研修・セミ



ヨーロッパ翻訳者会館への図書寄贈

ナーに教材として辞書、事典などを寄贈しました。

■中国語弁論大会、韓国・朝鮮語弁論大会への寄贈

日中友好協会主催の全日本中国語弁論大会や神田外語大学主催の全国学生韓国語スピーチコンテストに辞書などを寄贈しました。

■ヨーロッパ翻訳者会館への特別図書寄贈プログラム(1992-93年度、ドイツ・シュトラレーン市)

ヨーロッパの翻訳者のために設立された情報センター、ヨーロッパ翻訳者会館(宿泊施設も併設)に、日本関係の図書がわずか12、3冊しかないことから、鈴木孝夫慶応義塾大学名誉教授の寄付金をもとに、92年度に基礎的な辞書・辞典149冊、93年度にことば事典、人名事典、地理事典、動植物事典などを中心に辞書・事典138冊を同会館に寄贈しました。日本語をヨーロッパの諸言語に翻訳する需要が高まっているなか、ドイツ国内に限らずヨーロッパ各地の翻訳者、日本研究者にとって貴重な日本図書コーナーを設置することができました。

■What Is Japan? 特別図書寄贈プログラム(1994-95年度、(財)アジアクラブと共催)

アジア太平洋地域延べ27カ国・地域、2,116件のオピニオンリーダーおよび主要機関に対し、日本に対する理解を深めてもらうため英文日本関連図書を2回にわたって寄贈しました。

94年度は、*Japan: An Illustrated Encyclopedia* (英文日本大事典)各1冊を、各国の政治・行政・経済・メディア・学界のオピニオンリーダーおよび各国の代表的な図書館・研究機関に寄贈しました。地域別寄贈数は次の通りです。北米地域2カ国(カナダ、米国)456件、大洋州地域13カ国(オーストラリア、ニュージーランドほか)151件、東南アジア地域6カ国(インドネシア、シンガポール、タイ、フィリピン、ブルネイ、マレーシア)248件、東アジア地域2カ国(韓国、中国)2地域(台湾、香港)130件、在日各国大使館18件(合計25カ国、1,003件)。

95年度は、94年度プログラムの寄贈先1,003件に、引き続き図書

(櫻屋太一著 *What Is Japan?*、稲盛和夫著 *A Passion for Success*) を寄贈しました。新たにベトナムを加えるとともに、新分野として各国のNGO団体に *Japan: An Illustrated Encyclopedia* 計110冊を寄贈しました。地域別寄贈数は、北米地域2カ国476件、大洋州地域13カ国163件、東南アジア地域7カ国314件、東アジア地域2カ国2地域141件、在日各国大使館19件(合計24カ国2地域1,113件)です。(図書の発送は96年度)

What Is Japan?特別図書寄贈プログラム、各国のオピニオンリーダーにむけて発送



受託事業

日中の友好交流や国交回復に貢献した高碕達之助氏を顕彰して、中国各地の大学に創設された高碕文庫に科学技術専門書を寄贈するプログラムが小西国際交流財団により数年にわたって行われ、このプログラムに図書の収集などを通じて協力しました。

学術文化・教育交流

アジア・太平洋地域の人々との対話

言語教育事業においては、1993年度から海外における日本語教育支援事業に加えて、日本国内のアジア言語教育の促進事業を始め、双方向性をもった事業を展開しましたが、以下に述べる学術文化・教育交流事業も、アジア・太平洋地域との間の双方向的相互理解プログラムとして、TJFの新しい事業のあり方を模索するものでした。当初は「日本」固有の問題から出発しましたが、相互関係あるいは共通テーマについてそれぞれの立場から討論する場へと発展していきました。

■ 日本研究国際シンポジウム「ジャパン・プロブレムは存在するか」
(1988年3月28-30日、東京、外務省・国際交流基金と共催)

日本側7名のパネリストが提出した7論文に対して、外国側7名がコメントしてから全体討議に入りました。ジャパン・プロブレムをテーマに、その内容、背景、原因を探るとともに、日本・日本人の特質を捉え直し、新たな国際社会における日本の役割を討議しました。

■ 北京国際シンポジウム「21世紀に向かう日本」(1990年10月25-26

日、北京、中華日本学会、中国社会科学院日本研究所主催、TJF後援)

中国では初めての日本をテーマにした国際シンポジウム。中国7名、日本6名、米国2名、オーストラリア、カナダ、シンガポール、ソ連、タイ各1名、計20名のパネリストが参加。政治、経済、科学技術、社会文化の各テーマ別に、21世紀に向けての日本の進路と国際社会における役割をめぐって白熱した討議が展開され、経済的貢献や国際的貢献

日本研究国際シンポジウム





日本・タイ学術文化シンポジウム

への期待が寄せられる一方、軍事大国化への懸念が表明されました。(報告書:『21世紀に向かう日本——北京国際学術討論会記録』)

■日韓学術文化セミナー(1991年3月19-20日、蔚山市、蔚山大学校と共催)

文化交流の度合を測るバロメーターでもあるお互いの外国語教育と現代生活に関する最近の調査・分析を通じ、両国の生活・文化の特質や価値観の違いを明

らかにし、相互理解の一助とすることを目的として開催されたもので、「韓国における日本語教育・日本における韓国語教育」と「現代文明と民俗社会」の二つの基調報告にもとづいて討議しました。また、日本と韓国に関する特別講演も行われ、この年に日韓文化交流基金も設立されたこともあって、日韓新時代、環日本海時代の幕開けにふさわしい事業であると評価されました。

■日本・タイ学術文化シンポジウム(1992年1月14-15日、バンコク市、タマサート大学と共催)

日タイの文化交流の発展を目的として開催され、「21世紀へ向けての日本・タイの文化交流」と「日本語教育をめぐる問題点と展望」をテーマに、日タイのパネリスト9名により、日タイの文化・国民性・政治風土の比較や、日本語教育の現状分析と問題点に関する報告と討議が行われました。(報告書:『日本・タイ学術文化シンポジウム報告書』)

■STARプログラム(Strengthen Ties and Relationships Program) 米国ウィスコンシン州教育関係者訪日プログラムの実施(1993年2月23日～3月4日、東京・京都ほか)

ウィスコンシン州内の公立学校への日本語・日本文化理解教育の導入に対して、TJFは同州の教育庁に協力してきましたが、さらに州内のコンセンサスを得るために、州内の指導的立場にある人々を招聘し、対日理解を深めてもらうことを目的に実施しました。来日メンバーは、大学教授、高校教諭、小学校長、PTA会長、州議会議員、労働組合委員長、ネイティブアメリカン部族長、ジャーナリストなど14名。一行は、教育機関をはじめ企業、行政機関、地方を訪問、ホームステイも経験するなど日本人のありのままの生活を体験しました。その後このプログラムから様々な波及効果が生まれ、改めて



日米教育長交流プログラム



『ワールドプラザ』第7～12号

各方面への働きかけの必要性を痛感しました。

■ STAR for CSSO Program (Strengthen Ties and Relationship for Chief State School Officers) 日米教育長交流プログラム(1994年10月12-20日、東京ほか日本各地、全米州教育長協議会・都道府県教育長協議会と共催)、国際シンポジウム「日米の初等中等教育における国際理解教育の現状と課題」(1994年10月18日、東京、全米州教育長協議会・都道府県教育

長協議会後援)

米国4州の教育長および教育行政担当者10名を招聘しました。プログラム前半は、州ごとにそれぞれの姉妹県を訪問、教育現場を視察するとともにホームステイを通じて日本の文化・生活を体験、後半は、都道府県教育長協議会主催の日本の教育長との教育研究会議、およびTJF主催の国際理解教育に関するシンポジウムにおいて、日米の教育が直面する具体的な教育課題について意見を交換しました。また期間中、全米州教育長協議会専務理事のゴードン・アンバック氏による米国の初等中等教育改革に関する講演会も開催しました。(報告書:『日米の初等中等教育における国際理解教育の現状と課題』)

国際文化交流の推進

『ワールドプラザ』の発行

1988年12月、国内の国際化と国際文化交流への関心の高まりに応じて、国際文化交流情報誌『ワールドプラザ』(隔月刊)を外務省国際文化交流情報センターとの共同編集で創刊しました。市販雑誌としては、わが国で最初にして唯一の国際文化交流情報誌であることが注目され、大きな期待をもって迎えられました。

『ワールドプラザ』の使命は、日本の国際文化交流を担うキーパーソンを対象として、国際文化交流に関する基本情報を提供するとともに、読者に情報交換の場を提供することにあります。そして、編集方針として、1)在外公館をネットするグローバルな情報網を駆使して内外の最新情報を提供する、2)国際文化交流のデータベースをめざす、3)国際文化交流のトレンドを読む、4)読者相互の情報交換の場



『ワールドプラザ』第25号



とする、5)読みやすく、楽しいビジュアル誌をめざす、の5項目を掲げました。

内容上の特色は、以下のとおりです。1)「特集」:一つの問題を、あくまでも現場に密着取材して、総合的かつ多角的に捉える(各号の特集タイトルにつ

いては、資料編参照)、2)「国際文化交流イベント・カレンダー」:外務省の協力による在外公館からの海外情報と、編集部の独自取材による国内の交流情報を合わせてデータバンクを作成、3)INTER-CULTURE:あらゆるスタイルの国際交流の「いま」を、オムニバス形式で伝えるとともに、草の根で活躍する多くの国際文化交流の担い手たちの素顔を毎号紹介し、担い手たちを応援し、元気づけました。

創刊5年目の第25号からは、読者対象を変え、内容に多少変更を加えました。すなわち、1)日本人が異文化との交流・共生を考え、それを実現していくための情報を提供する「国際文化交流マガジン」として、雑誌ジャーナリズムの一角に、より強固な地歩を占めること、2)海外への情報発信が不十分であることを考慮して、「日本文化および国際交流事情データブック」を基本コンセプトにして様々な情報を提供していくことを目指しました。さらに、第37号からは、異

文化理解に役立つ特集や読み物も多く取り上げ、国際文化フォーラム事業全体の方向性と連動させることができました。また、第31号からは、一部ながら英文も掲載しました。

『ワールドプラザ』の発行は、88年12月の創刊以来、長い間TJFの看板事業でしたが、インターネットを含むマルチメディア時代に突入し、情報の即時性が日常化する状況のなかで、隔月刊による国際文化交流情報の発信では時代のニーズに応えられないと判断し、『ワールドプラザ』という雑誌形態による情報の発信は96年10月発行の第48号をもって、ひとまず終えることになりました。創刊以来の慢性的な支出負担も、休刊のもう一つの理由でした。TJFでは97年3月にホームページを開設しましたが、全国の国際文化交流にかかわる団体や協会も、インターネットによる情報発信を開始しています。お

『ワールドプラザ』第48号



互いに情報の交換を緊密にして、国際文化交流の輪を世界に広げていきたいものです。

『ワールドプラザ』特別事業

『ワールドプラザ』の発行以外にも、『ワールドプラザ』主催による講演会の開催や、米国の高校生マイケル・ライマー君の日本列島走破と地域の人々との交流を支援した『ワールドプラザ』企画支援特別事業、国内民間国際文化交流団体の英語版ダイレクトリーの発行（『ワールドプラザ』創刊5周年記念事業）、在日外国人情報誌編集長シンポジウムへの開催協力など多彩な事業も並行して進めました。

■『ワールドプラザ』創刊記念シンポジウム「地域国際化と文化創造：地域おこしへの新しい視点」（1989年4月17-18日、東京）

地域レベルの国際化の高まりとふるさと創生構想を背景に、経済の面からのみ捉えがちな地域おこしの問題を12名のパネリストが文化の観点から取り上げ、文化創造へつながる構想と戦略について討議しました。県や市の国際交流担当者など約120名が参加しました。

同シンポジウムの報告書『地域国際化と文化創造：地域おこしへの新しい視点』（89年11月刊）は、7つのテーマ（地域国際化と新しい文化創造の時代、小さな町から大きな交流、地域おこし新時代——ローカルこそグローバル、地域おこし・建築・文化など）に分けて地域の国際化をめぐる諸問題を多角的に捉えています。

■『ワールドプラザ』特別講演会

92年10月1日、東京の国際文化会館において、米国ウィスコンシン州教育長ハーバート・J・グローバー氏による講演会「私の提唱する教育改革」を開催しました。当日は、日米の教育・文化交流関係者約100名が出席。グローバー氏は、2000年をめどとする米国政府による教育改革目標を説明しながら、自らの教育観を語りました。日米それぞれの教育の長所短所を指摘、お互いに良いところを取り入れることによって、よりよい教育制度をつくる必要があると強調しました。同氏は、TJFがサポートしてきた米国ウィスコンシン州の公立学校への日本語教育の導入を推進した中心人物です。

■『ワールドプラザ』（別冊）*Data Book on Japanese Local Grassroots Organizations in International Cultural Exchange*、1993年7月刊

TJF設立5周年と『ワールドプラザ』創刊5周年を記念して刊行。『ワールドプラザ』が創刊以来取り上げてきた民間交流団体の活動

や沿革を収集して、英語で紹介したもので、127団体のデータが収録されています。

■ 在日外国人生活情報誌編集長シンポジウムを後援

本シンポジウムは、1994年11月18日、東京の国際交流基金国際会議場にて、在日外国人向けのエスニックメディアと呼ばれる雑誌の存在と、その編集・発行現場の実情を知ってもらうことを目的として開催されました。TJFはシンポジウムの準備にあたりとともに、当日は『ワールドプラザ』編集長が司会役を務めるなど、全面的に協力をしました。約250名の聴衆が参加し、新聞やテレビなどのメディアによる報道もあつて、大きな成果をあげました。

広報出版活動

広報出版物の編集出版

■ 『国際文化フォーラム通信』の発行

第1事業年度に機関誌『国際文化フォーラム通信』を創刊し、日本語・日本文化を考えるペーパーとして、主にTJFの事業を中心に特集を組み、その活動を報告してきました。第1号より第14号までは、表紙を一文字の書や、石をテーマとした写真で飾るとともに、重厚感のある体裁で注目を集めました。

第15号からは雰囲気ガラッと変え、用紙も軽量化しカジュアルな感じを出しました。特集記事もTJFの事業を直接紹介するのではなく、文化交流・文化理解・言語教育に関する普遍的なテーマを取り上げました。なるべく客観的な情報をサイド情報として豊富に掲載するとともに、人間に焦点をあてながら生の声を掲載するよう

心がけました。ページ数の増減(12～20ページ)もありましたが、一貫して季刊誌として発行(4000部)しています。

■ The Japan Forum Newsletterの発行

1993年度には英文機関誌 *The Japan Forum Newsletter* (8月と2月に年2回発行、16ページ、4000～4500部)を創刊し、主に海外の初等中等教育の日本語教師を中心に配布してきました。

■ 国際文化フォーラム案内リーフレット

『国際文化フォーラム通信』第23～26号



設立以来、日本語版のリーフレットを制作していましたが、1993年度にリーフレットのデザインを刷新し、日本語・英語・中国語の3カ国語版を制作しました。また、1995年5月の事務所の移転および国際文化フォーラムのロゴマークの制定を受けて、リーフレットを改訂しました。

■『国際文化フォーラム事業報告』

1987-1988年版を第1号として毎年発行。1988-1989年版からは、日本語版の報告書に英文を併記することを始め、さらに英文版も発行して、海外の需要に応えるようにしました。

図書資料の編集出版

設立当初は事務局スタッフに編集出版の経験者が何人もいて、シンポジウムや調査の報告書をはじめ、国際文化交流や日本文化・日本語・日本研究に関連する書籍の編集・出版も行っていました。また、他の機関の出版物の編集・出版も受託していました。国際文化交流の世界では、編集・出版のノウハウを持つ人材を抱え、出版メディアを持つ団体が少なかつただけに貴重な存在でした。現在はデジタル化に対応できる編集・出版のノウハウを身につけるべく努力し、出版物も編集から制作にいたるまで、なるべく内部で行う方向で進めております。

主な編集出版物は以下のとおりです。

■『海外における日本語教育の現状と将来』（日本語国際シンポジウム報告書）、国際交流基金と共同編集、1989年3月刊（「日本語教育 第1期」の項参照）

■『地域国際化と文化創造 地域おこしへの新しい視点』（国際文化交流シンポジウム報告書）、1989年11月刊（「国際文化交流の推進」の項参照）

■『日本語教育—その成長と悩み 海外日本語教育機関の動向・1988年』、1990年3月刊

外務省が世界170カ所の在外公館を動員して行った「海外日本語教育機関動向調査1988」の調査結果をTJFが編集出版したもの。調査結果の概要を数値でまとめるとともに、海外272機関の教育現場の実情と悩みが具体的に語られています。さらに、現場から寄せられた要望に対してどのように応えるか、問題の総括と対応、今後の展望を最後にまとめてあります。

■『国際文化交流名言集』、1990年6月刊

設立3周年を記念して、TJFの出版物のなかから各界の方々60名



『日本とはなにか 近代日本文明の形成と発展』
『国際文化交流名言集』

■『日本とはなにか 近代日本文明の形成と発展』(梅棹忠夫著) 日・英・中国語3カ国語版、1990年5月刊

本書は日本放送出版協会刊『日本とはなにか』の第3章「近代日本文明の形成と発展」に英語訳および中国語訳を付して編集し、3カ国語版としたものです。

■英字漫画 *Teenage Tokyo* (「ティーン・トーキョー展」サブテキスト)、ボストン子ども博物館と共同発行、1992年1月刊、「日本文化紹介」の項参照)

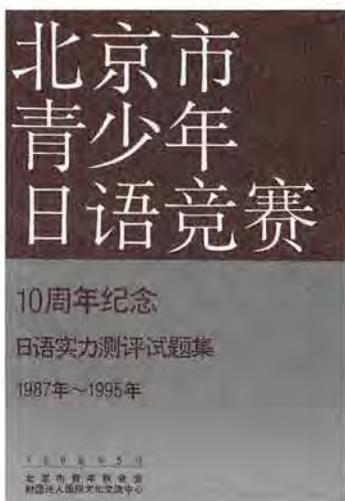
■『北京市青少年日本語コンテスト 10周年記念日本語実力試験問題集 1987年～1995年』、1996年5月刊(「日本語教育 第1期」の項参照)

TJFの事業の報告、あるいは事業開始の前後に行う調査、事業全体にかかわる調査研究等をまとめて出版し、関係者の関心を喚起するとともに、情報を提供することを目的として95年度に国際文化フォーラム事業・調査レポート 言語と文化シリーズを創刊し、96年度までに3号を発行しました。特に当財団のテーマである「言語と文化」、異文化理解(国際理解)に関するテーマを取り上げるとともに、単なる報告書に終わらせず、問題の所在を明らかにし、問題解決への提言・提案を含めた内容にするように努めました。

■『日米の初等中等教育における国際理解教育の現状と課題』(国際文化フォーラム事業・調査レポート 言語と文化シリーズ1、1995年8月刊)

■ *International/Global Education in Primary and Secondary Education* (国際文化フォーラム事業・調査レポート 言語と文化シリーズ2、英文版、1995年11月刊)

1994年10月に主催した国際シンポジウム「日米の初等中等教育における国際理解教育の現状と課題」の報告書の英語版。報告書には日米の教育長による両国の国および県・州レベル



『北京市青少年日本語コンテスト
10周年記念日本語実力試験問題集
1987年～1995年』

『日米の初等中等教育における
国際理解教育の現状と課題』と
その英語版



の国際理解教育の現状報告、それを受けて行われた自由討議および総括、今後の課題についての提言が収められています。

■『いま高校の中国語教育を問い直す』(国際文化フォーラム事業・調査レポート 言語と文化シリーズ3、1996年4月刊)

1994年5月～95年2月に日本で中国語教育を実施していると思われる高校197校に対して行ったアンケート調査の結果をもとに、その分析資料、中国語教育実施校のルポ、現状と課題のまとめ、今後への提言(現場教師、各界の方々からのメッセージ、TJFからの10項目の提言)が収録されています。

受託事業

国際交流基金をはじめ、他の国際文化交流団体から編集出版に関連する業務への協力を求められることが数多くありましたが、TJFの事業とかかわりのあるテーマに限って協力しました。主な編集・出版の受託事業は次のとおりです。

■『国際文化交流元年への期待 新聞報道(1985～1988年)』国際交流基金発行(編集・制作)

■『国際文化社会をめざして』国際交流基金発行(編集・制作)

■『日本語教育通信』国際交流基金日本語国際センター発行(編集協力)

海外の日本語教育機関約8,000機関へ日本語・日本語教育情報を提供することを目的に国際交流基金日本語国際センターが発行する機関誌『日本語教育通信』(年3～4回発行)の企画・制作に1990年1月の創刊以来参加し、97年2月の第27号まで編集・制作に協力しました。

■『入門国際交流』大阪国際交流センター発行(編集・制作)

インターネット・ホームページ

パソコンの導入とデジタル情報の共有化

1996年3月に開かれた理事会・評議員会において、「情報化社会」に対応したコミュニケーション手段を積極的に活用するために「インターネット・ホームページ」を開設することが決定されました。しかし、当時はまだLAN(ローカル・エリア・ネットワーク)どころか、パソコン一人一台体制も実現していませんでした。決定を受けてまず、スタッフ全員にウィンドウズ95搭載のパソコンを導入し、データベースの構築を進める一方、局内ネットワークによる「デジタル情報の共

有化」をめざしました。ほとんどすべての事業はなんらかのかたちで「デジタル情報化」されていますので、ホームページを開設すれば当然それらの「デジタル情報」を活用できるわけですが、そのためには情報が活用可能な状態になっていなければなりません。情報のデータベース化は業務の合理化に役立つとともに、ホームページへの活用にも不可欠です。また画像処理などを内部スタッフで行えるようにすることもコスト面、ホームページのビジュアル特性の面から重要な課題でした。こうした課題と取り組みながら、なんとか1年後の3月、予定通り「ホームページ」を開設することができました。

TJFのホームページ開設

TJFのホームページは、「TJFとは?」「TJF広場」「日本語教育」「日本語あれこれ」「中国語教育」「中国語あれこれ」「日本関連図書情報」「ホームページ紹介」という8つの分野から成り立っています。使用言語は現在のところ、日本語と英語が中心ですが、中国語や韓国・朝鮮語も今後使用する予定です。

TJFがめざす「言語と文化理解」をテーマに、日本を含めて世界の国々の若い人々が、外国語学習を通じていろいろな言語や文化に触れ、互いに理解を深めていけるよう情報交流を進めています。现阶段では海外の小・中・高校の日本語教育と日本国内の高校中国語教育に焦点をあてて、教師の方々とネットワークを組んでいきたいと思っています。

■TJF広場

日本語の授業アイデアコンテストやTJF創立10周年記念特別図書寄贈プログラムなどの公募案内、さらにはTJFからの提言として、小・中・高校における国際理解教育や、日本の高校中国語教育に対するメッセージを載せています。将来は、この広場を各国の教師間

の討論の場として活用していきたいと考えていますが、当面はTJFに寄せられたお手紙などを中心に掲載していきます。TJFを支える人々を順次紹介するとともに、TJFから積極的にメッセージを発信していきたいと思っています。

■日本語教育

TJFの主要なコーナーとして、「子どもたちのための日本語教育と文化理解」をモットーに、言語教育を通じて子どもたちの文化理

TJFのホームページのトップメニュー





「中国語あれこれ」のコーナーより

解を深めることを目指しています。各国のカリキュラムで扱われているテーマを中心に、日本の小学生の一日の生活を紹介する写真と文化項目テキスト、カリキュラム、レッスンプラン、教材をリンクさせたページです。現場の日本語教師が授業にすぐ使える素材や情報を提供するとともに、この素材にもとづいて授業を進める際、参考となるアイデアをいろいろ提供しています。カリキュラムは、米国の州

教育庁のカリキュラムガイドとしては全米初のウィスコンシン州「日本語教育カリキュラムガイド」を土台にしています。「文化理解のための日本語のレッスンプラン」は海外から寄せられた優秀作品を掲載し、ノウハウの共有化をめざします。教師との交流を図りつつ、初等中等教育のための日本語教材情報や日本語教育事情など現場の教師に役立つ情報も定期的に更新しながら提供していきます。

■日本語あれこれ

日本語の表現のおもしろさを追求するページで、同音異義語の使い分け、イラストで覚える擬態語・擬音語、図解・日本語辞典、類義語の使い分けなど増大蓄積型のページです。

■中国語教育

現在、国内では200校あまりの高校で中国語を教えています。こうした高校の中国語教師や学習者に役立つ情報を提供し、交流を図るページです。高校中国語教育のためのガイドライン、中国語教育関連データ、中国語教育ニュース、ベテランの高校中国語教師に聞く授業のアイデア、ヒントなどもお伝えしていく予定です。

■中国語あれこれ

日中の漢字の意味の違いや間違えやすい表現を楽しく分かりやすく説明するコーナーです。将来は中国文化を探訪し、中国の生活文化や若者文化を多文化理解の観点から追求したいと思っています。

■日本関連図書情報

TJFが実施している日本関連図書を主とした図書寄贈プログラムの紹介や公募の案内、日本関連の情報誌や関連図書情報を紹介しています。

■ホームページ紹介

国際理解や文化理解促進のために活動している団体や日本語教育関連団体のホームページを紹介しています。



TJFから寄贈された
日本語教材で楽しく日本語を学ぶ



日本語かるたで
ひらがなの勉強

カラフルなこいのぼりの
うるこで色の名前を覚える



第4回全中国外国語学校中高生日本語弁論大会



II

国際文化フォーラム (TJF)が めざすもの



「ももたるう」のお話を熱心に読む



日本の小学生と交流する日本語教師

アメリカ中西部で日本語を学ぶ高校生



こいのぼりを作るオーストラリアの小学生

1.

事業の展望 「ことばと文化」 をキーワード として

若い世代への外国語教育を推進

若い世代に対する言語教育は、21世紀の国際社会の行方を握る重要なテーマであり、日本においても、国語教育、日本語教育、外国語教育全体を視野にいれた総合的言語教育政策が必要とされています。特に地球共同体の形成に向かって、言語と文化の障壁を乗り越えていくことが課題となっている現代、文化間コミュニケーションの手段としての言語教育、文化理解教育としての外国語教育の推進は急務であります。

TJFは、アジア・太平洋地域(インドネシア、オーストラリア、カナダ、極東ロシア、タイ、中国、ニュージーランド、米国など)の小・中・高校生への日本語教育を推進するとともに、双方向の交流を行うために、国内の高校生を対象にアジア言語(中国語、韓国・朝鮮語ほか)教育の促進を目指していきます。具体的には、それぞれの言語教育のインフラ整備への協力と、文化理解のための言語教育プログラムの開発を図っていきます。

文化理解教育としての言語教育の促進

日本語教育事業の対象地域については、英語圏では、これまでは米国が中心でしたが、今後はオーストラリア、カナダ、ニュージーランドにもネットを広げていきたいと考えています。その点ホームページや電子メールは国境に規制されずに進めることができます。またアジア地域については、これまでは中国に比重をかけてきましたが、日本国内のアジア言語教育との連繫を考え、今後はインドネシア、タイなど東南アジア各国にも広げていきたいと考えています。韓国は日本にとって重要な隣国で日本語教育も盛んですが、TJFとしては日本での韓国・朝鮮語教育の促進を優先していきたいと思えます。いずれにせよTJFは、各国の初等中等教育における日本語教育の基本的インフラ整備への協力をしつつも、最終的には文化理解・国際理解教育としての日本語教育の充実に努めていきます。

日本語教育を通じての文化理解プログラムの開発については、今後も文化理解を取り入れた日本語の授業アイデアコンテストを隔年で開催し、文化理解教育を考慮に入れた日本語教育の授業例や教授法のノウハウを蓄積するとともに、それをまとめて公開し、多くの教師に共有してもらおうと考えています。また同じ考えを持つ日本語教師とのネットワークを強化するとともに、他の言語教育でのノウハウを研究しながら、理論的枠組みを構築し、共同事業としてカリキュラムガイドや教材を制作していくことをめざします。

1997年度より始まった新たな10年は、第二の創業の92年度より実施してきた事業を継続し、着実に成果を生み出していきたいと考えています。多言語・多文化時代の認識にたち、これまでどおり「ことばと文化」をキーワードとして、さまざまな文化間の相互理解を促進することをめざします。その一つの方法として、若い世代に対する言語(外国語)教育と、出版メディアを通じての文化理解の促進事業に取り組んでいます。

小・中・高校生の生活紹介プログラムは、国際理解・文化理解教育と言語教育の双方を考慮に入れながら行うものです。95年に制作した日本の小学生の一日を紹介する写真パネルは、海外の日本語学習者の日本理解のための素材として制作されたものですが、今後も同世代間の相互理解を深めるために、さらに内外の小・中・高校生の生活を紹介したビジュアル素材を制作していく予定です。ステレオタイプな文化紹介に陥らないように、個性をもった一人ひとりのミクロの日常生活を1日・1週間・1年間のスパンで紹介し、同世代が関心を持ち、また共通点も多い日々の生活文化から出発して相違点や見えにくい文化の存在を明らかにするとともに、人間関係、考え方、趣味などを通じて、人間理解やその背景にある文化に対する理解を促進することを目指します。方法としては、写真、ビデオ、音声、メッセージ、プロフィールなどを総合的に活用してホームページに掲載したり、CD-ROM、写真カード、写真集の制作も計画しています。当面は日本の小・中・高校生と、中国の高校生の紹介から始め、徐々に他の国の小・中・高校生に広げていきたいと考えています。

国内外の外国語教育を連繫

東・東南アジア地域をはじめアジア太平洋地域の若い人々がお互いの言語を学ぶとともに、言語の背景にある文化を学び、学習している言語を用いて教師や生徒が交流することが望まれますが、TJFでは、これらをバックアップするために国内のアジア言語教育を促進する事業を

進めていきます。97年度事業として現在、中国語教育の追跡調査とともに、高校におけるアジア言語教育としては第2番目に実施学校数の多い韓国・朝鮮語教育の実態調査も開始しています。特に、中国語、韓国・朝鮮語はともに日本にとって最も身近な隣国のことばであり、それぞれの教育現場のニーズに対応しながら、教師の養成や教材開発といった基本的なインフラ整備、文化理解教育の促進のため、十分な時間とエネルギーをかけて地道にサポートしていきたいと考えています。

そして将来は、現在行っている日本の中国語教育と中国の日本語教育との間のリンケージばかりでなく、アジア・太平洋



地域の小・中・高校生を対象とする日本語教育、あるいは中国語教育とのリンクなど、初等中等教育における外国語教育全体との連携のなかで、交流のさらなる発展を図っていくことが、TJFに課せられた使命であると思います。

本を通じての文化理解プログラムの展開

文化紹介事業としては、出版メディアとのネットワークを生かし、図書寄贈事業を中心に「本」を通じての文化理解の促進に絞りこみ、特に言語教育事業と連動させながら、若い世代を対象とするプログラムを開発していく予定です。特に、日本の絵本や児童図書を小・中・高校生への日本語教育と文化理解プログラムに組み込んでいくことが、今後の最大の課題になっています。「文化のきずなとしての日本の童話と絵本」をテーマとする展覧会・講演会・ストーリーテリングや日本語副教材バックの寄贈プログラムの実施など、すでに試みてきたプログラムをベースに文化理解プログラムの開発に取り組んでいく予定です。

1997年3月にTJFのホームページを開設しましたが、事業全体や事務作業へのコンピューターの導入に向けてスタッフに一人一台ずつコンピューターが設置されたことの影響は大きく、今後コンピューターを駆使した事業の開発が焦点になると思います。『事業・調査レポート』などの図書資料の編集・出版も引き続き行っていきます。

文化交流も今後はより協力関係が重要になっていくため、相手国の人々との共同事業を進めていきたいと考えています。そのためにも志を同じくするカウンターパートとなる機関や協力関係を結ぶことのできる個人とのネットワーク化が極めて大事になってくると思います。



事業プログラム一覧



Ⅰ 言語教育と文化理解プログラム

■ 海外の小・中・高校生への日本語教育の促進

1) 中国中・高校日本語教育のインフラ整備(日中共同事業)

教師研修プログラムの実施、新日本語教科書の編集協力、教師のネットワークの構築

2) 文化理解を取り入れた日本語教育の促進

文化理解のためのガイドライン・教授法・教材の開発

(アイデアコンテストの開催、ホームページやアイデア集の制作、セミナー開催、日本の小・中・高校生の生活紹介教材の開発)

教師ネットワークの構築

(アイデアコンテストの開催、受賞者の招聘、応募者とのネットワークづくり)

3) 日本語教育事情の調査・研究・情報送受信

■ 日本の高校生に対するアジア言語教育の促進(外国語教育の多様化推進)

1) 高校の中国語および韓国・朝鮮語教育のインフラ整備

ガイドライン／教材の開発、教師研修プログラムの実施、教師ネットワークの構築

2) 文化理解を取り入れた中国語および韓国・朝鮮語教育の促進

文化理解教材の開発

3) 情報交流の促進、教師間・生徒間のネットワーキング

(高校でのアジア言語教育事情の調査・情報提供、中国における高校日本語教育との連繋)

■ 国際理解・文化理解教育の促進

1) 内外の小・中・高校生の日常生活紹介プログラムの実施

(生活写真コンテストの開催、ホームページや写真集の制作)

2) 文化理解・国際理解教育に関する研究

Ⅱ 本を通じての文化理解プログラム

1) 国内外の教育・研究機関等への図書寄贈

2) 小・中・高校生向け言語教育と文化理解のための図書プログラム開発

III 広報出版活動

- 1) 機関誌の発行
(『国際文化フォーラム通信』、*The Japan Forum Newsletter*)
- 2) 「事業・調査レポート 言語と文化シリーズ」の編集出版
- 3) 広報出版物の作成
- 4) 賛助会活動、その他の広報活動
- 5) TJFのホームページ (<http://www.tjf.or.jp/>) の運営

国際文化フォーラム(TJF)の事業概要

ことばと文化—相互理解をめざして

人のネットワーク・本・インターネットなどの
メディアを通じて

言語教育と文化理解プログラム

海外の小中高校生への日本語教育

対象地域:アジア・太平洋地域

国内の高校生へのアジア言語教育

対象言語:東・東南アジア地域の諸言語

国際理解・文化理解教育

本を通じての文化理解プログラム

海外の教育・研究機関への図書寄贈

小中高校生向け言語教育と
文化理解のための図書プログラム

広報出版活動

2:

メッセージ TJFに 期待する もの

私たちはこれまで、
多くの方々に助言・指導を
お願いしてまいりましたが、
設立10周年を迎えるにあたり、
国内外・各界の方々
(理事・評議員を含めて)から、
貴重な提言や
励ましのメッセージを
寄せていただきました。
TJFの第二の10年に向けての
指針とさせていただきますと、
ここにご意見をまとめました。
(『国際文化フォーラム通信』
第36号より一部を
再掲載しました。
中国語、英語で寄せられた
メッセージについては、
TJFで和訳、編集しました)



日本語を愛するより多くの人たちのために

私はずっと自分のことを大変幸運な人間だと思ってきました。これまでの成長の過程で、多くの尊敬すべき先生が私を導き、励まし、支えてくださいました。もちろんこれには、5年来ずっと私を見守り、期待を寄せてくださった国際文化フォーラムも含まれます。そのおかげで、私は怠けることなく、一つひとつの目標に向かって進むことができました。私は「この世に生をうけた」ことを一つの旅だと考えています。この旅で私が買ったのは片道切符です。時は一瞬にして過ぎ去るものだとこのことを知っていますので、この世の旅で無駄足をたくありません。

けれども、国全体あるいは世界全体を見渡しますと、私と同じように有意義な人生を渴望し、日本語を確実に身につけたい、日本を知りたい、普通の日本人と友達になりたいと切望している、さまざまな制度や障害によってそれが実現できない人たちが、いかに多くいることでしょう。

これまでの弁論大会は、一部の生徒の学習意欲を駆り立てたことは確かですが、一方、代表に選ばれなかった大部分の生徒の学習意欲をそぐことにもなりました。それに引き換え、昨年の教師研修会が教師たちに与えた喜びと励ましは言葉で表すことはできません。

特に普通中学の教師にとつて、一生にただ一度しかないチャンスであったかもしれません。一冊の本は、ある学校では図書館の隅に置かれ、目につかないかもしれませんが、ある学校にとつては、それが日本から贈られる本のすべてになることだってあり得るのです。

文化交流という事業は、さまざまな障害を克服して、二つの国をつなぐ架け橋としての役割を果たすべきだと、私は思っています。そうであるなら、フォーラムには、この橋をもっと長く、もっと広く、もっとまっすぐに架けて、日本文化を愛する普通の人たちがたくさん渡れるようにしてもらいたいと心より望んでいます。私は私なりに、微力ではありますが、喜んで尽力したいとつねに考えております。

韓艶梅

……北京外国語大学1997年卒業

永遠の友情を築いて

米国には、「私たちは人生において、自分が休むためではなく、人のために日陰を作る木を植えなくてはならない」という言葉があります。国際文化フォーラムの理念と、野間佐和子会長をはじめとする多くの日本の人びとのご協力のおかげで、ウィスコンシン州の教育界、経済界などの人びとの間で日本人に対する理解が深まりました。

特にフォーラム米国代表連絡員の伊藤幸男氏をはじめとする多くの人びとの努力で、ウィスコンシン州の子どもたちはこれまでにさまざまな恩恵を受けてきました。州内の学校の日本語と日本文化プログラムを充実させるために、延べ

160人を超える日本人が日本語教師助手として米国人の教師や生徒のために働いてくれました。また、ウィスコンシン州の教師延べ100人以上が日本の学校を訪問して、州の姉妹県である千葉県の学校で教えたり、ウィスコンシン青年シンフォニーオーケストラを含め、1,000人以上の生徒が日本を訪れたりしています。

フォーラムの協力により、現在、州内の73の学区で日本語を教えており、そのプログラムは州教育庁の日本語コンサルタントによって支えられています。アップルトンの子ども博物館では日本の子どもと文化に関する展示を行っています。ここでいかに多くの成果があったかを述べる紙幅がないのが残念です。

最近、私は州の北部にある先住民の学校を視察しました。その週の社会科の授業では日本と日本人について取り上げていました。これは、ウィスコンシン州の先住民の代表が、フォーラムの招きで日本を訪問してから行われるようになったものです。

ウィスコンシン州の子どもたちはフォーラムの理念と惜しみない支援によって多くのことを学びました。日本と米国ウィスコンシン州の人びとの間に築かれた友情は永遠に続くことでありましょう。

ハーバート・J・グローバー

……ウィスコンシン大学グリーン・ベイト教授
前ウィスコンシン州教育長



百年の大計たる人材養成

ちょうど10年前東京にいた私は、幸いにも国際文化フォーラムの設立に立ち会うことができました。それ以来、私と私の属する北京外国語大学は、友としてまた仲間としてフォーラムと密接な関係を保ち続けてきました。この10年の間、私はフォーラムの成長過程を直接あるいは間接に見てまいりましたが、非常に充実した歳月であったと思います。

中国には「木を育てるには十年、人を育てるには百年」という言葉があります。国際文化フォーラムは事業規模においても、業績においても、今や優れた大木に育っておりますが、その事業の中心はまさに「百年の計」たる人材養成におかれています。特に中国では、フォーラム独自の援助と支援の下、全中国大学生日本語弁論大会(北京外国語大学と共催)と全中国中高生日本語弁論大会(各地の外国語学校と共催)がそれぞれ4年連続で開催されております。また、毎年春の北京市青少年日本語コンテスト(北京市青年連合会と共催)は、すでに10回を数えました。1989年、まださまざまな困難を抱えていた時期に行われた大学生スピーチコンテストが、われわれ主催校および全国の日本語教師にとって、まさに「雪中に炭を送る」ものであったことは、今もって忘れることはできません。

フォーラムの日本語教育支援事業は、中央から地方へ、大学生から中・高生へと広がりを見せ、昨年はさらに遠大な展望のもと、中高生のスピーチコンテストから中高校の日本語教師養成へと発展しておりますが、これは日本語教育

の交流の中で初めての試みであり、これによって中国の日本語教育に対するフォーラムの支援はより一層拡大し、第三の段階を切り開くことができました。

この日本語教師養成は、フォーラムが日本国内で行っている高校中国語教育支援活動とともに、まさに両国の若者の友好関係を促進する百年の大計として21世紀に大いに貢献するに違いありません。私はフォーラムのこうした事業が今後も発展し、大きな成果を上げることを心より願っています。

嚴安生

—北京外国語大学教授
北京日本学研究所センター所長

寄情のネットワークをめざして

山歩きを通じて知りあった友が、一幅の書を贈ってくれた。現代中国人書家の手になるもので、墨をたっぷりと含んだ字画は「寄情」と読めた。

はじめて眼にすることばだ。小さな漢和辞典には載っていない。諸橋轍次著『大漢和辞典』によれば、「寄情」とは「思を物にこと寄せる。物にふれて感興が起る」とある。本来、「物」は「天地間にある有形・無形すべてのもの」を意味するから、この書の2文字は、生きるわたしたちが折に触れていただく感情のすべてを言いあらわしている。

「きじょう」と小さく声に出してみる。気持ちがおだやかになる。「思を物にこと寄せる」ことは、共感がなくては成り立たない。共感とは、ものごとがそこにあることを受け入れ、許すことからはじまる。

国際文化フォーラムが実践し目指しているのは、寄情のネットワークだろう。世界の人びとの思いがゆきかう場をつくること。わたしの感情は、時とともにうねる。だが、それはわたしひとりのものだ。ひとりの心情を他の人間と共有することはむずかしい。相手の存在を認めることは、理解からはじまる。わたしたちは、まず日本列島での日々の暮らしぶりを世界の人に知ってもらわなければならない。国際文化フォーラムの情報発信の意味は、そこにある。

国際文化フォーラムの場で、わたしは、ロゴマーク、事業調査レポート、フォーラム通信、インターネットのホームページのデザインを手がけてきた。グラフィック・デザインが、「物にふれて感興が起る」ことに視覚的な秩序をあたえようとする行為ならば、国際文化フォーラムのしごとでは、デザインの基本がきびしく問われてきたといえる。なぜなら、完成品の納入に対して報酬が支払われる通常のビジネスとはちがって、寄情の支援に完成はないからだ。緊張に耐えられる範囲で、これからももてるエネルギーを注ぎたい。

鈴木一誌

—グラフィック・デザイナー





国際文化交流の舞台で心のこもった演目を

東京都庁がそびえ立つ西新宿、その都庁の向かい側にある高層ビルの26階に国際文化フォーラムはあります。

1996年、中国における高校の日本語教科書の日中共同編集のため、国際交流基金の招聘により日本に滞在していた私は、ほとんど毎週のように日本側編集委員会事務局を務めるフォーラムを訪れていました。フォーラムでの数々の出来事は今も私の心の中に美しい思い出となって残っていますが、その思い出はまるで田園の風景のように忘れ難く、また心を揺り動かす一篇の詩のようにいつも私の耳元に響いております。

私より2歳上のフォーラムの牛島事務局長は、人あたりのよい、親切なお人柄で、情熱的に事業に立ち向かっていました。おつきあいさせていただくうちに、私は牛島さんを「牛さん」と呼ぶようになりました。中国では、秋の収穫期に田畑で朝から晩まで働き続ける牛は大変賞ばれておりますが、フォーラムと「牛さん」とっては国際文化交流という大舞台が田畑であり、「牛さん」と仲間の方々はこの大舞台で日夜努力を重ね、見事な演目を次々と舞台にのせていらつしゃいます。この舞台の上で繰り広げられる心のこもった台詞や虚飾のない舞台装置、自然な動作、ソフトな照明などが、舞台をひときわすばらしいものにしています。

また、フォーラムのスタッフのうち4分の3が女性ですが、中野事業部長をはじめとする女性スタッフの方々が仕事にかける無私の精神に、私は常に感嘆していました。グローバルな視野をもった女性スタッフの皆さんは、優しい微笑を浮かべながら国際社会で活躍され、各国の人びとと肩を並べて世界に平和の楽園を建設することに情熱を燃やしておられます。

フォーラムは、これまで中国の中等教育課程における日本語教育に多大な努力を払ってこられました。私は、わが国の教育事業のために、困難を排し黙々と努力を続けてこられた日本の友人の皆様にも、心から敬意を表するとともに、今後も中国の日本語中等教育のためにより一層の貢献をされることを祈ります。

張国強

……中国課程教材研究所助教授

中国教育学会外国語教学研究会日本語專業委員会委員長

健全な体力をもつ団体に

中国は広いが、中国語(教育)の世界は狭い。英語教育に関する学会や研究会は数え切れないほどあるのに中国語教育については、高校、大学とも数えるほどしかない。にもかかわらず、10年以上の活動を重ねる全国高等学校中国語教育研究会をご存じない中国語教員が全国に多く存在するのも、揺籃期ゆえの限界、力量不足と歯がゆい思いをしていた。そこに爽やかな風を吹き込み、われわれを「前へ!」と押し出す役割を果たしてくれたのが国際文化フォーラムである。第5回倉石賞を、伊地智先生の推薦で研究会が受賞した。授賞式会

場の少し暗い、混雑した廊下で初めてお会いしたのが中野さんと水口さんである。

その後フォーラムは中国語教育実施全高等学校へのアンケート調査を行い、その分析結果を『いま高校中国語教育を問い直す』の発行へと結実させた。その反響の大きさは、この調査がまさにタイムリーな企画、信頼できる内容であったことの何よりの証明である。またわれわれが1993年にいったんは断念した高校中国語教育のガイドライン作成についてもフォーラムのサポートはいまも続いており、今年度中には4単位レベルをぜひまとめなくてはならないと焦っているのが現状である。

21世紀に向けてその影響力が大きいがゆえに日本に向けられる世界の視線はより厳しくなっていくであろう。こうした中で、明日を担う若い世代にバランスのとれた国際的視野と意識を培う教育がますます必要となっていく。欧米＝英語圏に偏りがちな若者の視線をアジアにも向けさせるためには、アジアの諸言語教育を大衆的に推進することが有効な手だてであることは、すでに各高校で実証済みである。アジアの言葉を学んだ生徒たちが、時にその国の言葉、時に英語、時に日本語で互いに学び、働き、ともに生きる。こんな日が来てくれることを夢みている。これからも生徒同士の交流、教員研修と交流など、やるべきことが続出してくることは間違いなく、それを実行するだけの健全な体力を持つ団体であり続けてほしいと念じている。

中野貞弘

……兵庫県立神戸商業高等学校教諭
全国高等学校中国語教育研究会副会長

心と心をつないで

私からはじめて国際文化フォーラムと出会ったのは1989年のことですが、当時、私たち新米の日本語教師はどうやって生き残ったらいいものかとパニック状態に陥っていました。さらには授業、日本語プログラムそのもの、教材についてもどうしたらいいかわからず、日本語教育に対する信念さえも揺らぎ、助けを必要としていました。フォーラムが、私を日本語教師として独り立ちさせ、目標や夢をかなえさせてくれると知って、驚き、また感動しました。以来、フォーラムからはさまざまな面で本当に有益で適切な支援をいただけてきました。おかげで、生徒たちのために考えていた目標と夢を実現することができました。

現在、私はパートナーとしてフォーラムの理念を共有していると信じています。いろいろな方面から援助を受けてもそれだけでは時に欲求不満に陥るものですが、フォーラムの場合は私の助けも求めてくれます。私は、フォーラムの事業やニューズレター、米国での活動に協力できることを誇りに思っています。教材や、日本語教師としての専門性の向上などについてフォーラムからはかりしれない支援をいただいています。これに報いることは、やりがいがありますし、それを誇りにも思っています。

フォーラムは、私たち日本語教師がすでに実践していること、望んでいること



を理解し支持してくれます。また、私たちが成長していることを知っており、私たちとともに成長したいと考えている団体なのです。好奇心と柔軟性をもって私たちの希望を知ろうとし、それに対応できるようにプロジェクト内容や協力体制をつくってくれることに私たちは感謝しています。フォーラムのスタッフはいつでもあたたかく、「日本語を世界の子どもたちに教える」という共通の使命感をもって努力する同志として私たちに力づけてくれます。私たちは理念を共有し、教師と教師、国と国、心と心とを結んでいるのです。

ベギー・ハグマン

……ワイスコンシン州メース高校日本語教師

本を通じた国際交流の継続を

ヴィジョンの会は、英文で書かれた日本文化紹介の書籍を海外の公共機関(図書館、学校、研究所)に寄贈して、日本をより正しく理解してもらおうよう、本を通じて国際交流を進めているボランティアのグループです。長期にわたる海外滞在経験を持つ女性5名によって1988年に設立されました。海外滞在中、お世話になった地域に感謝の気持ちを表すために、お返しとして本を贈ろうということになったのです。会員たちで活動資金を集め、また国際文化フォーラムをはじめ、多くの出版社のご協力を得て図書を購入し、バックにして寄贈してきました。寄贈の方法としては、現在海外に滞在している日本人の方々に図書の送料を負担していただき、その方々を通じて寄贈するようにしています。感謝の輪がひろがることを大切にしたいからです。

この9年間、試行錯誤を繰り返し、悲しんだり、がっかりしたり、喜んだりの活動の中で会を支えてくれたのが国際文化フォーラムなのです。会の活動方針や書籍の選択への助言、国内外の情報交換、英文図書の提供などその恩恵は多大なものがあり、感謝の念でいっぱいです。

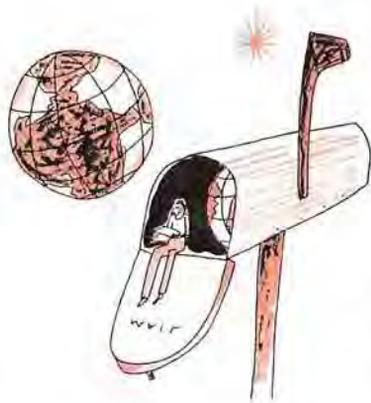
今日まで約460か所の海外の図書館や学校などの公共機関に寄贈し、たくさんの礼状が返ってきています。フォーラムの図書寄贈の活動がますます発展し、国際交流の重要な担い手となることを願っています。私たちとともに活動できることを願って会員全員が意欲を燃やしています。

松井外恵

……ヴィジョンの会会長

日本語と文化理解プログラムの開発を

国際文化フォーラムは、世界各国の日本語教師を支援しています。私たちオーストラリアの日本語教師は、小学校ではたった一人のLOTE(英語以外の言語)教師として、中学校ではほんの数人しかいないLOTE教師の一人として孤軍奮闘しなければなりません。日々、子どもに対しては日本語を魅力的におもしろく教



えなければならず、同僚の教師に対しては日本語教育がいかに有意義であるかを示さなければなりません。

フォーラムは、各国の学校に情報や教材を提供しています。現場の教師の話に耳を傾け、そこから学んだこととフォーラムのもっている専門性を生かして、経済的で質の高い、教師にとって使いやすい教材を制作しています。日本語プログラムを行うには多くの準備時間と教材開発が必要ですが、フォーラムにはアイデアや助言を寄せていただいたり、教材を提供していただき、私たち教師が円滑に授業を進められるよう支援していただいています。

フォーラムはまた出版物を通じて、日本語能力が不足している教師や日本語教育の経験の浅い教師に指針を与えてくれます。フォーラムの出版物を通じて、世界各国の日本語教師は日本と日本語教育について学ぶことができると同時に、他の日本語教師と新しいアイデアや授業活動に関する情報を共有することができます。

言語学習の過程で文化について学ぶことによって、日本語は子どもにとって意味のあるものとなります。しかし、自らの体験を通じて日本語、日本文化を教えることは、地理的にも文化的にも距離のある国の教師にとって難しいことです。フォーラムは言語教育における文化的側面を重要視し、教師が現在行われている言語プログラムのなかで文化理解を取り入れていけるよう事業を展開しています。

フォーラムが次の10年も私たちを支援し、世界中の学校の日本語と文化プログラムの開発に貢献してくれることを願っております。私も今後変わることなくともに仕事をしていきたいと思っています。

キャサリン・マッコイ

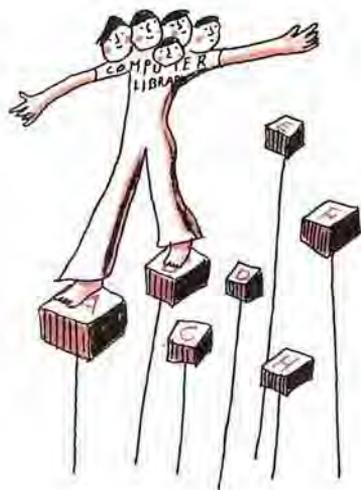
……ブリティッシュコロンビア州バンクーバー市 elementary school 日本語教師



世界各地に“Japan in a Suitcase”を

過去数年間、国際文化フォーラムは米国ワシントン州シアトルの日米協会(JASSW)の活動を熱心に支援してくれました。4年前、JASSWでは、アメリカ人と日本人のボランティアが地域の小学校で日本語と日本文化を紹介する“Japan in a Suitcase”プロジェクトを開始しました。多くの子どもにとって、これが日本とのはじめての出会いとなるため、紹介する内容は正確、具体的かつ魅力的であることが大切です。紹介にはビジュアルな資料を使い、子どもたちが実際にものに触ったり、身体で感じるができる体験学習を取り入れています。このプロジェクトに必要な最新の日本の写真や小物類(日本の小学生のランドセル、帽子、給食用具、文具等)は現地で調達することが難しく、私たちのパートナーであるフォーラムを通じて日本から贈っていただいています。

今後、フォーラムが他の団体にも同じような支援を行い、同様のプログラムを独自に開発してくださることを望んでいます。フォーラムの支援は効果的で、日米協会の判断と指示を尊重し、先入観にとらわれ自らの考えを押しつけることもあ



りませんでした。プロジェクトをコントロールすることなく、本当のパートナーとしてその機能を果たしてくれました。フォーラムの協力がプロジェクトの成功を確実なものとしたのです。

他国の団体が同様のプログラムを実施する際にも、フォーラムは協力できると思います。シアトルでは、日本企業の駐在員の夫人が一時的にボランティアとして登録し、日米関係を改善しようという地域の人とともに活躍していますが、他国でも同じことができるのではないのでしょうか。このプログラムの恩恵を受けているのは子どもたちだけではなく、日本人のボランティアにとっても有意義で多々学ぶことがあったのではないのでしょうか。草の根レベルで相互理解と友好を促進するもつともよい方法だと思います。

スーザン・澄・望月

—前ワシントン州日米協会専務理事

実行力を発揮して

1989年、私は国際交流基金からオーストラリアのクィーンズランド州の教育省に日本語教育アドバイザーとして派遣されていました。日本語教育調査団が来豪し、教育省や大学、中等教育現場などを視察したとき、私は現地側のスタッフとして案内、通訳などを務めました。それが事務局長牛島通彦氏との出会いです。その後、1994年に州教育庁の日本語教育コンサルタントとして米国ウィスコンシン州に派遣され、国際文化フォーラムが米国の中等教育における日本語教育にも深く関わっていることを知りました。

ウィスコンシンでは、フォーラムの米国代表である伊藤幸男氏を通して、フォーラムは積極的に日本語教育をサポートしていました。フォーラムは全米初ともいえる州の教育庁主導の日本語教育カリキュラムの作成を助成し、私もこのプロジェクトに関わりました。

写真パネル「けんたろうくんの一日」にしても同様です。ある時フォーラムから海外で求められている教材について尋ねられ、ごく普通の日本の子どもの生活がわかるようなリソースがあればと何気なく答えたところ、ある日本の一家の写真がさっそく送られてきて、キャプションを考えてほしいとの依頼がありました。つたないキャプションから素晴らしい教材へと作り上げたのはフォーラムの若いスタッフの方々です。

また、日本に行ったことのないウィスコンシンの子どもたちのために、日本紹介のポスターを山のように送ってくださり、現場の教師にとってはまさにサンタクロース来訪のような出来事でした。

現在は、完成した前述の *Japanese for Communication* というウィスコンシンのカリキュラムガイドを、教師たちが自分の用いている教科書や教材と関連させて使いこなすための一例として、「けんたろうくんの一日」と関連させ、ホームページに載せて誰もが自由に使えるような工夫をしています。

どうかこれからも、新しいニーズを発見したら素晴らしい実行力を発揮して、

そのニーズに応じていていただきたいと思います。

吉岐久子

……国際交流基金ロンドン日本語センター主任指導講師

終わりにき仕事に協力して

私たちの学校では1992年7月、国際文化フォーラムとともに第1回全中国中高生日本語弁論大会を開催して成功を収めることができました。この大会は、わが国の中・高校の日本語のレベルを明確にするとともに、中・高校の日本語教師の相互交流を促進し、生徒のコミュニケーション能力を向上させ、日本語中等教育の問題点を明確にする良い機会となりました。その後もフォーラムでは、同大会を武漢外国語学校・南京外国語学校・上海外国語学校とともに毎年開催し、中等教育レベルの日本語教育の発展に大きく貢献しました。

しかし、弁論大会を通じて認識したことは、牛島事務局長が言われたように「一人の優秀な学生がいてもそれはその学生だけのことだが、一人の優秀な教師がいれば30人、50人、さらには何百人もの優れた学生を育てることができる」ということでした。その考えに基づき、光栄にも当校は1996年8月にフォーラムと共催で第1回中国中高校日本語教師研修会を開催することができました。フォーラムでは細心の配慮をもってこの研修会を準備し、研修会参加者はフォーラムのスタッフが会場でみせた真剣な姿勢にたいへん感銘を受けました。また招聘された教授・講師の真摯な姿勢や生徒を引き込む魅力的な授業内容などは、参加した教師たちにとって大きな収穫となりました。

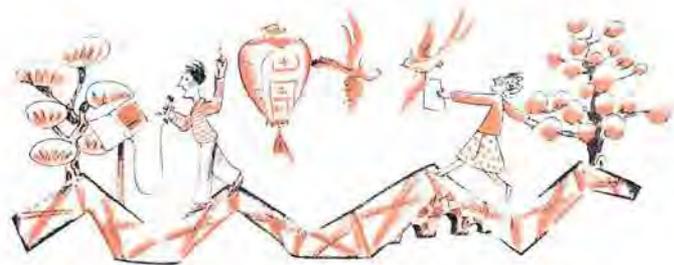
また、フォーラムの働きで、各方面より当校の教師・生徒に日本語教材・辞典・雑誌などさまざまな資料も提供していただきました。

「第2回中高生日本語スピーチコンテスト環太平洋大会」(世田谷ビレッジ主催)で当校の生徒である馬浪が最優秀賞を受賞し、李雪が会場特別賞を獲得することができたのも、フォーラムの仲介によるものでした。

この10年来、フォーラムは中日人民、特に若い世代同士の文化理解の橋渡しに尽力してきましたが、われわれの仕事には永遠に終わりはありません。私は、これまで築いてきた協力関係が引き続き発展することを願ってやみません。私も全力でフォーラムを支持していく所存です。

劉元松

……長春外国語学校校長



文化交流で「世間」勉強

戦後、日本の学校教育に社会科が取り入れられたとき、柳田国男は「大変いいことだ。世間勉強とすればもっといい」と言ったという。独りよがりの「共楽圏」を振り回した末の敗戦、日本は国際社会という世間を知らなすぎた、アジアという世間での付き合いを間違った、という思いがあったのだろう。

いま国際関係の大事なキーワード「民族」とは、ヒトの集団を言語、宗教、慣習など文化の要素で区切ったもの。技術の進歩などを背景にヒト社会は融合への過程にあるが、長い時間をかけて「分化」しただけに、融和もおおそれとはいかない。接触・交流には摩擦も伴う。放っておけば紛争や戦争の危険もある。ヒトは共存できるという信頼感を生むこととの時間的競争である。言葉を通しての相互理解、いわば互いに世間勉強をしようという仕事に打ち込んでいる国際文化フォーラムにエールを送る所以である。

饗庭孝典

……杏林大学教授

謙遜と傲慢

日本では多くのことが、この国に生まれ育たなければわからないと信じられてきました。その背後には、私たちのことなど世界が気にかけてくれるはずがないという謙遜と、私たちのことを世界がわかろうはずがないという傲慢が歪んだ対を成していたようです。日本語とその文化を理解してもらうという発想はその意味で、謙遜も傲慢ものりこえて心を世界に開いていく試練を日本社会に課しているのではないかと思います。

対人関係においても、心を開くプロセスは自らのことを相手にわかってもらおうとすることから始まりますが、その努力の過程で、さまざまな変化が自分の方にも起こります。日本人は、外国人は日本人のようにしゃべれるようにはならないと考えがちですが、たとえば英米の大学人や職業人は世界各地の人々が勝手なアクセントで英語をしゃべることを受けいれます。その不正確さに失望するより、たとえば出版社であれば、文章の精度を高めるエディターを常駐させるなど、英語の国際的使用をプロの観点から補う仕組みを築いています。日本も、日本語を教えるだけ

でなく、学習者が日本語を使用する職業人として自立していくための社会的サポートの仕組みを広範に築いていく必要があります。

また、相手に理解してもらう過程で、自分を見つめなおし、高めていこうという動機も形成されます。海外での日本語学習が、日本の社会や文化の内実を充実させていく契機となるようにしたいものです。

猪口邦子

……上智大学教授

「ヒューマニズム」の再考

個人的な話で恐縮ながら、中国には学生時代からの知り合い、終戦当時現地の捕虜生活でお世話になった方々、戦後仕事で親しくなった財界人、そして同じ銀行で働いている若い中国の行員等、数少なからぬ知人がおります。彼らのものの考え方には、政治体制の変遷や諸外国(日本を含む)への隷属の歴史等の史実を超越した「ヒューマニズム」があり、日本人として感銘を受ける数多くの機会に恵まれました。

さて、フォーラムのプログラムは、諸外国に日本(語)を紹介するという側面に加えて、我々日本人に希薄といわれる、この「ヒューマニズム」を再考させる絶好の機会ともいえましょう。将来、国際社会において日本が従来以上の責務を円滑に果たすためにも、「ヒューマニズム」の醸成が重要な基盤になると考えております。

伊夫伎一雄

……株式会社東京三菱銀行執行役員

これからも 言語文化発信型の事業を

国際文化フォーラム設立の当初から日本語教育に多大な関心をよせておられた牛島さんに、是非、教育の現場を行脚してご覧になってくださいとお勧めして10年になります。

この間に野間会長をはじめ、熱心に事業計画をねり、創意工夫をもって諸活動を実現させてこられたスタッフの姿勢には敬意の念を抱いてきました。特に、日本語教育の分野ではもともと学習者の多い中等教育に目を向け、海外のニーズに応じて具体的なプロジェクトを展開し、言語文化発信型の事業を一

つひとつこなしてこの10年の歩みを刻まれたこと、さらに、日本の中等教育における中国語・韓国語・朝鮮語の教育にも目を向け、アジアの国々に対する理解の促進に貢献されたことは財団の活動を特長づけています。教育の成果を見るには時間がかかりますが、忍耐強く対応し、国内外から素晴らしいアイデアを吸収しつつ21世紀に向かって柔軟に大きく羽を広げていかれることを期待しています。

上野田鶴子

……東京女子大学教授

21世紀に向けて

この10年間、国際文化フォーラムの多方面にわたる地道な事業活動により、国際文化交流が促進され、なお一層の理解が得られましたことは、ひとえに野間会長をはじめとして、事務局ならびに関係者の方々が創立時の志に燃え、情熱と努力を傾注されたたまものと改めて敬意を表わす次第です。

情報入手が容易なコンピュータ社会を迎え、国家・民族の枠を超えて進展する経済・社会のなかで、来るべき21世紀を担う若い世代は、否応なく地球規模での共存・共生の時代に生きねばなりません。共生のためには、その原点にある国家・民族に固有な文化の異質性を乗り越え、相互に理解と知識を深めることが不可欠ですが、国際文化フォーラムの志向する国際文化交流は、まさにその重要な使命を帯びた事業といえます。今後10年、20年、……と息の長い活動が必要とは思いますが、財団の末長いご活躍を期待し、併せて財団の一員として微力をつくさせていただきたいと考えております。

打越志郎

……日本製紙株式会社代表取締役副社長

これまでの事業の基本線を堅持して

「日本語と日本文化」というテーマに焦点を絞り、それもとりわけアジアの近隣諸国への支援を重視して、他の財団には見られない特色ある事業を、この10年間、堅実に展開なきったことは正解であったと思います。このテーマによる財団の事業方針を着実にこなされる事務局長、事業部長、そしてその補佐役の方々の熱意と手腕に大いに敬服しております。

今後もこの基本線での事業の発展を大いに期待しています。

貴財団には、現在私が会長を務めている異文化教育学会の事業に対し長年にわたってご支援を賜り、誠にありがたく心から感謝申し上げます。お陰様で学会は順調に発展を遂げ、この5年の間に会員数は倍増し、まもなく1,000人を超えそうな勢いです。「言語と文化」というテーマは、私どもの学会の重要テーマの一つでもありますので、貴財団のご活動には大きな関心を持っております。

江淵一公

……成蹊大学教授

文化や習慣の壁を乗り越えるために

世界には様々な文化が存在しますが、21世紀を目前に控えた今日、経済活動や自然環境保護といった場面において、世界は国境や文化を超えて対応していかなければならない段階へ進んできております。しかしながら今後進んでいく先には異なった文化や習慣といった壁が存在していることも事実であります。その壁を乗り越えていくには、文化や習慣の基本要素となっているお互いの言語を理解することは不可欠であります。特に日本は独特の言語をもっており、世界の人々に日本を理解してもらうためには格別の努力がかかせません。TJFはその不断の努力を10年前から続けられており、これからも続けていくことがTJFの使命であると考えます。

大國昌彦

……三子盛成株式会社代表取締役社長

国際社会の流れを見据えた展開を

国際文化フォーラムは、わが国の言語および文化の普及に関する各種事業を推進することにより、諸外国とわが国との相互理解と友好協力関係の増進に寄与することを目的とする財団であります。

事業目的はたいへん雄大であり、営利事業を目的とする民間会社と異なり、事業目的を具現化しプログラム化して遂行していくこと、また、その効果を測定し、フィードバックして適宜に事業プログラムを変更充実していくことはたいへん難しく、たえず試行錯誤し、自問自答を繰り返して事業展開をしてきた10

年間でありました。

また、財政的にも超低金利時代が続いており、当財団を取り巻く経済環境はたいへん厳しく、講談社をはじめとする出捐企業、賛助会員から多大な援助を受けながらの10年間でした。現在当財団が展開している言語教育と文化理解プログラムが、将来において互いに異なる文化を尊重し合う精神を醸成し、諸外国との相互理解と友好協力関係を深めるのに役立つことを期待するとともに、急速に進んでいる経済のグローバル化、若者文化(ファッション・音楽・生活様式など)の類似化・共通化・標準化、また、コミュニケーションの手段としての英語の国際共通語化など、国際社会の大きな流れと変化を見据えた上での新しい展開にも期待しております。

小田倉正典

……公認会計士

新たな展開をみんなで考える時

国際文化フォーラムの「文化」とは、きわめて幅の広い言葉である。講談社が中心となれば何とかまとまっていくと思ったが、「言葉、文化、教育」という講談社の活動の中核を事業の理念として、設立から10年の間に予期以上の発展をしてきた。

これでもまだ幅が広いので、その中から自分のやる意味の大きいものを選び求めていかなければならない。そしてそれを毎年、あるいは一定の年限ごとに見直していく必要がある。

10年というのは大きな節目になるので、従来の活動を顧みながら、新たな展開を考える時だといえよう。さあ、みんなで考えてみようではないか。

加藤一郎

……成城学園名譽卒業生

各国との相互主義の原則を貫いて

これまでの十年にわたる活動が成果を上げてこられましたのは、単に日本語を他国に普及させるという一方通行の活動ではなく、各国との相互主義の原則を貫いてこられた結果だと考えております。

それは、お互いの国の言葉をお互いに学ぶことから始め、言葉の持つ真の意味を理解することによって、それぞれの国が持っている独自の文化を理解

し合い、真の交流を深めていくことではないでしょうか。

このような国際交流のできる人々を数多く育て、お互いの文化を尊重し合い、率直にコミュニケーションできる世界にするためにも、この活動を息長く積み重ねることに大きな意味があると思っております。

フォーラムのますますの発展をお祈りするとともに、いささかなりともお役に立つよう努力いたしてまいります。

北島義俊

……大日本印刷株式会社専務取締役

次世代に受け継がれる活動を

この十年の世界の動きは、急速かつ大きなものがありました。日本の国際交流も重要なものになってきました。他国語を通して異文化に接する機会が、質量ともに変わってきました。フォーラムのみなさんが担ってきた諸言語の教育を通して、各々の文化の理解を進めてきたことは多くの人から評価を集めてきました。

最近の光、電波を利用した通信手段は大きな発展を見せています。とりわけ、インターネット等による交信は世界の更なる変化の原動力となるでしょう。他国語を学び、各々の言語を通して異文化を相互に理解し、コミュニケーションをはかることが、大切な基本だと考えています。私どもにできる小さな努力を重ねてフォーラムの活動に参加していますが、これらの活動が次の世代へと発展するよう心からお祈りします。

北見鏡三

……大日本印刷株式会社専務取締役

“個性”は文化から

外国で暮し始めてから、すでに35年余りの月日が過ぎました。年に二、三回、コンサートのために帰国しますので、日本人であることは絶えず意識してはいますが、年々、日本への熱い想いが醒めつつある自分に戸惑っています。経済大国と言われ始めてからのことだと思えます。美しい日本と日本人が急速にそれぞれの顔を失い、金銭至上主義になっていくのを見ると深い悲しみに襲われます。物の豊かさや反

比例して日本人の顔から生気が消えていきます。物からではなく、自分自身から生きる喜びを創ること、これが今、日本人に求められる最大の決意だと思えます。日本人一人ひとりが文化人になること、それが世界の中の日本として生き残れる最良の方法だと思えます。

ガンバレ！ 国際文化フォーラム！

黒沼ユリ子

……ファイオリニスト

多言語・多文化の立場にたつて 相互交流を

中国人に「家にたくさん余っているから」といって品物をあげたら喜んでくれなかった、という話を聞いた。中国人は「あなたのために特に用意した」といってプレゼントする。日本人には押しつけがましくとれる発言だが、相手に心理的な負担を与えまいとする日本人好みの心遣いは中国語に直訳できない。外国語を学ぶとき、ことばを操る技術だけを習得し、その背景にある文化を理解しなかったら、学習の意義も薄れる。

特に日本人の中国語学習では文化を共有していると錯覚してしまう。漢字文化圏、儒教文化圏などと一括するのは、日本人の中国に対する思い入れをこめた見方というべきであり、中国語学習を通じて中国人の言語表現、さらには非言語表現に触れれば、異文化の側面を多々実感できる。

国際文化フォーラムが多言語・多文化の立場で、海外の日本語教育と日本国内のアジア言語教育を支援していることは、極めて有意義である。往復そろってこそ異文化を語れよう。中国の中・高校生に対する日本語教育と日本の高校生に対する中国語教育の双方が取り上げられ、日本人にとって異文化意識の希薄な中国語学習を、感受性の鋭い高校生に対しサポートしていくことは、21世紀の日本にとって有用である。

輿水優

……日本大学教授

新しい日本文化の創出を

国際文化フォーラムが設立十周年を迎えた。おめでとう。理事の末席に連なる一人として会長、理事

長はじめ、創立以来フォーラムの活動に直接かかわってこられた方々に心からの敬意と祝意を表したい。

「我が国の文化に対する諸外国の理解の深化と促進」、これが当フォーラム設立のミッションだが地味で息の長い仕事である。本年度の事業展開は内外の若い世代対象の言語教育支援、我が国の文化紹介、そして出版、編集の諸事業を柱に行われている。基本的にはこの柱を大きく変える必要は当分なさそうだ。

しかし、自国の文化で是非外国に伝え、分かってもらいたいものは何かと考える時、この50年間、我が国は果たしてどんな文化を日本に、あるいは日本人として創りあげたのだろうかとハタと戸惑う。ましてや世界的に価値を持つものではなおさらである。

古来の良さを発信すると同時に、発信するに値する新しい日本文化の創出もフォーラムの視野に入りたいものだ。

小林陽太郎

……富士ゼロックス株式会社代表取締役会長

ゴールのないマラソン

十年間の活動を支えていただいたすべての方々に心から感謝申し上げます。

財団設立当初の「日本語と日本文化の普及」という理念には若干の違和感を持っていましたが、現在の「言語と文化をキーワードに異文化間の相互理解」へ軌道修正が行われてよかったと考えております。しかしながら、「異文化理解」という、ゴールのないマラソンを完走することは不断の努力と情熱を必要とすることでしょう。

コミュニケーションの手段としての言葉を「必要条件」として、生身の人間同士が接点を持てるような活動ができれば、「十分条件」を充たすのではないかと思っております。慌てず着実に活動を続けていただくことを期待いたします。

近藤親司

……株式会社通訳社代表取締役

多様なアジア言語の 普及をめざして

経済に偏った国家間の関係は様々な摩擦を生じることから、一貫して言語教育を通じた文化間の相

互理解に取り組んでこられたことは、大変意義深いことと存じます。

経済のグローバル化により、民間レベルでの国際交流の重要性が高まっていますが、21世紀に向けて高い経済成長が期待され、貿易や人的交流が活発化しているアジアについては、より重要な課題といえます。国際社会におけるマルチカルチャリズム(多文化主義)の流れの中で、多様なアジア言語を国内で一層普及していくことが強く望まれます。

また、コンピュータの普及により、海外の日本語学習者に対してマルチメディアを活用した支援を充実することが求められています。このような面への取り組みを強化しつつさらにノウハウを蓄積し、言語を通じた国際交流の面でこれまで以上にセンター的役割を果たされることを期待いたします。

櫻井孝穎

第一生命印刷株式会社代表取締役会長

TJFの今後の事業活動について

第一次の産業革命を引き起こすきっかけとなった大きな発明の一つは、1450年頃のグーテンベルクによる活版印刷技術でした。それまでは、口頭で、あるいは、手書きで伝えていた情報を、紙の上に文字を固定させて、大量に、しかも間違いなく、スピーディに伝達、伝承することができるようにしたことです。

現在のいわゆる第二次産業革命においては、その活版印刷術の役目を、製版・印刷技術のデジタル化と、通信技術の発達が背負っています。日く、マルチメディア技術であります。新しい技術が新しい世界を拓きつつあります。

たとえ情報の伝達のツールやメディアが変化しようが、TJFの目的は、何ら変える必要はありません。われわれの目指す、アジア・太平洋の近隣諸国同士が、お互いをより深く理解しあうことの重要性が、21世紀にはますます増大することでしょう。なぜなら、世界の目が、その地域に集中してくるからです。

鈴木和夫

凸版印刷株式会社取締役相談役

「無形の文化」

国際文化フォーラムという名称を、私は国際言語文化フォーラムとすべきではないかと思えます。TJFは日本で非常に少ないプライベートな財団で、しかも設立の主体が、講談社を中心に出版、印刷、紙関係の会社であることから考えても、徹底して言葉という無形文化財を中心として、日本と外国の相互理解を深めるという自己規定を再確認した方がいいと思うのです。国際文化交流を行っている団体は多くありますが、ほとんどの場合、形のある文化が大きく場所を占めています。しかし言葉は無形なものであり、文字というのも無形で消えてしまうものを留める手段で、ある意味で無形文化財です。本には形がありますが、本質は無形の文化。出版というのも結局、無形の言葉に形を与えることです。

TJFの事業の対象地域として私は、自分たちの隣りと周りの環太平洋というものを大事にすべきだと思います。明治以来、日本の世界とのつながりは、欧米中心であって、近代化をヨーロッパと戦後のアメリカから学んだわけです。その結果、現在アメリカに次ぐ経済大国になったわけですが、改めて今の日本を考えると、TJFは当面環太平洋諸国を主な事業の相手とするのがいいと思います。つまり、対象国は隣り近所、出し物は無形の言語と、この2つを今後も主目標にするのがいいと思います。

鈴木孝夫

慶應義塾大学名誉教授

「沙汰は追って」

古い話で恐縮ですが、昔NHK大河ドラマに「春日局」というのがありました。大原麗子扮する春日局が、幼君の乳母役候補を面接する場面で、敵派閥の送りこんできた候補者に、一言「沙汰は追って」と言います。それを伝え聞いた敵派閥が怒り狂う。「沙汰は追って」というのは、「不合格」と同義なのでした。

「沙汰は追って」を直訳すると、「The decision will be announced later.」となるでしょうか。ところが意味は「You failed in the exam.」なのです。何の思想内容も含まない文章が、実は重大な意味を持っている。「フム、日米貿易摩擦の原点はこれだな」と、テレビの前で一人合点したものでした。

フォーラムの日本語教育普及活動も、単に表現としての言葉を教えるばかりでなく、その奥にある文化的文脈、慣習や国民性によって培われてきたものの考え方まで、深く掘り下げていって欲しいと願うものです。

田代忠之

……株式会社講談社勤務取締役

より深い相互理解を

私どもは出版物の貿易に携わっておりますが、現在台湾・韓国を初めとするアジア地域全域において現地人による日本出版物購入の顕著な増加が見られます。人気の中心は、ファッション雑誌、アニメ、アイドル写真集などで、これらの分野で現在日本は世界(特にアジア)の若者を強く惹き付けるものを生みだしています。一方でアジアの音楽、映画、アイドルが日本で自然に受け入れられるようになってきました。

相手の文化に魅力を感じることは、相手を知りたいという欲求の原点だと思います。現在確実に広がっているポップ・カルチャーの相互浸透と、フォーラムの事業活動が結びつき、やがては互いの言語を通じてのより深い相互理解へと進む人々が増えていくと確信しております。

田中海南

……株式会社トーバン取締役海外営業部長

将来に向けての三つの提言

このユニークな財団が、内外の第二言語教育に焦点を絞っておられるところは、まことに貴重だと思います。英語教育などの特定業界の代表ではなく、広い視野に立ち、常に根本を考えようとしておられるところが好ましい。

将来に向けて、三つの提言をしたいと思います。まず、日本人の言語コミュニケーションに対する姿勢について考えたい。自分の意見を説得力をもって表現することが、日本人はあまり上手でないようです。なぜなのか。どう対処すべきか。つぎに、枠を越えるかもしれませんが、日本の初等・中等教育における外国理解はどうなっているのか。このことに関心を向けたい。知識は意外に広いかもしれませんが、足

りない面もありそうです。何が不足しているのか。たとえばヨーロッパの帝国主義のエジキにならなかったところはアジア・アフリカ・アメリカ・オセアニア大陸でどこなのか、とか、ほとんどの国が多民族・多文化国家であるのに対して、日本はどんな地位にあるのか、とか。最後に情報の電子化は人間のコミュニケーションにどのような影響を与えるのか。第二言語教育にどのような影響を与えるのか。そんなことにも踏み込んで考えていただきたいと思います。

徳川宗賢

……学習院大学教授

もっとも大切なのは文化

少し以前になりますが、「文化面からみた地域主義」という題で陛下にご進講申し上げる機会がありました。陛下の方がよほどよく勉強され、私は何も申し上げることはありませんでしたが、その準備のため資料を集めてみましたところ、「文化」の持つ言葉の意義の深さに改めて心打たれました。

ご承知の通り、文化のカルチャー、また、文明のシビライゼーション、ともにラテン語に基づいており、文化が発展した結果が文明といわれておりますが、もっとも大切なのは文化であります。人間が生きるために必要な農耕あるいは精神的な面を癒す宗教、さらには民族間のつながりはいずれも文化で、そこに齟齬をきたすと地域紛争等の厄介な問題が発生します。私ども日本人は永年の単一民族に馴れ、異文化との接触が少なかったのですが、これからはそうは参りません。その意味で、国際文化フォーラムは一層重要な役割を果たすことが期待されます。

心よりご健闘をお祈り申し上げます。

奈良久彌

……株式会社三善総合研究所取締役会長

少数民族の文化にも注目を

この夏、私はアラスカからそう遠くない、カナダのブリティッシュコロンビア州ハートレイ・ベイという人里はなれた村に滞在していた。人口たった150人というシムシャン族の村である。小さなコミュニティであったが、そこに住む村人たちの実直さ、自分たち

の固有の文化、言語、慣習に対する敬意、年長者を敬う気持ちに私は深い感銘を受けた。村人たちは英語とシムシャン語を話し、村の小さな学校では、教師、子どもたち、年長者が協力して村に伝わる物語や伝統的な食生活などをまとめたすばらしい冊子を制作していた。コンピュータを使い、インターネットにもアクセスしていた。

私は、フォーラムが、北アメリカの活気ある少数民族の文化にも注目するよう強く望んでいる。彼らは道徳的、思想的に世界のリーダーとして、自然ないし超自然界に回帰する術を日本のような工業国に教えてくれると思う。彼らのいとなみにフォーラムはもっと関心を寄せてほしい。また、忘れられた古代アジア民族イヌイトの地として再生したカナダ北部の「新生」地NUNAVUTにも注目してほしいのである。

多数派の意見を正しいとし、貴重な少数の価値観を黙殺するアングロサクソン文化の欠点を、一般的にアジア、とりわけ日本では模倣してきた。これら少数派の人びとのなかにこそ見いだされる人類の文化や言語、宗教の源に触れるためにも、工業化の波を受けていない彼らの文化に関心を示し、着目してほしいのである。私たちは多くのことを学べるはずである。

C.W.ニコル

……作家

理想を高く掲げ 誇りを持って前進を

日常的に外国人(主として英米人)スタッフと接する職場にいますが、彼らの日本語違者をよいことに、微妙なニュアンスが重要な価値を持つ編集会議ですら、一方的に日本語で通していました。

ある時、どう考えても英語の方がリーズナブルな会議があり、やむを得ず英語で参加したことがあります。結果として、外国人のスタッフから、予想もしなかった大きなプラスの反応があり、相手の言葉でのコミュニケーションが、時によってはどれだけ親近感を増し、より充実した検討を可能にするかを実体験として感じとりました。

フォーラムの日本語普及活動は、このケースとは直接的には無関係ですが、決して単なる表面的言語習得にとどまらず、奥行の深いバックグラウンドまでつながっていくものと確信しています。

今後とも、理想を高く掲げ、誇りを持って前進されることを期待しています。

平賀純男

……株式会社インターナショナル株式会社取締役副社長

見直したい アジア共通の深遠な哲学

世界のボーダレス化が進んでいる今、国際文化フォーラムのアジア・太平洋地域の若い世代を対象に「言葉と文化」を核にした事業展開は、ますます重要な役割を担ってきます。

荘子の「人間は自然の一部であり、自然に帰する存在である」という自然観、また、バリ島で学んだ「よい人と悪い人は対立概念ではなく、共存するもの」ととらえるヒンズーの教えなどは、アジア共通の深遠な哲学ではないでしょうか。

思想も社会も混迷期を迎えている現在、荘子の説く「おおらかな宇宙観」が見直されてもいいのではないかと思います。

この考えを次世代に伝えていくためにも、アジア諸国間の交流が活発にならなければなりません。そのきっかけとしての「言葉と文化」の交流の意味するところは非常に大きいと思います。今後の事業活動に大いに期待しています。

福原義春

……株式会社青土堂取締役会長

21世紀への国際文化フォーラム

一国の文化を内面から理解するには、その国の言語を理解することがたいへん重要なことであります。日本の文化に関心をもちたいへん重要なのは、やはり積極的に日本語に親しんでもらう必要があります。また、グローバル化が進む今日、特にアジアとの交流が深まるこれからは、相互の文化に対する一層の理解が必要で、言語(言葉)教育の重要性は増す一方です。ところが、経済活動のために言葉を習う人は多いと思われませんが、文化活動のためにそうする人は必ずしも多くない気がいたします。その意味で、「言葉と文化」をキーワードにこの10年活動してきた国際文化フォーラムの意義は大きなものがあります。

21世紀を担う世代が異文化を理解し、自国の文化を相手に伝える力と心を持つために、フォーラムが

今後も大いに貢献されんことを期待いたします。

藤田弘道

……△東海商事株式会社代表取締役社長

「ヒト」の自由化

市場の自由化は、我が国でも比較的問題の少ない「モノ」から始まり、今では「カネ」の自由化もビッグバンという形で本格化されようとしております。21世紀に向けて残る課題は、「ヒト」の自由化です。この課題は、高齢化社会に向けて、単に労働力が不足するから必要だというのではなく、日本の単一民族社会からくる閉鎖性の打破を通して、真に国際化を果たせるかどうかという点でとても重要な問題です。欧米人のみならず、アジアの人も含めて、世界の人々に等しく活躍の場を与えていくことは、日本が世界の国々とともに発展していくためには、どうしても必要なことではないでしょうか。

このような中で、国際文化フォーラムが推進している青年を対象とした相互理解教育の支援プログラムは、たいへん意義深いものです。今後も、言語教育を通して草の根の交流が推進されていくことを願って止みません。

鮑啓東

……株式会社オリファ代表取締役社長

アジア地域で さらなる文化交流を

国際社会が新たな秩序の構築に向けて構造変化を遂げるなかで、ボーダレスな経済交流が現実のものとなってきております。人と人、文化の交流も、2国間交流から多国間にわたる相互依存・発展の形態をたどり、文化交流の重要性は確実に増しています。今後、経済興隆著しいアジア・太平洋地域において相互の言語を学習し、文化理解を深めていくことは極めて有意義なことであります。今後の財団に寄せる内外の期待は熱く、その役割も大きいと確信しています。

全日本空輸も、中国においては大連、青島路線をいち早く開設し、現在5都市9路線に就航、アジア各地域もミャンマー、ムンバイなどに就航。そのネットワークを広げることを通じ、同地域の経済・文化交流の発展にさらに貢献したいと考えています。

アジア・中国との友好関係、相互理解を訴えた弊社2代目社長岡崎嘉平太の遺志は、1990年に設立された岡崎嘉平太奨学財団の奨学活動によって受け継がれ、アジア6カ国から、すでに36名の方々が来日しました。今年4月には中国路線就航10周年を記念して、中国の「希望工程」プロジェクトに将来を担う少年・少女育成のための小学校建設資金として、30万円を寄贈しました。

弊社の文化交流活動はまだ始まったばかりであり、国際文化フォーラムの積極的、献身的な活動に少しでも貢献できるよう微力ながら努める所存です。

益本巽

……全日本空輸株式会社前常務取締役

よくやってくださった

国際文化フォーラムは、創設以来さまざまな形で国際文化交流をすすめる仕事に貢献してきた。特に中国や米国の中等教育段階の日本語教育の世界で、苦しみ悩んでいる関係者を支援し続けてきた功績は大きい。もちろん中国や米国の中等教育の世界に限られてはいない。多方面にわたって日本語教育界を中心とした活動を続けてきたが、注目すべきは、その多くが、政府レベルでは解決しにくい問題を縁の下の力持ち的な姿勢で応援してきたことであろう。

いつかは国際文化交流という課題が、国民一人ひとりが責任を負い実践するものとならねば、日本が国際社会に生き残っていく姿勢が整ったことにはならないだろうが、そこに至る開拓期の重要な任務を、つらいには違いないが、フォーラムが堪い続けてくれることを心から願うものである。

水谷修

……国立国語研究所初任

10年の実績の上に さらなる発展を

発足当初、賢明に事業を選び、着実な活動を始めましたが、十年の間にその項目を拡充し、多彩な活動を展開するに至りました。限られた資金でこのような発展を遂げられたことは、新しい公益法人として類い稀な例です。会長、理事長、歴代常務理事はじめ

事務局スタッフのご努力に敬意と祝意を表します。

理事会、評議員会では、その都度ご出席の方々の英知に満ちたお言葉を拝聴し、啓発されるどころが多く、有難いと思っております。優れた組織である国際文化フォーラムが十年の実績の上にさらに充実発展を遂げられるよう期待します。

三角哲生

……財団法人ユネスコ・アジア文化センター理事

隣国と日本の架け橋に

この10年、異文化間の相互理解を促進していくために、文化を形成している基本的要素である言語を核に据え、国際文化交流事業を推進してこられた努力に対して敬意を表します。

特に日本を知ってもらうために、世界的にマイナーな言語である日本語とはどんな言語であるかを知ってもらうこと、欧米語よりもむしろ隣国であるアジアを理解するために、アジアの言語に力を入れてこられたこと、さらに言語の理解から文化の理解へと発展し、ひいては日本に欠けていた身近なアジアの理解を目的とした言語と文化にかかわる事業を継続・展開されてきたことは、大きな評価とともに国際文化フォーラムの基盤ともいえることであると思います。

これからも、この基本理念をさらに推進され、真にアジアと日本の架け橋になられんことを期待してやみません。

宮下武四郎

……日本製紙株式会社代表取締役会長

国際的な場で 仕事のできる人の資格要件

グローバル化が進展する中で、わが国も、国際的な場で仕事のできる人の層を厚くしていかなければならないと思われます。そのような人の資格要件は何かという、第一に異文化への適応性、すなわち異なった文化に自らを適応させる能力、第二に外国語の能力、とりわけ国際語となっている英語を使いこなせる力でありましょう。

国際文化フォーラムは、「言語と文化」をキーワードに、国内外の若い人々への言語教育の支援事業と、世界の様々な文化間の相互理解と国際理解を促

進する事業に取り組んでこられました。まさに社会のニーズに沿ったものであるといえましょう。

今後21世紀に向けて、グローバル化が進む中で、その役割は一層大きなものになると考えられます。ますますのご発展を期待するものであります。

茂木友三郎

……ネッコーマン株式会社代表取締役社長

「言葉」の重要性

この十年の間に活動の幅を拡げ、内容を充実させて盛況裡に節目を迎えられたことは、会長・理事長をはじめ、スタッフの皆様の並々ならぬご努力の成果と、心より敬意を表するものであります。

さて最近、とみに「日本は世界の中で孤立している」とか、「誤解されている」といったぐい論調が内外識者によって指摘されています。このような事態は、過去の歴史の影響や経済摩擦、あるいは文化の相違その他の複雑な問題がからみ合った結果だろうと思いますが、基礎となる要素に「言葉」の問題があることは確かだと思います。お互いに相手の言葉が話せない、読めない、書けない、では相互理解を図ることは全く不可能なことは言うまでもないことでしょう。

その点で、国際文化フォーラムの活動のベースが「外国語教育と文化理解」というテーマであることは、まことに核心を衝いたもので、その重要性はいくら強調しても強調し足りないところでしょう。当社もこの価値ある活動の財政面の一翼を担わせていただき、また当社の大國社長が理事に、私が評議員に参加させていただいていることはまことに光栄に存じます。

今後国際文化フォーラムの活動がますます活発となり、日本と各国の異文化相互理解の促進に一層貢献されることを心から祈念するものです。

森健

……王子製紙株式会社専務取締役

3:

言語教育と文化理解プログラムを考える

10周年記念座談会より

司会者

鈴木孝夫

慶応義塾大学名誉教授

江淵一公

放送大学教授

本名信行

青山学院大学教授

渡辺吉銘

慶応義塾大学教授

参加者

中野佳代子

国際文化フォーラム事業部長



国際文化フォーラムの事業および事業の前提になっている考え方について、4名の方からご意見やご助言をいただきました。今後、事業のプログラミングをする上で大変参考になるいくつかのコメントの要旨を以下にまとめました。座談会の詳細については、『国際文化フォーラム通信』第35号をご参照ください。

現在TJFが言語教育を通じた文化の相互理解の促進という目標を掲げて、アジア・太平洋地域を対象とした小・中・高校生への日本語教育と、国内の高校生へのアジア言語教育をサポートしている点について

●鈴木: 徹底して言葉という無形文化財、そしてことばの背後にある無形の文化を中心として、日本と外国の相互理解を深めるという自己規定を再確認した方がいいと思います。相手の言語に込められている、自分の言語では見えない部分を理解することが、国際交流で大事になってくるのです。事業の対象国としては、日本は自分の隣り、そして周りの環太平洋っていうものを大事にすべきだと思います。

●江淵: 言葉というものに焦点をあてて、常にその枠を持ちつつ文化を理解していく姿勢を堅持して欲しい。近隣の理解なしに世界の理解もない。日本に欠けていた身近なアジア理解を深めるためにアジアの言語を学ぶ事業に力を入れることは非常に大事です。

日本語や英語をとおして日本語を語る必要性について

—日本語教育・日本文化紹介事業

●本名: 外国語教育・学習の基本的な目標は交流、すなわちコミュニケーションです。交流というのは、相手から学ぶと同時に、自分のことを伝えたいという意図があるわけで、外国語学習の目標として、相手の文化を理解することに加えて、あるいはそれ以上に、自分の文化を外国語で説明するということがあります。そこが、アジアの英語の中に一番含まれてくる所です。英語を国際共通語として考えるならば英語と英米文化を同一視できなくなるわけで、英語は英米文化を模倣する手段ではなく、世界の人々と交流し、相手の意見を聞き、自分の考えを表現する道具となるわけですから、自分の文化を背景として英語を使うのがあたりまえだと思います。

●鈴木: 日本人は英語を使ってもっと世界に語りかける必要があります。そしてもう一つの方法は日本語で語ることですが、日本語を国際化するのは簡単ではない。やはり英語と日本語の両方を考えていかなければいけない。日本語は、つい最近までは世界中の人から無視されてきましたが、もっと日本語が世界で学習される外国語の一つとして日本の立場に見合うように位置づけられるべきだと思います。日本語には翻訳では伝わらないものがあるし、日本には世界に誇るべき無形の文化や人間の生き方で、世界に貢献できるものはたくさんあります。

日本人がアジアの言語を学び、その背景にある文化を理解することについて

—アジア言語教育支援事業

●渡辺: 隣り合っているのだから、コミュニケーションの道具としてお互いに相手のことばを学ぶというのが自然体で一番望ましい形だと思います。

渡辺吉穂
慶応義塾大学准教授



す。お互いの信頼を築くための言語教育だから、ことばの学習が始まりでゆくゆく相手の文化が分かればそれに越したことはありませんが、最初から文化の相互理解を促進させるという建前はあまり言いたくない。あくまでも中心は個々の人間だと思います。

文化理解を進めるのに「ある若者の一日」という日常生活から入っていき、相違性と同時に共通性にも焦点をあてる文化理解プログラムの方法について

●江淵: エキゾチシズムから入っていった従来の文化理解の方法論は根本的に間違っていたのではないのでしょうか。共通化が進んだ現代においては特に、共通点から入っていつてまず意外に似ていることを知る、しかし注意深くみていくと違う面にも気づく、その理由を探ることで背後にある隠れていた部分が見えてくるということが大事です。その独自の部分がこれから外国の人と働く時に思わぬ文化的差異として出てくることがあります。

●渡辺: これからの時代には何か共通項を満たすような教材が必要だと思う。世界の標準化の流れの影響で、今の若い人は一つの文化の言語ではなくて、標準化のなかのアートとか共通項としての言語を探していると思います。

●江淵: 人類の文化には多様な文化がありますが、自分の文化だと思っているもののなかにも、実は外来のものがたくさんあります。人類は歴史的にみると文化はむしろシェアしている面の方が多い。文化理解の学習はそこを出発点にした方がいいと思います。共通の題材や話題から始めてカルチャーの学習に引きずり込むというやり方です。

日本の社会が多文化社会に向かって開国を迫られているなかで、若い人たちは外国語を習得しながら、異文化に対する調整能力も身につけてもらわなければなりません。われわれの文化理解プログラムの最終目標として、「理解」のどのレベルに照準を合わせるべきかについて

●江淵: スパイロというアメリカの人類学者が、異文化を学ぶときには、五つのレベルがあると分析しています。最初は知るレベル (learn about)、二番目がどうしてそんなことをするのかかわかったというレベル (understanding)、三番目は、なるほどそうか、それは正しいと信じるレベル (believe)、そして四番目が自分自身にもやれる、行動できるというレベル (behave)。その三番目と四番目は逆のこともあるんじゃないかというような気もしますが、最後にそういうことが完全に内面化されたレベル (internalization) があります。人類学者が文化を理解すると言う時、あるいは普通の文化学習ではせいぜい understanding のレベルまでしか期待しない。しかし、知っただけでは誤解するかもしれないので、どうしてそんなことするのだろうと考えて、自分でもやってみる、という辺り



鈴木孝夫

慶応義塾大学准教授

江淵一公
放送大学教授



のステップを考えながらプログラムを作るといいと思います。

●本名:今の日本のような状況においては、ゴールとしてバイカルチャーとか、マルチカルチャーとかというものを立てると、そのプログラムを評価する時に必ず失敗すると思います。むしろ他の文化への興味を持つ資質を増やす、あるいは理解への意欲を持つ資質を増やすといった、現実的なところをめざしてプログラムを運営したほうがいいと思います。

●江淵:文化交流では、目標としてはむしろ異文化理解とか、多文化理解とか、ほかの文化についての理解を深める努力をするといった程度のことではないと大変だろうと思います。

今の若い人たちが、将来世界の人々と交流したり、一緒に仕事をしたりする時にうまくやっていけるように、少しでも私たちのしていることが役立てばいいと思いますが、最後はそれぞれの人間性にかかっているような気もしています。逆に外国語教育や文化理解教育が、少しでも若い人たちの人格的資質を伸ばすことになればいいとも思っています。これからの日本の若い人たちにどんな資質を期待するかについて

●鈴木:国際交流の場で外国人が必ず日本人に求めてくるのは、日本人のあなたは何をどう考え、どういう暮らしをしているかです。それに答えられるように、日本人は自分の国のこと歴史や風土を含めた日本のことをよく知っていることが重要です。何でもよいが自分の好きなこと、考えていることを言えるように準備しておくことです。

●江淵:文化の理解とは、つまるところ、人間理解であると考えます。文化は一人ひとりの人間を通じて具体的にその姿を現すのですから、文化理解と人間理解を切り離して考えるわけにはいきません。それを切り離す時偏見が生まれます。異文化を持つ人に理解してもらうには、外国語やコミュニケーション技術も大切ですが、それ以上に一人の人間としての魅力をどう醸成するかが大切だと思います。個性的で魅力があること、ひたむきで信頼できる人づくりです。結局決め手となるのは、人間として共感を得られることではないかと思います。

●本名:これからは異文化間コミュニケーションの時代だと思います。日本人はこれから多様な民族的・文化的背景をもつ人々と出会い、ともに働き、生活する機会がますます多くなるでしょう。そういう環境に違和感なく積極的に参加できる人が増えてほしいと思います。それには自分の文化を相手に合理的に説明する能力が求められるので、言語教育や異文化間リテラシー教育はそういう資質にフォーカスをあてる必要があります。

●渡辺:もう少しポップカルチャー以外にも関心を広げること、脱日本を試みること、あまりその場の役割を演じようと思わないこと、制約を自ら作らないこと、などです。

(敬称略)



本名信行
青山学院大学教授



現代日本を
ことばと文化の
面から紹介する
図書の致々

国際文化交流情報誌
「ワールドプラザ」



特集「21世紀の世界を知る
最新情報源事典」

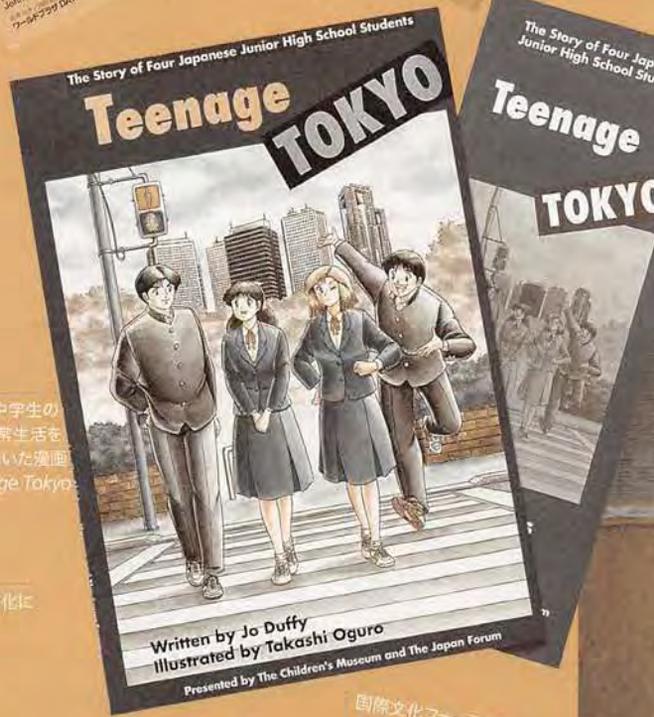


写真で現代日本を紹介する
TJFの寄贈図書

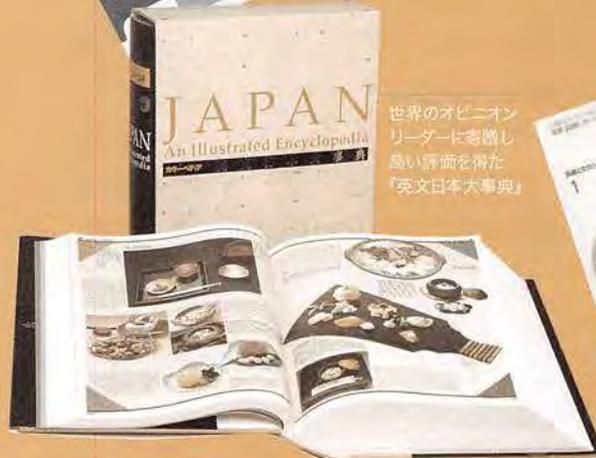


日本の中学生の
日常生活を
描いた漫画
Teenage Tokyo

ことばと文化に
関するテーマを
取り上げる
『国際文化フォーラム通信』



Written by Jo Duffy
Illustrated by Takashi Oguro
Presented by The Children's Museum and The Japan Forum



世界のオピニオン
リーダーに寄贈し
高い評価を得た
『英文日本大事典』



国際文化フォーラム事業
調査レポート
言語と文化シリーズ

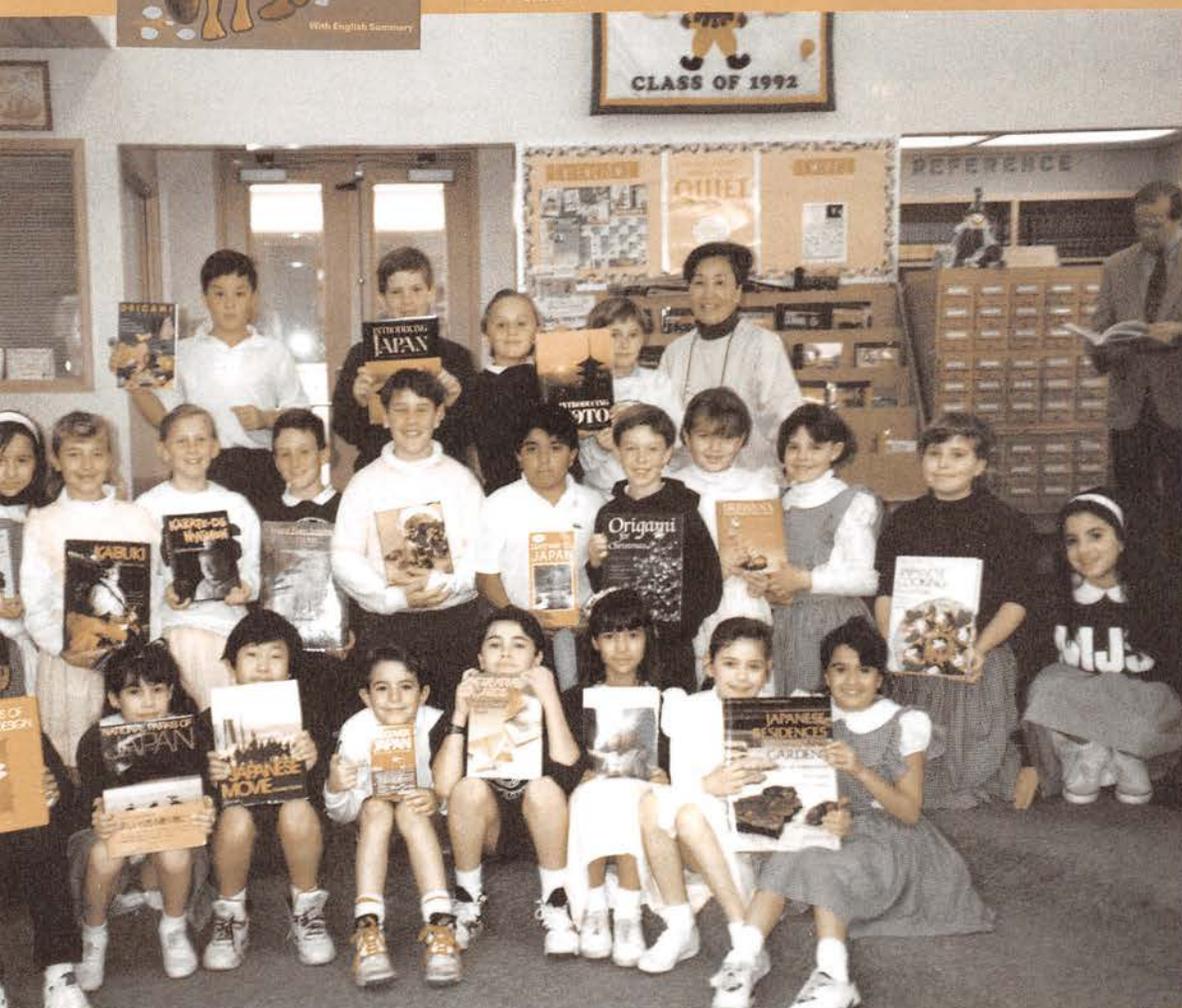
長年にわたり内なる国際化に貢献した
『ワールドプラザ』

III

資料でみる

国際文化フォーラム (TJF)10年の軌跡

TJFの寄贈図書で日本について勉強



年表

国際文化フォーラムの 10年

注：太字は主要事業

1987年度

昭和62年度



- 6月22日●財団法人国際文化フォーラム設立 [東京]
- 10月19日●セミナー「本当の国際化とは何か」 [東京]
- 12月16日●セミナー「実用日本語教育の問題点」 [東京]
- 12月●機関誌『国際文化フォーラム通信』創刊
- 88年3月14-15日●シンポジウム「諸外国での日本語教育の現状と問題点」共催 [東京]
- 3月28-30日●シンポジウム「ジャパン・プロブレムは存在するか」共催 [東京]
- 3月●『国際文化交流元年への期待 新聞報道 1985-1988』編集協力
日本語教育事情視察 [中国、米国など]
図書寄贈 18件 5,500冊

1988年度

昭和63年度



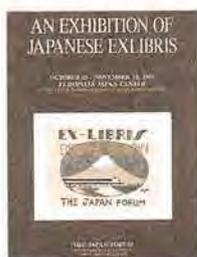
- 4月24日～5月28日●北京市青少年日本語コンテスト〔第2回〕後援 [北京]
- 7月●『国際文化社会をめざして』編集協力
- 7月～10月●実用日本語教育研究会 [東京]
- 7月～91年10月●中国放送大学日本語講座教学大綱の策定と教材制作協力 [東京]
- 9月20日●セミナー「今、国際交流を考える—異文化の豊かな交流に向けて」 [松本]
- 10月23-27日●日本現代文化芸術展「写真展・ポスター展」出展 [北京]
- 12月●国際文化交流情報誌『ワールドプラザ』創刊
- 12月/89年3月●日本語教育事情視察[インドネシア、シンガポール、タイ、米国、マレーシア]
- 89年1月18日●エレノア・H・ジョーデン講演会「日本語をどう教えるか」 [東京]
- 3月●シンポジウム報告書『海外における日本語教育の現状と将来』共同編集・発行
図書寄贈 41件 3,318冊

1989年度

平成1年度



- 4月9日～7月1日●北京市青少年日本語コンテスト〔第3回〕共催 [北京]
- 4月17-18日●シンポジウム「地域国際化と文化創造—地域おこしへの新しい視点」 [東京]
- 4月28日●高校生日本語スピーチコンテスト協力 [米国 ワシントン州]
- 7月23日～8月5日●日本語教師養成ワークショップ助成 [米国 バーモント州]
- 8月21日～9月2日●日本語教育事情視察 [オーストラリア、ニュージーランド]
- 10月20日～11月10日●ユーロバリア89ジャパン「日本の蔵書票展」「アニメーション・ビデオ・シアター」出展 [ブリュッセル]
- 11月●シンポジウム報告書『地域国際化と文化創造 地域おこしへの新しい視点』編



集・発行

- 12月20-22日 ● 全中国大学生日本語弁論大会〔第1回〕後援〔北京〕
 89年～95年 ● パソコンによる外国人のための日本語教育支援システム(CASTEL/J)データベース作成協力〔東京〕
 90年1月 ● 『日本語教育通信』創刊号 編集協力(～第27号・97年2月)
 3月 ● 『日本語教育——その成長と悩み 海外日本語教育機関の動向・1988年』編集・発行
 88年～91年 ● 中国放送大学日本語講座教学大綱の策定と教材制作協力〔東京、北京〕
 ボストン日本人補習校日本語図書寄贈〔ボストン〕
 図書寄贈 55件 3,358冊

1990年度

平成2年度



- 4月20日 ● 高校生日本語スピーチコンテスト〔第7回〕後援〔シアトル〕
 5月13日～6月9日 ● 北京市青少年日本語コンテスト〔第4回〕共催〔北京〕
 5月 ● 『日本とはなにか 近代日本文明の形成と発展』発行
 5月 ● 中国放送大学日本語講座教科書『日本語基礎』(第1分冊)編集出版協力〔北京〕
 6月9-10日 ● 国際交流担い手シンポジウム後援〔宇都宮〕
 6月15-17日 ● 日本語教育シンポジウム「日本語と日本語教授法」後援〔米国 ハーモント州〕
 6月 ● 『国際文化交流名言集』編集・発行
 8月12-18日 ● 高校生日本語サマーキャンプ〔第1回〕後援〔米国 ワシントン州〕
 8月30日～9月5日 ● 「日中書籍装幀芸術展」共催〔北京〕
 8月～91年6月 ● 教師助手派遣事業(JALCAP)〔第2回〕協力〔米国 ウィスコンシン州〕
 10月25-26日 ● シンポジウム「21世紀に向かう日本」後援〔北京〕
 10月 ● 中国放送大学日本語講座教科書『日本語基礎』(第2分冊)編集出版協力〔北京〕
 12月18-19日 ● 全中国大学生日本語弁論大会〔第2回〕共催〔北京〕
 90年 ● 『全中国大学生日本語弁論大会〔第1回〕弁論集』出版助成〔北京〕
 90年 ● 高校生用教科書*Hello in Japanese* (こんにちは日本語)第1巻(テープ付き)編集協力〔米国 ワシントン州〕
 91年2月1-3日 ● エリー湖南部日本語教師協会ワークショップ助成〔ピッツバーグ〕
 3月19-20日 ● 日韓学術文化セミナー共催〔韓国 蔚山〕
 3月23日 ● ワシントン・リー大学主催日本語教師ワークショップ助成〔レキシントン〕
 89年～95年 ● CASTEL/J データベース作成協力〔東京〕
 日本語教育事情視察〔韓国、タイ、中国、米国〕
 図書寄贈 85件 10,076冊

1991年度

平成3年度



- 4月7日～5月22日 ● 北京市青少年日本語コンテスト〔第5回〕共催〔北京〕
 4月10日～5月6日 ● ヒューストン・インターナショナル・フェスティバル「日本の漫画展」
 出版〔ヒューストン〕
 4月19-20日 ● ワークショップ「Hello in Japanese」後援〔米国 ワシントン州〕
 4月 ● シンポジウム報告書「21世紀に向かう日本——北京国際学術討論会記録」出版助成〔北京〕
 5月4-10日 ● 日本事情紹介写真展「日本の若い世代」出版〔北京〕
 5月 ● 中国放送大学日本語講座教科書『日本語基礎』(科学技術編)編集出版協力〔北京〕



- 5月●中国放送大学日本語講座教科書『日本語基礎』(観光編)編集出版協力 [北京]
- 6月～92年6月●JALCAP [第3回] 後援 [米国 ウィスコンシン州]
- 8月11-24日●高校生日本語サマーキャンプ(第2回) 後援 [米国 ワシントン州]
- 8月17-18日●ニューイングランド地域日本語教授法研修会(第5回) 助成 [米国 メイン州]
- 9月16日～92年1月5日●ジャパン・フェスティバルUK1991「Visions of Japan展」協力 [ロンドン]
- 10月15-17日●全中国大学生日本語弁論大会[第3回] 共催 [北京]
- 10月25-26日●米国南部地区日本語教授法研究会(第1回) 助成 [米国 ノースカロライナ州]
- 10月●中国放送大学日本語講座教科書『日本語基礎』(外国貿易編)編集出版協力 [北京]
- 11月18-24日●長春外国語学校日本語まつり後援 [長春]
- 91年●Hello in Japanese (こんにちは日本語)第2巻(テープ付き)編集協力 [米国 ワシントン州]
- 91年●『全中国大学生日本語弁論大会[第2回] 弁論集』出版助成 [北京]
- 91年●大学レベル日本語教師用 *A Practical Guide for Teachers of Elementary Japanese* (改訂版)制作助成 [米国 ミシガン州]
- 92年1月14-15日●日本・タイ学術文化シンポジウム共催 [バンコク]
- 1月●*Teenage Tokyo* 共同発行
- 89年～95年●CASTEL/J データベース作成協力 [東京]
- 日本語教育事情視察 [オーストラリア、中国、ドイツ、米国]
- 異文化間教育学会紀要出版助成
- ハワイ大学カピオラニ・コミュニティカレッジ図書寄贈
- 図書寄贈 102件 9,605冊

1992年度

平成4年度



- 3月20日～5月16日●北京市青少年日本語コンテスト [第6回] 共催 [北京]
- 4月12日～●ボストン子ども博物館「ティーン・トーキョー展」出展 [ボストン]
- 5月14-15日●異文化間教育学会全国大会 [第13回] 助成 [筑波]
- 6月17-19日●全中国大学生日本語弁論大会 [第4回] 共催 [北京]
- 7月19-22日●全中国外国語学校中高生日本語弁論大会 [第1回] 共催 [長春]
- 7月25-26日●日本語教育学会日本語教育集中研修会後援
- 7月～95年12月●日本語教育カリキュラムガイド *Japanese for Communication: A Teacher's Guide* 制作助成 [米国 ウィスコンシン州]
- 8月9-22日●高校生日本語サマーキャンプ [第3回] 後援 [米国 ワシントン州]
- 8月22-23日●CASTEL/J 研究発表会「日本語教育とコンピュータ」後援 [石川]
- 8月22-23日●ニューイングランド地域日本語教授法研修会 [第6回] 助成 [米国 バーモント州]
- 8月25日～9月4日●「日本のマンガ展」共催 [シドニー]、9月14-25日●[メルボルン]、10月10-20日●[パース]
- 8月～93年6月●JALCAP [第4回] 後援 [米国 ウィスコンシン州]
- 9月●『入門国際交流』編集協力
- 10月1日●ハーバート・J・グローバー講演会「私の提唱する教育改革」 [東京]
- 10月6日●吉林省大学生日本語弁論大会 [第2回] 助成 [長春]
- 10月23-24日●日本語イマージョンスクール教師シンポジウム助成 [米国 オレゴン州]
- 10月～93年6月●極東ロシア地域日本語教師助手派遣事業 (JALFER) [ウラジオストク、ユジノ・サハリンスク]
- 92年●『全中国大学生日本語弁論大会 [第3回] 弁論集』出版助成 [北京]
- 92年●『全中国大学生日本語弁論大会 [第4回] 弁論集』出版助成 [北京]
- 93年2月23日～3月4日●米国ウィスコンシン州教育関係者訪日プログラム (STAR)

[日本各地]

89年～95年 ● CASTEL/J データベース作成協力 [東京]

異文化間教育学会紀要刊行助成

ヨーロッパ翻訳者会館特別図書寄贈〔第1期〕 [ドイツ シュトゥラーレン]

図書寄贈 155件 9,506冊

1993年度

平成5年度



4月9-10日 ● エリー湖日本語教師会大会〔第5回〕助成 [米国 ミシガン州]

4月11日～5月22日 ● 北京市青少年日本語コンテスト〔第7回〕共催 [北京]

5月15-16日 ● 日本語教育ワークショップ〔第3回〕助成 [米国 バージニア州]

5月22-23日 ● 異文化間教育学会全国大会〔第14回〕助成 [大阪]

5月26日～6月15日 ● 「文化のぎずな——日本の童話とイラストレーションの祭典」共催 [カナダ バンクーバー]

5月29-30日、8月4-6日、10月2-3日 ● 日本語教育学会大会・研修会助成 [東京、兵庫]

5月～10月 ● 日本におけるアジア言語(中国、韓国、タイ、インドネシア)の普及実態調査委託 [日本各地]

6月29日～7月25日 ● 米国西部中高校日本語教師夏期訪日研修助成 [東京ほか]

7月10日 ● 初等中等教育日本語副教材ワークショップ [オーストラリア ニューキャッスル]

7月12日 ● 日本語教師研修会「ひらがな教授法」共催 [シドニー]

7月21日～8月28日 ● マイケル・ライマー「Run for Understanding」プロジェクト助成・協力 [日本各地]

7月 ● *Data Book on Japanese Local Grassroots Organizations in International Cultural Exchange* 編集・発行

8月 ● 『全中国外国語学校中高校生日本語弁論大会〔第1回〕弁論集』出版助成 [長春]

8月 ● 『入門国際交流』(改訂版)編集協力

9月～95年 ● 「日本語の習得と文化理解」研究委託

10月15-19日 ● 全中国外国語学校中高校生日本語弁論大会・日本語教師研修会〔第2回〕共催 [武漢]

10月 ● 日独学術文化交流コロキウム助成 [ドイツ]

10月 ● 機関誌(英文版) *The Japan Forum Newsletter* 創刊

12月～94年3月 ● 日本の高校における中国語教育の実態調査実施

94年3月25-26日 ● 全米日本語教師会(ATJ)北東部中等教育部会助成 [ボストン]

3月 ● 日本・タイ学術文化シンポジウム報告書 *Culture and Japanese Language Teaching in the Twenty-first Century* 出版助成

3月 ● 日本語教師研修会「ひらがな教授法」ビデオ *Teaching Hiragana in 48 minutes* 共同企画・発行

89年～95年 ● CASTEL/J データベース作成協力 [東京]

92年～95年 ● *Japanese for Communication: A Teacher's Guide* 制作助成 [米国 ウィスコンシン州]

日本語教育事情調査[オーストラリア、極東ロシア、中国、米国]

異文化間教育学会紀要刊行助成

ヨーロッパ翻訳者会館特別図書寄贈〔第2期〕 [ドイツ シュトゥラーレン]

What Is Japan? 特別図書寄贈プログラム(試行)

図書寄贈 160件 9,688冊



1994年度

平成6年度

4月10日～5月28日 ● 北京市青少年日本語コンテスト〔第8回〕共催 [北京]

4月15-16日 ● エリー湖日本語教師会〔第6回〕助成 [米国インディアナ州]

5月28-29日 ● 異文化間教育学会全国大会〔第15回〕助成 [東京]



- 5月28日～6月4日 ● アメリカ・ジャパンウィーク「日本関連図書・日本語教材展」出展 [ミネアポリス]
 5月28-29日、8月4-6日、10月8-9日 ● 日本語教育学会大会・研修会助成
 5月～95年2月 ● 日本の高校における中国語教育の実態調査
 6月 ● 大学生用中級教科書 *An Integrated Approach to Intermediate Japanese* (中級の日本語) 制作助成 [米国 ウィスコンシン州]
 7月30日 ● 中国語教育研究会(第11回)助成 [東京]
 10月3-7日 ● 全中国外国語学校中高生日本語弁論大会・教師研修会(第3回)共催 [南京]
 10月12-20日 ● 日米教育長交流プログラム(STAR for CSSO)共催 [日本各地]
 10月13日 ● ゴードン・アンバック講演会「Goals 2000: 米国における初等中等教育改革」 [東京]
 10月18日 ● シンポジウム「日米の初等中等教育における国際理解教育の現状と課題」 [東京]
 11月18-20日 ● 全米中等教育日本語教師会の全米外国語教師協議会(ACTFL)大会への参加に協力 [アトランタ]
 11月18日 ● 在日外国人生活情報誌編集長シンポジウム後援 [東京]
 11月 ● 『在日外国人生活情報誌ダイレクター'94』編集協力
 95年1月21日 ● 中国語教育研究会(第12回)助成 [東京]
 89年～95年 ● CASTEL/J データベース作成協力 [東京]
 92年～95年 ● *Japanese for Communication: A Teacher's Guide* 制作助成 [米国 ウィスコンシン州]
 93年～95年 ● 「日本語の習得と文化理解」研究委託
 異文化間教育学会紀要刊行助成
 What Is Japan? 特別図書寄贈プログラム(第1回)
 図書寄贈 1,197件 10,938冊

1995年度

平成7年度



- 4月4日 ● 近畿地区高等学校中国語教育研究会[第5回]助成 [大阪]
 4月9日～5月27日 ● 北京市青少年日本語コンテスト[第9回] [北京]
 4月 ● ATJ 年次大会中等教育部会助成 [ワシントンDC]
 4月 ● *A Day with Kentaro* (けんたろうくんの一日) (写真パネル) 企画・制作
 4月～12月 ● 文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト[第1回] [米国、オーストラリアほか]
 5月 ● 国際文化フォーラム 事務所を千代田区麹町より新宿区西新宿に移転
 5月27-28日、8月4-5日、10月7-8日 ● 日本語教育学会大会・研修会助成 [東京、福岡]
 5月30日～6月3日 ● アメリカ・ジャパンウィーク「日本関連図書展」出展 [米国 ニューメキシコ州]
 6月3-4日 ● 異文化間教育学会全国大会[第16回]助成 [福岡]
 6月24-25日 ● 全国高等学校中国語教育研究会助成 [名古屋]
 6月 ● 日本語教師会研修会助成 [米国 イリノイ州]
 7月15日 ● 中国語教育研究会[第13回]助成 [東京]
 8月21-23日、12月15-16日、96年2月24-25日 ● 高校中国語教育ガイドライン研究会助成 [熱海ほか]
 8月 ● 『日米の初等中等教育における国際理解教育の現状と課題』(事業・調査レポート)編集・発行
 10月9-13日 ● 全中国外国語学校中高生日本語弁論大会・教師研修会(第4回)共催 [上海]
 11月 ● *International/Global Education in Primary and Secondary Education* (事業・調査レポート)編集・発行
 12月 ● 日本語教育カリキュラムガイド *Japanese for Communication: A Teacher's*



Guide 出版助成

- 95年 ● 『全中国外国語学校中高生日本語弁論大会(第2回) 弁論集』出版助成 [武漢]
- 95年 ● 『全中国外国語学校中高生日本語弁論大会(第3回) 弁論・作文集』出版助成 [南京]
- 95年 ● *Hello in Japanese* (こんにちは日本語) 第3巻(テープ付き) 編集協力 [米国ワシントン州]
- 96年1月14日 ● 中国語教育研究会[第14回] 助成 [東京]
- 3月 ● 帝塚山学院大学国際理解研究所助成 [奈良]
- 89年～95年 ● CASTEL/J データベース作成協力
- 93年～95年 ● 「日本語の習得と文化理解」研究委託 異文化間教育学会紀要刊行助成
- What Is Japan? 特別図書寄贈プログラム[第2回](図書の発送は96年度) 図書寄贈 136件 8,082冊

1996年度

平成8年度



- 4月11-14日 ● ATJ 年次大会中等教育研究会助成 [米国 ハワイ州]
- 4月 ● 『いま高校の中国語教育を問い直す 外国語教育が直面する課題と提言』(事業・調査レポート) 編集・発行
- 5月4-5日 ● 高校中国語教育ガイドライン研究会助成 [東京]
- 5月18日 ● 北京市青少年日本語コンテスト10周年記念式典共催 [北京]
- 5月 ● 『北京市青少年日本語コンテスト10周年記念 日本語実力試験問題集 1987年-1995年』共同出版
- 5月、8月、10月 ● 日本語教育学会大会・研修会助成
- 6月1-2日 ● 異文化間教育学会全国大会(第17回) 助成 [東京]
- 6月29-30日 ● 全国高等学校中国語教育研究会[第14回] 協力 [福井]
- 6月、10月 ● 文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト優勝者招待 [日本各地]
- 7月13日 ● 中国語教育研究会[第15回] 助成 [東京]
- 8月5-16日 ● 中国中高校日本語教師研修会(第1回) 共催 [長春]
- 10月 ● 『全中国中高生日本語弁論大会(第4回) 弁論・作文集』出版助成 [上海]
- 11月 ● 『在日外国人生活情報誌ダイレクトリ'96』編集協力
- 12月21日 ● 中国語教育研究会[第16回] 助成 [東京]
- 12月 ● *Opening the Minds and Hearts of Your Japanese-language Students to Culture* (異文化理解のための日本語の授業実例集) 編集・発行
- 97年2月～ ● 文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト[第2回]
- 3月 ● 委託研究報告書『日本語の習得と文化理解』出版助成
- 3月 ● インターネット・ホームページ開設
- アップルトン子ども博物館児童図書寄贈 [米国 ウィスコンシン州]
- 図書寄贈 1,208件 11,458冊

1997年度

平成9年度



- 4月21日 ● 日本語教育に関する全米外国語教育関係者会議参加 [ワシントンDC]
- 5月31日～6月1日 ● 異文化間教育学会全国大会[第18回] 助成 [京都]
- 5月、8月、10月 ● 日本語教育学会大会・研修会助成 [東京、広島]
- 6月28-29日 ● 全国高等学校中国語教育研究会[第15回] 協力 [東京、千葉]
- 6月 ● 中国全日制普通高級中学教科書『日本語』(第一冊) 編集協力
- 6月～ ● 日本の高校における中国語および韓国・朝鮮語教育事情の調査実施
- 7月12日 ● 中国語教育研究会[第17回] 助成 [東京]
- 7月 ● 中国東北三省中高校日本語図書寄贈 [中国各地]
- 7月20日～8月1日 ● 中国中高校日本語教師研修会(第2回) [大連]
- 7月～ ● 「日本の高校生の日常生活」写真コンテスト [日本全国]



海をわたった日本の図書

年度 主な図書寄贈先国・地域、件数、冊数

1987	18件(8カ国)、5,500冊 イタリア、インドネシア、スペイン、中国、西ドイツ、日本、パキスタン、米国
1988	41件(10カ国・地域)、3,318冊 インドネシア、英国、シンガポール、タイ、中国、西ドイツ、日本、フランス、米国、香港
1989	55件(16カ国・地域)、3,358冊 インド、英国、カナダ、スイス、タイ、チェコスロバキア、中国、デンマーク、西ドイツ、日本、ニュージーランド、ハンガリー、フランス、米国、ポーランド、香港
1990	85件(15カ国)、10,076冊 イタリア、インドネシア、英国、オーストラリア、韓国、スイス、タイ、中国、日本、ニュージーランド、フィリピン、フランス、米国、ベトナム、マレーシア
1991	102件(13カ国)、9,605冊 イタリア、英国、オーストラリア、カナダ、韓国、タイ、中国、ドイツ、日本、ハンガリー、フランス、米国、ベトナム
1992	155件(12カ国)、9,506冊 英国、エジプト、オーストラリア、中国、ドイツ、日本、ニュージーランド、フィリピン、フランス、米国、マレーシア、ロシア

特別図書寄贈

What is Japan? プログラム

国・地域	件数	冊数
インドネシア	134	190
オーストラリア	212	289
カナダ	116	148
韓国	95	134
キリバス	2	3
シンガポール	63	90
ソロモン諸島	2	3
タイ	112	163
台湾	29	43
中国	112	160
ツバル	2	107
トンガ	2	3
ナウル	2	3
西サモア	2	3
日本	38	44
ニュージーランド	79	104
バヌアツ	2	3
バプアニューギニア	2	4
フィジー	2	3
フィリピン	108	158
ブルネイ	10	15
米国	816	966
ベトナム	25	25
香港	35	50
マーシャル諸島	2	3
マレーシア	110	152
ミクロネシア連邦	2	3
27カ国・地域	2,116件	2,869冊



一般図書寄贈・特別図書寄贈

プログラム	件数	冊数
一般図書寄贈	1,041	78,772
WJプログラム	2,116	2,869
合計	3,157件	81,641冊

注：寄贈先国に日本とあるのは、日本国内の外国の機関および外国人のためのプログラムへの寄贈をさす。

一般図書寄贈

一般図書寄贈

国・地域	件数	冊数
アイルランド	1	15
イタリア	5	796
インド	2	131
インドネシア	5	308
英国	34	2,033
エジプト	3	102
オーストラリア	45	2,065
オーストリア	2	141
オランダ	23	74
カナダ	11	764
韓国	12	2,696
カンボジア	2	249
キューバ	1	60
キルギス	1	28
クロアチア	1	32
ケニア	1	10
コスタリカ	1	2
サウジアラビア	1	60
シンガポール	1	54
スイス	2	111
スウェーデン	1	50
スペイン	10	429
タイ	7	195
チェコスロバキア	1	66
中国	49	7,272
チリ	3	195
デンマーク	1	397
ドイツ	16	1,083
西サモア	1	139
日本	207	11,165
ニュージーランド	16	874
ネパール	1	65
ハンガリー	2	160
フィリピン	5	308
ブラジル	1	60
フランス	19	919
ブルガリア	1	206
米国	512	42,972
ベトナム	8	1,407
ベルギー	2	30
ポーランド	1	59
香港	3	168
マケドニア	2	37
マレーシア	2	68
ミャンマー	1	65
モンゴル	2	76
ユーゴスラビア	1	59
ルーマニア	1	61
ロシア	11	456
49カ国・地域	1,041件	78,772冊

年度 主な図書寄贈先国・地域、件数、冊数

1993 160件(22カ国)、9,688冊

イタリア、ウズベキスタン、英国、エジプト、オーストラリア、オーストリア、オランダ、韓国、カンボジア、ケニア、コスタリカ、スペイン、中国、ドイツ、日本、ニュージーランド、フランス、米国、ベトナム、ユーゴスラビア、ルーマニア、ロシア

1994 1,197件(32カ国・地域)、10,938冊

アイルランド、イタリア、英国、オーストラリア、オランダ、カナダ、韓国、スウェーデン、スペイン、中国、ドイツ、日本、ニュージーランド、フランス、米国、ベトナム、ベルギー、マケドニア、モンゴル、ロシアほか

1995 136件(23カ国)、8,082冊

イタリア、インドネシア、英国、オーストラリア、オランダ、カナダ、韓国、キルギス、クロアチア、サウジアラビア、スペイン、中国、ドイツ、西サモア、日本、ニュージーランド、フィリピン、ブラジル、フランス、米国、ベトナム、マケドニア、ロシア

1996 1,208件(31カ国・地域)、11,570冊

インド、英国、オーストラリア、オーストリア、カンボジア、キューバ、スペイン、中国、チリ、ドイツ、日本、ネパール、フィリピン、ブルガリア、米国、香港、ミャンマー、ロシアほか

合計3,157件、81,641冊



文化交流としての 編集・出版活動

1987年

昭和62年

12月●『国際文化フォーラム通信』(機関誌)創刊

1988年

昭和63年

3月●『国際文化交流元年への期待 新聞報道 1985～1988』(発行)国際交流基金
(編集協力)TJF
7月●『国際文化社会をめざして』(編集・発行)国際交流基金 (編集協力)TJF
12月●『ワールドプラザ』(国際文化交流情報誌)創刊 (編集)外務省国際文化交流情報
センター、TJF (発行)TJF

1989年

平成1年

3月●『海外における日本語教育の現状と将来』(シンポジウム報告書) (編集)国際
交流基金、TJF (発行)TJF
11月●『地域国際化と文化創造 地域おこしへの新しい視点』(シンポジウム報告書)
(編集・発行)TJF

1990年

平成2年



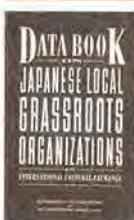
1月●『日本語教育通信』創刊 (編集・発行)国際交流基金日本語国際センター (編集協
力)TJF
3月●『日本語教育—その成長と悩み 海外日本語教育機関の動向・1988年』
(編集・発行)TJF
5月●『日本とはなにか 近代日本文明の形成と発展』(和・英・中文) (著者)梅棹忠
夫 (発行)TJF
5月●『日本語基礎』(中国放送大学日本語講座教科書)第1分冊 (編集)孫宗光ほか
(発行)中国中央放送大学出版社、講談社 (編集出版協力)TJF
6月●『国際文化交流名言集』(編集・発行)TJF
10月●『日本語基礎』第2分冊 (編集)孫宗光ほか (発行)中国中央放送大学出版社、
講談社 (編集出版協力)TJF
—●『Hello in Japanese (こんにちは日本語)』第1巻(テープ付き) (著者)井上啓子
(発行)平安インターナショナル (編集協力)TJF
—●『第1回全中国大学生日本語弁論大会弁論集』(編集)汪玉林ほか (発行)
新星出版社 (出版助成)TJF



- 4月 ● 『21世紀に向かう日本——北京国際学術討論会記録』(国際シンポジウム報告書) (発行) 中華日本学会、中国社会科学院日本研究所 (出版助成) TJF
- 5月 ● 『日本語基礎』科学技術編 (編集) 劉長義ほか (発行) 中国中央放送大学出版社、講談社 (編集出版協力) TJF
- 5月 ● 『日本語基礎』観光編 (編集) 蘇琦 (発行) 中国中央放送大学出版社、講談社 (編集出版協力) TJF
- 10月 ● 『日本語基礎』外国貿易編 (編集) 姚濬源 (発行) 中国中央放送大学出版社、講談社 (編集出版協力) TJF
- ● 『Hello in Japanese (こんにちは日本語)第2巻(テープ付き)』(著者) 井上啓子 (発行) 平安インターナショナル (編集協力) TJF
- ● 『第2回全中国大学生日本語弁論大会弁論集』(編集) 鮑頤陽ほか (発行) 新星出版社 (出版助成) TJF



- 1月 ● 『Teenage Tokyo』(文) ジョー・デュフィ (絵) 大黒隆 (発行) ポストン子ども博物館、TJF
- 9月 ● 『入門 国際交流』(編集) 国際交流基金、自治体国際化協会、大阪国際交流センター (発行) 大阪国際交流センター (編集協力) TJF
- ● 『第3回全中国大学生日本語弁論大会弁論集』(編集) 徐一平ほか (発行) 新星出版社 (出版助成) TJF
- ● 『第4回全中国大学生日本語弁論大会弁論集』(編集) 趙小柏ほか (発行) 新星出版社 (出版助成) TJF



- 7月 ● 『Data Book on Japanese Local Grassroots Organizations in International Cultural Exchange』(編集・発行) TJF
- 8月 ● 『入門 国際交流』(改訂版) (編集) 国際交流基金、大阪国際交流センター (発行) 大阪国際交流センター (編集協力) TJF
- 8月 ● 『第1回全中国外国語学校中高中生日本語弁論大会弁論集』(編集) 長春外国語学校日語教研室 (出版助成) TJF
- 10月 ● 『The Japan Forum Newsletter』(英文版機関誌) 創刊

- 3月 ● 『Culture and Japanese Language Teaching in the Twenty-first Century』(日本・タイ学術文化シンポジウム報告書) (編集) タマサート大学日本語学科 (出版助成) TJF
- 3月 ● 『Teaching Hiragana in 48 Minutes』(ビデオ) (企画) カッケンブッシュ寛子、TJF (制作) プロコムジャパン (発行) TJF
- 6月 ● 『An Integrated Approach to Intermediate Japanese』(中級の日本語) (著者) 三浦昭、マグロイン花岡直美 (発行) ジャパン・タイムズ (制作助成) TJF
- 11月 ● 『在日外国人生活情報誌ダイレクトリー '94』(編集) 在日外国人生活情報誌編集長シンポジウム (編集協力) TJF

- 4月 ● 『A Day with Kentaro』(けんたろうくんの一日)(写真・パネル) (企画・制作) TJF
- 8月 ● 『日来の初等中等教育における国際理解教育の現状と課題』(事業・調査レポート 言語と文化シリーズ 1) (編集・発行) TJF



- 11月●*International/Global Education in Primary and Secondary Education* (事業・調査レポート 言語と文化シリーズ 2) (編集・発行) TJF
- 12月●*Japanese for Communication: A Teacher's Guide* (編集・発行) ウィスコンシン州教育庁 (出版助成) TJF
- Hello in Japanese* (こんにちは日本語) 第3巻 (テープ付き) (著者) 井上啓子 (発行) 平安インターナショナル (編集協力) TJF
- 『第2回全中国外国語学校中学生日本語弁論大会弁論集』(編集) 武漢外国語学校日語教研室 (出版助成) TJF
- 『第3回全中国外国語学校中学生日本語弁論大会弁論・作文集』(編集) 南京外国語学校日語教研室 (出版助成) TJF

1996年

平成8年



- 4月●『いま高校の中国語教育を問い直す 外国語教育が直面する課題と提言』(事業・調査レポート 言語と文化シリーズ 3) (編集・発行) TJF
- 5月●『北京市青少年日本語コンテスト10周年記念 日本語実力試験問題集 1987年-1995年』(編集・発行) 北京市青年連合会、TJF
- 10月●『第4回全中国中学生日本語弁論大会弁論・作文集』(編集) 上海外国語大学附属外国語学校 (出版助成) TJF
- 11月●『在日外国人生活情報誌ダイレクター '96』(編集・発行) 在日外国人生活情報誌連合会 (編集協力) TJF
- 12月●*Opening the Minds and Hearts of Your Japanese-Language Students to Culture* (異文化理解のための日本語の授業実例集) (編集・発行) TJF

1997年

平成9年

- 3月●『日本語の習得と文化理解』(編集・発行) 異文化間教育学会 (出版助成) TJF
- 6月●『日本語』(中国全日制普通高級中学教科書) 第一冊 (編集) 人民教育出版社、課程教材研究所 (発行) 人民教育出版社 (編集協力) TJF



『ワールドプラザ』

文化交流情報を 発信し続けて

第1号

1988年12月

特集：草の根国際交流新時代

● 小さな町から大きな交流……佐渡・小木町「EARTH

CELEBRATION'88たたく」

● 民際交流をはくむ人と地域の「個性」

……[対談]降旗高司郎／松田園子

● アメリカの女子学生におにぎりをつくってあげたおばあさん

……[対談]向鎌治郎／長門芳子

■ 国際文化交流

イベント・カレンダー1988.12～(以下、各号に連載)



● 地方の時代の国際文化交流ポリシー

● 都道府県国際交流関係課一覧

■ 特集：1990年以降に開催される海外ビッグ・イベント

第4号

1989年6→7月

特集：日本語

● 国際化に必要なのは道具としての機能と多様性……西尾圭子

● 足場を得て、いま飛躍のとき……

国際交流基金の日本語普及活動の全容

● 「国際交流語としての日本語」

現場の視点

■ 新しい時代の海外協力は人づくり

[対談]アグネス・チャン／松浦晃一郎

■ いま、アフリカとの国際交流を考える



第2号

1989年2→3月

特集：留学生と日本人

● 地をはうようにして留学生の

世話をする人材を育てよ……衛藤藩吉

● 大内山村の7人の留学生……

三重県で日本語個人塾を

開いた元慶大教授の地道な活動

● 留学生への取り組みは、いま……

■ ユーロパリア'89ジャパンの全容

■ 第1回「世界青年の船」276名を乗せて、ただ今航海中



第5号

1989年8→9月

特集：東南アジアとの文化交流の新しい風

● 民間レベルでもっと自然な交流を……

石井米雄京都大学

東南アジア研究センター所長に聞く

● 在日大使夫人、ご自慢の文化を語る

(タイ、インドネシア、ベトナム)

● ワヤン・クリ、ガムラン、タイ舞踊……

東南アジア芸能に挑戦する日本人アーティスト

■ 特集：「日豪生活文化交流元年」と私たち

● オーストラリアから学ぶもの……[対談]野中ともよ／都甲岳洋



第3号

1989年4→5月

特集：ふるさと国際化のために

● 「かまくら」体験にはしゃぐ

在日大使館の子どもたち……

横手市の伝統雪まつりに招かれた

7カ国41人と地元の子らとの交流



特集：ホームステイ活動

●音楽は世界の共通語……

(ホームステイカントリー熊本)の

国際青少年音楽フェスティバル

●ホームステイは地球市民誕生の場

……長門芳子

●体験者に聞く/ウハウウ・考え方

■特集：いま、中南米がおもしろい

第2回中南米フェスティバル開催中

●中南米に理解と関心を……[対談]國安正昭/道傳愛子

ワールドブラザ



■特集：夢のある日韓文化交流——現状とこれから

特集：大学の国際交流はいま——

●若いうちに外国経験をすることの意義

……有馬朗人東京大学総長の提言

●早稲田/慶應義塾/同志社/立命館/

京都/北海道/九州/大阪外国語/

東京外国語/国際基督教ほか

●全国100大学の国際交流の現状

■特集：ニュージーランド1990と日本

●人のふれあいと“内なる国際化”を考える

[在日韓国人青年座談会]張悦子/金宣吉/姜美帆

ワールドブラザ



特集：企業と国際文化交流

●経営者として私はこう考える

……小島正興

●企業財団の国際文化交流の

あり方……林雄二郎

●日米企業で働く米国人が見た

「カイシャ」……熊谷文枝

■はじめて会った外国人……加藤秀俊

■ブラハの秋——自由の嵐吹く前夜……瀬戸内寂聴

■国際交流とは、じつは国内交流の

ことではないのだろうか……永井道雄

■民間交流団体ダイレクトリー

ワールドブラザ



特集：地域国際化の決め手“センター”の研究

全国都道府県と政令都市の現状と将来図

●大阪国際交流センター/

名古屋国際センター/北海道/

山形県庄内国際交流協会/

福島県国際交流協会/

神奈川県国際交流協会/東京都ほか

●全国都道府県・

政令都市の国際化の現状

■特集：日本とドイツの文化交流新時代

小塩節/ヨゼフ・フライナー/ウルズラ・クレッヒェルほか

ワールドブラザ



特集：国際文化交流を推進する女性たち

●生活者としての女性が交流が

うまいのは当然です……

岩男寿美子慶応義塾大学教授の提言

●国際交流の実態と現場での

問題点はなにか……

[座談会]加固寛子/鈴木八重子/

辻村聖子/永井多恵子

●国際交流の第一線でガンバる女性たち……北から南から、

主婦から女子大生まで全員集合

ワールドブラザ



特集：日本の企業財団

国際化が進む中で

期待される役割と活動状況

●財団をつくる意義と目的意識を明確に

……林雄二郎東京情報大学学長の提言

●財団の真価は「公平」「自由」「柔軟さ」

[座談会]小倉和夫/近藤有宣/

仲井通裕/山口日出夫

●多彩な活動のケーススタディ サントリー文化財団/

ワールドブラザ



とうきゅう環境浄化財団／大同生命国際文化基金／

日立国際奨学財団／三菱銀行国際財団／

ソニー教育振興財団／日産科学振興財団ほか

■特集：国際交流「草の根」現場からの報告

■“国際交流基金を育てる”懇親会での文化人

第12号

1990年10月→11月

特集：日本語の国際化に取り組む人びと

●日本語を通じて日本への“誤解”を減らしたい……京極純一

●日本語国際センターとその周辺……

国立国語研究所日本語教育センター／

国立教育研究所／

(社)日本語教育学会ほか

●日本語教室、

図書寄贈など各地のケース

……東京港区「さくらかい」／大阪国際婦人協会／

福島イングリッシュ・フレンドリー・ソサイアティ／

国際都市仙台を支える市民の会／図書寄贈「ヴィジョンの会」

ほか

■特集：4年目をむかえたJETの青年たち

■大阪の夏に燃えた「四天王寺ワッソ」



第13号

1990年12月→1991年1月

特集：国際交流を考え、実行する人たちの発言

●大阪・先進国NGOフォーラム

「市民参加型の国際協力を求めて」

●埼玉・国際交流フォーラム

「女性と国際交流、

草の根活動の発展に向けて」

●札幌・国際親善都市連盟

「都市提携事業研究会」

■スタートしたばかりの組織を運営する“産みの苦しみ”と

“喜び”(私の国際交流日誌)……高井光子

■特集：各界著名人37人が推せんする国際交流のための

“この一冊”



第14号

1991年2→3月

特集：留学生

●「外国人留学生の生活と意識」を

分析する(アンケート調査)

●留学生をお世話する立場から

(ケーススタディ)……YMCA

「留学生の母親」運動／母と学生の会／

東京外語大教務課・石井和子さん／

長崎有職婦人クラブ／甲南イリノイセンター／

留学生支援企業協力推進協会

●留学生問題に取り組んでいる人たちの語る……

「いま」の苦勞と「これから」の課題……

[座談会]福島みち子／黒岩晰子／大門隆／司会・加藤行立

■東大・平野ゼミ「国際文化演習」を聴講する学生たち

■書き損じはがきキャンペーン……「寺子屋運動」発案者の

多忙な日々(私の国際交流日誌)……榎田勝利



第15号

1991年4→5月

特集：国際親善こんな形の姉妹友好関係も

●国際交流には“ふだん着”の発想が

だいじ……堀内守名古屋大学

教育学部教授にインタビュー

●学校も町も農村も川も——

それぞれの形で(ケーススタディ)……

アメリカとの交流で

廃校寸前からよみがえった

岩手県遠野高校分校／アメリカの聖地 アラモの砦と

愛知県長篠城址を結ぶぎざなほか

■26カ国に提供された「おしん」はどう見られたか

■国際交流の担い手を育成し、ネットワークする

「箱根会議」へ向けて(私の国際交流日誌)……向鎌治郎

■特集：ソ連との交流……これまでとこれから



第16号

1991年6→7月

特集：女性たちの国際交流

●思ったときがふみだすチャンス……

目黒依子上智大学文学部教授に



インタビュー

- キーワードは「元気」と「思いやり」(ケーススタディ)……
- 埼玉県朝霞「メイ文庫」の尾池富美子さん／
- 木更津の一粒会「野の花の家」の花崎みさをさん／
- 神奈川県国際交流協会南サークルの中村通子さんほか
- 中部・関西の代表的団体リーダーが活動を語る……
- 女性の可能性、問題点、家庭と仕事……
- [座談会]大岡夕伽子／大津洋子／小野了代／司会・高橋淑子
- 九州南部の農村を中心にアジア太平洋地域と
- “からいも交流”を推進(私の国際交流日誌)……加藤憲一
- アジアの伝統に心・体・技の調和を見た……
- 大橋力／本田郁子

第17号

1991年8-9月

特集: TOKYOの国際文化交流総点検

- 「すみだ国際交流担い手
- ネットワーク会議」から……
- 国技館にまつわる3つのケース
- 住民レベルの交流活動と行政の支援
- (ケーススタディ)……品川区の
- 「国際紹介デー」／
- 武蔵野市の外国人職員／
- 練馬区の主婦グループのチャリティーバザーほか
- 国際都市にふさわしい東京人を育てたい……
- 貫洞哲夫・東京都文化振興会理事長に聞く
- 民間交流団体ダイレクトリー……新潟国際友好市民の会／
- 鳥取TIME
- 特集: 日英交流の今日と明日……
- ジャパン・フェスティバル1991に向けて
- 若い人の国際的な考え方には驚いています
- (私の国際交流日誌)……佐藤雅章

ワールドプラザ



1991年8-9月の国際文化交流総点検

第18号

1991年10-11月

特集: 人間と地球を愛する若ものたちの群像

- 青年海外協力隊たまたま2017人
- “点”が“線”になり、いずれは“立体”に
- ……青木盛久国際協力事業団
- 青年海外協力隊事務局長にきく

ワールドプラザ



1991年10-11月の国際文化交流総点検

- 現地からの報告——彼らはなにをやっているのか……

- ホンジュラス・遺跡発掘／マレーシア・日本語教育／
- ミクロネシアヤップ島・放送指導ほか
- その後——彼らはなにを学び、人生に生かしているか
- 特集: 日本の俳句から世界のハイクへ
- 京都から世界の大学と学生の友好を発信しつづける
- ファイトマン(私の国際交流日誌)……赤堀一則

第19号

1991年12-1992年1月

特集: 在日外国人団体

- 国際交流——異文化を理解・
- 吸収しようとする人たち……京都TTT／
- 千葉国際協会／アフリカの友国際協会
- 留学生——日本の大学の
- “国際化のおくれ”に対応する……
- 在日・タイ国留学生協会／
- 在日マレーシア留学生会／中国留学生聯誼会／
- 早稲田大学留学生会
- ビジネス——外国人として日本で働くことの問題点を
- 研究しつづ……会社ソサエティ／日本語で話そう会ほか
- 国際文化交流イベント・インフォメーション: 1992.1〜
- (タイトル変更 以下、各号に連載)
- 日本最初の英会話教師 ラナルド・マクドナルド
- (人間交流図鑑)……内藤誠
- 世界のオピニオン・リーダーとの“知的交流”を
- お膳立てする(私の国際交流日誌)……勝又英子

ワールドプラザ



1991年12-1992年1月の国際文化交流総点検

第20号

1992年2-3月

特集: 留学生交流イベントへの招待

- 鹿児島「からいも祭り」／
- お正月ホームステイ大分／
- 大阪「いた〜び〜ぶる運動会」／
- 全日本留学生ネットワーク・
- フォーラム名古屋'91／
- 東京・IHO国際留学生会館
- 「秋のスポーツフェア」ほか
- ベトナム人として日本の国際交流団体の運営に
- たずさわる(私の国際交流日誌)……ブイ・チ・トルン

ワールドプラザ



1992年2-3月の国際文化交流総点検

● 日本新聞界の先覚者 ジョン・レディ・ブラック(人間交流図鑑)

第21号

1992年4→5月

特集: ユネスコ協会の国際交流人脈

● 国際都市で多彩な活動をする
人たち……東京・港ユネスコ協会の

10年のあゆみ

● 世界をリードした

日本のユネスコ運動……

日本ユネスコ協会連盟事務局・

山下邦明組織部長にきく

● 東北と四国にみるユネスコ活動史……

仙台ユネスコ協会/丸亀ユネスコ協会

● 銀行創立100周年に発足した財団を切りまわして10年

(私の国際交流日誌)……三谷誠一

● 日本のピールの育ての親

ウィリアム・コーブランド(人間交流図鑑)

ワールドブラザ



経済ニュース発信源としての日本

● テレビニュース——日本の国力とともに報道量も増加……
多角化するアメリカTVの日本ニュース

● 高校生、大学生、企業人を海外へ送り出し、
国際人に育てる(私の国際交流日誌)……仲野友子

● 縄文土器から指紋による個人鑑別法を発見……
ヘンリー・フォールズ(人間交流図鑑)

第24号

1992年10→11月

特集: 日本文化を世界へ伝える「美術」

● 日本美術を愛した外国人たち……小林忠(監修)

● 海外における日本美術の修復と保存
……日本の文化的国際貢献を進めよう/

日本も知らなかった日本美術の逸品/
在外日本美術品はいまや
修復が必要な時ほか

● 女性4人が日本語教師助手として
ロシア極東地域へ出発

● アマチュア演劇の体験を生かして精力的に
芸術文化活動(私の国際交流日誌)……小泉博

● 欧米演劇を初演した近代的劇場を創立……
ノールトフーク・ヘフト(人間交流図鑑)

ワールドブラザ



第22号

1992年6→7月

特集: スポーツは世界をつなぐ

● 姉妹都市交流がむすぶ熱い友情……
少年たちも、山を愛する男たちも

● ふえている在日外国人もいっしょになって
……市民スポーツ大会で世界市民に

● スポーツ交流、ちょっといい話……

やはりスポーツは世界を結ぶ

● 世界の期待にこたえる民間海外援助組織をめざして

(私の国際交流日誌)……伊藤道雄

● 日本最初の和英辞典を編纂 ジェームス・C・ヘボン
(人間交流図鑑)

ワールドブラザ



第25号

1992年12月→1993年1月

特集: 在日外国人のための
「日本生活摩擦解消」情報源

● 留学生ばかりでなくひろく読者をもつ……

日英・日中の2か国語で

発信する雑誌と新聞

● 留学生のアルバイトさがし、
就職希望にこたえる情報誌が急増……

年間1,000人以上が日本で就職

● 在日外国人の深刻な悩みごとの相談に応ずる弁護士たち
……法律では対処しきれない難問も

● 体操指導で充実した毎日です……

大阪府泉佐野市のクチンスカヤさん

● 仲間と“感動とともに”の思いが私の活動をささえた
(キーパーソン登場)……古賀武夫

ワールドブラザ



第23号

1992年8→9月

特集: 日本と世界「情報」の国際収支

● 高級文化は入超、ニュースは出超……

伊藤陽一慶応義塾大学教授にきく

● 新聞・通信——情報の輸入超過は
対アメリカだけになった?……

ワールドブラザ



第26号

1993年2月→3月

特集:日本人は「国際人」になれるのだろうか!?

国際社会の最前線に身をおいた女性たちの体験と直言

●多様な文化体を受けとめることが日本の鍵……緒方貞子

●自分をかえることによって世界がかわる

……相馬雪香

●異文化習得の基本は、
まず「明せきな日本語」……中津燎子

■映画をゲーム感覚でつくる

“ワン・フォー・ハリー”の精神……

高倉健さんが味わった国際文化交流

■ギリシアの酒ウゾとオリーブの塩漬け(世界の酒と肴)……

川喜多法子

■インドでの“ショック体験”がきっかけだった(キーパーソン登場)

……小嶋勲



第27号

1993年4月→5月

特集:これからは帰国子女の時代だ

●異文化体験が私たちにきたえました

……企業、官庁、マスコミなどで

活躍する11人の原体験

●“日本人ばなれ”した、その感性を

プラス方向に……帰国子女とはなに?

……“異物”から“触媒”へ

●“地球人”として生きていくために

必要なこと……ニューヨーク発・海外での教育体験をもつ

3人の国連職員座談会

■マイケル・ライマー君の夢がスタート!

■国際交流にのめりこませた留学生のひとつ

(キーパーソン登場)……降旗高司郎



第28号

1993年6月→7月

特集:いまや異文化との交流は日本語で!

外国人とコミュニケーションするための日本語表現術

●外国人は“日本語での発信”を

待っている……いま話題のグループ

「SPEAK!」の活動に注目



●日本語を武器として“日本の国際化”を!

……鈴木孝夫杏林大学教授と

高橋淑子大阪国際文化協会会長にきく

●“日本人の日本語”のここがよくわかりません……

各界で活躍する在日外国人による、日本語へのメッセージ

■みんなの絵で地球をぬりかえよう……幼稚園の

教育プログラムのなかから生まれた「子供地球基金」の活動

■特集:倉敷-東京間772.5km マイケル・ライマー君の
“RUN FOR UNDERSTANDING”

■隣人のひとりとなった外国人への対応に追われています
(キーパーソン登場)……金森翠

第29号

1993年8月→9月

特集:交流は闘いだからその真髄はスポーツに在り

●地域から世界の舞台へ、Jリーグは

日本のスポーツをかえる……川淵三郎

■「オフサイド」こそスポーツの醍醐味

……山際淳司

●勝っても負けてもスポーツは

交流と友情を生む……猪谷千春

■特集:マイケル君、ただいま力走中!!

……みなさん、ありがとう いっしょけんめい走っています

■わずか4時間だけの「私のロシア」——

第2回日露極東交流合同協議会に参加して

■モンゴル高原へのロマンが原点、夢は世界へひろがる

(キーパーソン登場)……大谷達之



第30号

1993年10月→11月

特集:アメリカの少年が教えてくれた交流の原点

●マイケル、You did it!……

グラスルーツが結んだ832.5キロ

■グローバルな理念にめざめた

若い世代が確実に育っています

……明石康

■特集:日本のボランティアは

いまかわらなければならない……

[対談]榎田勝利/松本伸夫

■宣教師、企業人、そして建築家



W・メレル・ヴォーリス……(人間交流図鑑)

■ マイケルと私の39日間(キーパーソン登場)……木野富士男

第31号

1993年12月→1994年1月

特集:カンボジアで知った
これからの日本の国際協力

(現地取材)

- 在日カンボジア人が語る
“これまで” “いま” “これから”
- カンボジアで活動する

NGOダイレクター

■ 復興の決め手は“対等の友人”の自助努力への
きめこまかい援助です(インタビュー)……今川幸雄

■ シルクロードの地を旅して……文化交流を待つ
中央アジアの新生国

■ 現地で体験したアメリカのボランティア事情
(21世紀への国際交流学)……榎田勝利



第32号

1994年2→3月

特集:元日本留学生からの直言

いったいどこにいるのか日本

- 日本人から失われたたおやかな
“木”の文化……キジェルモ・エギアルテ
- 開発銀行の“4人めの日本人”
(アビジャン) / 活躍する中国の

日本留学経験者(北京)ほか

■ “留学体験”から見えてくる「これからの日本人」……

西川潤 / 櫻井良子 / 中嶋嶺雄

■ 特集:カンボジアを守るのは“伝統文化”……

伝統織物、舞踊、影絵、遺跡の保存につくす人びと

■ ジョン万次郎のホームステイ(日本の“民際人”)……神山典士



第33号

1994年4→5月

特集:国際文化交流のトレンドをつかむ!

- 国民一人ひとりが文化交流を
考える時代に……佐藤俊一
- 地域の国際化が文化交流の



ゆくえをきめる……山本正

● 地域と地域が交流する“地球化”の

時代です……平松守彦

■ 特集:グローバル化社会での

日本人の生き方を夏目漱石と福沢諭吉に学ぶ……

尾崎秀樹

■ 魔の都・上海の映画大使・川喜多長政(日本の“民際人”)

■ 表面的な姉妹都市交流はもういらぬ

(21世紀への国際交流学)……ジョン・ドナルドソン

第34号

1994年6→7月

特集:平均的アメリカ人が知っている日本

オクラホマ州タルサからの報告

● 自由に、楽しく、

日本語を学ぶ若者たち

● 街で聞いた「日本」への憧れと無関心、
忠告と誤解

● ホームステイで味わった“典型的アメリカ”

● メディアは日本と世界をどう伝えているか

■ 『旧約聖書』に挑んだ東洋の漫画家・手塚治虫

(日本の“民際人”)



第35号

1994年8→9月

特集:アジアの映画で「アジアの心」を知る

● 映画「月はどっちに出ている」

トリオが語る……「アジア映画」の行方

……崔洋一 / 鄭義信 / 李鳳宇

● 各地の現状にこわしい5氏が奨励する

……映像で“異文化アジア”が

わかる26作品

● 佐藤忠男さんに聞く……

いま、なぜアジアの映画がこんなにもおもしろいのか

■ ベトナムを貧困から救いたい……

豪州の女性が自転車車で3,900キロを走る理由

■ アマゾン開拓の父といわれた無敗の柔道家

前田光世の“国士”魂(日本の“民際人”)



第36号

1994年10→11月

特集: 働く外国人が見たニッポン

ビジネス社会の文化摩擦は
どのように克服されるのか?

●「日本の縮図」が見える

「サツ回り」はおもしろい……

ジェイク・アデルステイン (アメリカ)

●アイサツの言葉が多いニッポン……

ガンバートル (モンゴル)

●日本語を話す努力が日本人に理解される早道です……

ネアグ・アウレリアン (ルーマニア)

■18年間500人の留学生を支えた金沢のオカアサン・
松原さん

■日韓友好の懸け橋を文学と踊りに託した芥川賞作家・
李良枝 (日本の“民庶人”)



●国際経済……奥村宏/渡部福太郎

●人口問題……樋口恵子

●環境破壊……福岡克也

●人権問題……福田真弓

■過酷な現状を訴える

スピーキングツアー……インドネシア・東チモールレポート…
…松原明

■Sacred Trees (Japan's Living Landscapes)

■人間愛に生きた清朝王女・川島廉子 (日本の“民庶人”)

第39号

1995年4→5月

特集: 在日外国人コミュニティ探訪

“内なる国際化”はどこまで進んでいるのか?

●教会を情報交換の場にする

フィリピン人コミュニティ

●出稼ぎで夢をかなえる、

たくましい南米人社会

●日本の“内なる国際化”を考える……

田中宏

●エスニック・メディアがはたした

新しい役割……阪神大震災と在日外国人……

[座談会] 東海林正和/アン・サフィア/張新宇

■給食の半分を家族に持ち帰る飢えと貧しさと戦う

子供たち……タイ山岳少数民族支援レポート……中村清美

■特集: アフリカ知識人は訴える「いまアフリカは」……

さらなる交流をめざす「日本アフリカ交流フォーラム」



第37号

1994年12月→1995年1月

特集: 日本に魅せられて… 私の中のニッポン

在日外国人に定住を決意させた日本の文化と風土

●尺八の音色にとりつかれて25年……トム・ディーパー

●外国人に発見される日本文化……石川好

■「中絶」「避妊」「家族計画」で揺れた国際会議……

世界人口・開発会議レポート……

近泰男

■特集: ランドール教育長の

山形レポート……

学校訪問・文化史跡めぐり・

ホームステイで実感した日本文化

■Spirit of the Mountains

(Japan's Living Landscapes)……Johnny Hymas

■戦場の悲劇をカメラで写しとった一瀬泰造

(日本の“民庶人”)



第40号

1995年6→7月

特集: 新国際交流入門読本

国際交流に携わる人びとへの

実践情報ガイド

●国際ボランティア……小山内美江子

●NGO……秦辰也

●国際結婚……三木恵美子

●情報ネットワーク……トニー・ラスロ

●国際理解教育……市川香代子

●海外留学……井上雍雄

■砂漠化と戦い飢餓からの脱出を支援する日本のNGO…



第38号

1995年2→3月

特集: 21世紀の世界を知る 最新情報源事典

●民族・宗教……浅井信雄

●国際政治……小室直樹/渡辺利夫

…アフリカ・サヘル・レポート……東矢倫明

■縁起のいい色、わるい色(中・日2カ国語エッセイ)……

張鏡

■5世代、120万人の日系入植者たちがアマゾンで

見つけてきた夢(日本の“民際人”)

第41号

1995年8→9月

特集:東京の国際文化交流の新しい波

●新知事への質問状……

東京は外国人に開かれた

地域社会になるのか

●ユニークな国際文化交流活動を

展開するグループ紹介

●東京都23区・27市・14町村の

国際文化交流総点検

■土地なし農民の生活向上を支援する市民による

海外協力……バングラデシュ・レポート……筒井哲朗

■生で食うか、焼いて食うか(中・日2カ国語エッセイ)

■「死んでもいいから…」とユダヤ人を救出した

杉浦千畝・幸子(日本の“民際人”)



第42号

1995年10→11月

特集:国際ボランティア活動入門

●いま、注目され、期待されるNGOの

活動と課題……民間団体にできる

国際協力とは何か……伊藤道雄

●泥沼化する民族紛争の

犠牲者に愛の手を……

旧ユーゴスラビア・レポート……柳瀬房子

●最新NGOガイド——

国際ボランティア活動を志す人々への主要28団体データ

■3つの時間が生きているフィリピンの多文化生活

(海外特派員の異文化体験)……泉宣道

■アメリカとの民間交流に尽くし続ける空の勇士の

戦後50年・坂井三郎(日本の“民際人”)



第43号

1995年12月→1996年1月

特集:地域の国際化はどこまで進んだか?

●地方の時代の国際文化交流の原点……

岡山県/福岡市/浦安市

●地方で成功する国際文化交流

イベント研究……

羽咋市/山形市/大山町/

小樽市/奈良県/市島町

●全国都道府県・政令都市の国際化の現状

■戦場で学んだしたたかなアラブ流サバイバル術

(海外特派員の異文化体験)……柳澤秀夫

■人間の顔が見える国際文化交流をめざして……

大塚清一郎

■カルピス創業者・三島海雲の国際交流にかけた夢

(日本の“民際人”)



第44号

1996年2→3月

特集:在日外国人生活情報事典

“内なる国際化”はどこまで進んでいるか

●在日外国人の期待と悩み……

孤立から共生へ……阪神大震災の教訓

●在日外国人最新生活情報大研究……

阪神大震災に学んだ共生の原点とは……

多文化共生センター

●在日外国人生活情報源ブック

■人種の“るつぼ”の中で学んだ共生の原理

(海外特派員の異文化体験)……外岡秀俊

■民族紛争に揺れる島国の子どもたちに教育支援……

スリランカ・レポート……小西菊文

■日本のアイスホッケー界を世界にひらいたメルビン・

若林の「内なる国際化」の軌跡(日本の“民際人”)



第45号

1996年4→5月

特集:外国人留学生と文化交流

これからの留学生問題を考える

●交換留学の原点を見なおす……

あなたの町にフルブライトを……



サムエル・M・シェパード

- 留学生10万人時代とその問題点……
- 留学ニーズの多様化への対応……島竜一郎
- 全国自治体の留学生支援計画総点検
- ストリート・チルドレンの識字教育を支援……
- ハイチ・レポート……向山明美
- ポーランドで蘇る1万点の日本美術品……
- クラクフ日本美術技術センター誕生秘話……兵藤長雄
- 体ひとつで世界一周に挑み、
- 異文化体験を日本に伝えた明治の探検家・中村直吉
- (日本の“民際人”)

第46号

1996年6-7月

特集：多国籍時代の
国際結婚を考える

異文化摩擦と法律の壁を

どうのりこえるか

- 増えつづける国際結婚の実態……
- 多国籍化する国際結婚と
- 日本人社会の対応
- 私たちの国際結婚……文化の違いを“新しい結婚”の
- エネルギー源に……大内博/ジャンネット・大内
- 国際結婚をめぐる法律問題はこれだけある
- 言葉の壁を越えた“まごころの世界”……『悪童日記』が
- 日本人の心をとらえた理由……得丸久文
- 日本とフランスを結ぶ『太陽高速』……コミック誌が成功
- させた国際文化交流
- 時代を超えて日本人に読み継がれる作品を生んだ小泉
- 八雲夫妻の異文化理解(日本の“民際人”)



第47号

1996年8-9月

特集：国際化時代の日本語教育を考える

急増する在日外国人との交流を深めるために

- 日本語学校と日本語教育の実態……在日外国人の急増で
- 多様化する日本語教育……中西晃
- 日本語学校・日本語教育レポート……
- ボランティア日本語教室……
- ブルミエ教室「ともだち」・
- 青山日本語クラブ
- 日本語教育の問題点……
- 教員資格——抑圧的な立場での“教える”はダメ……田中望
- 現代芸術より難解な現代世界をとく“カギ”……
- 真実が見えなくなった時代に“智”を求める……得丸久文
- 国境を接する原色文化と単色文化……
- インドとバングラデシュの文化の原型……大橋正明
- 朝鮮民族の歴史研究を通して日朝の相互理解に
- 尽くす「青丘文庫」館長・韓哲曦(日本の“民際人”)



第48号

1996年10-11月

特集：国際情報化時代の文化交流

世界の壁を消した

インターネットへの期待と不安

- インターネット時代の国際文化交流……
- 異文化の容認がインターネットの
- 出発点……高橋徹
- コンピュータによる国際文化交流……
- パソコン1台でつながる世界の教育ネットワーク……田中富代
- 国際文化交流に役立つホームページガイド……
- インターネット時代の国際文化交流情報源総点検
- かけられる橋、癒される傷……
- モスタルで進むボスニア和平……大塚真彦
- 2つの祖国の壁をつき破るとき……
- 新たな時代を担う在日外国人の子供たちへの期待……
- 斉藤弘子
- 第三世界の農村リーダー養成を通して国際理解に
- 貢献するアジア学院創設者・高見敏弘
- (日本の“民際人”)



『国際文化フォーラム通信』

人の輪を求めて

第1号

1987年12月

■ 国際語としての日本語……

加藤秀俊

■ アグネス・チャンより

日本への注文……

アグネス・チャン／遠藤乙彦



第5号

1988年12月

■ 戦後日本における文化と

アイデンティティの追求

……青木保



第2号

1988年3月

■ 「ラストエンペラー」と「文化の力」

青木保

■ 日本語はいま鎖国から開国へ……

高見沢孟

■ 西洋文化の相対化を……

加藤淳平



第6号

1989年3月

■ 「異文化」日本語を

どう教えるか……

エレノア・ジョーデン(講演会)

■ 中国社会科学院

日本研究所訪問記



第3号

1988年7月

■ 国際語としての「ニホン語」の

現状と将来……

(「日本語国際シンポジウム」海外パネリスト報告)

■ 狭いアパートで留学生は何を見るか

……(アンケート)

■ 北京に育つ「ニホン語」の若い芽



第7号

1989年7月

■ 「地域国際化と文化創造」を

テーマに……(国際文化交流シンポジウム)

■ 志と眼力——

グッド・プロデューサー論……

坂根進(講演会)

■ バイカルチャーのすすめ……

G・フック(インタビュー)



第4号

1988年10月

■ アメリカの日本研究と中国研究と……

松村正義

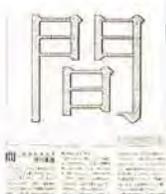


第8号

1989年10月

■ 図書寄贈事業特号:

■ 「外交官」としての本……竹内佐和子



- 「雪中送炭」——
日本語辞典が届いた
- 日本文化の伝達/どう「包む」か……
渡辺泰造(インタビュー)

第9号

1990年1月

- 蔵書票の魅力——
日本の現代作家26人展
- 「蔵書票」小史……内田市五郎



第10号

1990年3月

- 日本語教育——その成長と悩み
(外務省「海外日本語教育機関動向調査」より)



第11号

1990年6月

- 『日本とはなにか』と国際交流……
梅棹忠夫



第12号

1990年9月

- 翻訳家ジョン・バスターの世界
(第1回野間文芸翻訳賞受賞記念インタビュー)



第13号

1990年12月

- 「21世紀に向かう日本」1990・北京
- 21世紀は「ジャスティスの時代」
……進藤栄一(インタビュー)
- 小論文集「21世紀に向かう日本」



第14号

1991年3月

- 経済摩擦・文化摩擦と情報……
青木保(講演会)



第15号

1991年12月

異文化コミュニケーションの
媒体としてのマンガの
可能性を探る

- 現代文化としてのマンガ……

呉智英

- 現代日本を知る最良のテキスト……

ジャック・ラローズ



第16号

1992年6月

特集: 多様化する海外の
日本語教育事情

注目されるアシスタント・

ティーチャー派遣プログラム

- 交流の架け橋となっている

アシスタント・ティーチャーたち……

古岐久子(談)

- アシスタント・ティーチャー自身も「日本」を知るための
生きた素材



第17号

1992年10月

特集：英字マンガ

『ティーンエイジ・トーキョー』

日米共同制作の過程で
消えたコマを探せ

■『ティーンエイジ・トーキョー』は、
日本の若者のメンタリティーを
伝えるための素材

■日本についての情報を、ビジュアルでできるだけたくさん
しめすことが課題……大黒隆(インタビュー)



第18号

1993年3月

特集：長春への道——

日本語を学ぶ中国の若者たちの
実像を追って

■中高生を対象にした初めての
日本語弁論大会が
長春で行われるまで

■弁論大会に賭けたそれぞれの青春
■大会を振り返って



第19号

1993年6月

特集：“豊かな教育”を求めて——

日米文化の違いをこえて、
ウイスコンシン州教育視察団が
見たこと、学んだこと

■塾に通う子どもたちは、
なかなか自由に遊べない。

創造力は遊びの中で育まれるのです
……ジェレーン・D・モートンソン

■子どもたちも「地球村」の住民。もっと多くの外国人にふれ、
国際的な視野を広げてほしい……ステファン・R・ポーチ

■「教育は国民の義務」——この日本人の教育観が
質の高い、安定した公教育を支えているのではないかと……
パトリック・レムフレイ

■日米両国には共通財産が二つある。一つは、献身的な
教師たち。もう一つは素晴らしい子どもたち……



エド・ソントッグ

第20号

1993年9月

特集：オーストラリアの子どもたちへの日本語教育
教師と教材不足に悩む教育現場

■オーストラリアの言語政策と日本語
……テリー・ホワイト(談)

■教師の再研修は大変。
でもその努力は必ず報われる……

モリー・リチャード

■小学校での日本語教育は

まだ日も浅い……教材不足は特に低学年で深刻……
フォスター恵美子

■求められる日本語教材とは……キャサリン・ジョナック

■型にはまった理解ではなく、ありのままの日本の姿を
伝えるために……スーザン・バーナム

■展望——これからの日本語副教材……
カッケンブッシュ知念寛子



第21号

1993年12月

特集：中国の中・高校生たちの素顔——

日本語弁論大会参加生徒を通して

■外国語学校の生徒の生活

■中国の若者の意識——

弁論大会での発表より

■中等教育における日本語教育に
もっと支援を……朱春躍



第22号

1994年3月

特集：図書寄贈

人から人へ——本にたくす文化交流

■本をめぐるさまざまな交流——

各国事情

●インドネシアの子供たちに絵本を/
日本文化体験プログラムに本が活躍/
不足する図書に苦勞する

日本語学習者/日本からの本で陶器づくりに励む生徒たち



- 図書の充実で活気づく日本語学習
- 日本の図書寄贈に求められているもの

第23号

1994年6月

特集：新たな世界との出会い——

アメリカの教室に広がる日本語

- 幅広い支持を得て進められた日本語教育……ポール・サンドロック
- 日本語教育を初めて公立高校に導入……ロムアルド・A・クチンスキ／ケニス・R・ホワイト

- 新しい「世界」を伝えたい……スペイン語教師から日本語教師へ……マーガレット・C・ハグマン
- 新たな挑戦……社会科教師から日本語教師へ……リチャード・M・カニア
- 生徒たちと共に新しい文化を探求して……パメラ・J・マスタルスキ



第24号

1994年9月

特集：中・高生は何のために外国語を学ぶのか

- オーストラリアの日本語教育……スーザン・バーナム
- 米国のフランス語教育……ポール・サンドロック／ジュディス・ミッチェルズ
- 中国の英語教育……劉道義／趙京晶
- 日本の英語教育……柳瀬和明／新里真男
- 異文化理解を目指して……吉田研作
- 21世紀の外国語教育……J・V・ネウストブニー



第25号

1994年12月

特集：

日本の学校に来た子どもたち

今必要な日本語教材を考える

- 日本語を母語としない子どもたちの



日本語教材

- マルチメディア教材『さくら小学校のなかまたち』……藤田正春
- これからの教材に望むこと……西原鈴子
- クラスの中からの異文化理解教育……江淵一公
- 日本語教育、3つの課題

第26号

1995年3月

特集：新時代を担う日中の高校生たちの素顔——

互いの言語を学んで

- 中国語を学ぶ高校生が増えている
- 中国語を学ぶ日本の高校生たち
- 中国語が話せるのはかっこいい／中国の学生と共に中国の歴史を学びたい／自分の国のことを理解することが大切
- 日本語を学ぶ中国の高校生たち
- 日本語を学ぶなかで変わった日本への気持ち
- 真の国際交流になることを期待して……平野健一郎



第27号

1995年6月

特集：アメリカの州教育長が見たこと、感じたこと

——日米教育長交流プログラムから

- 人を大切にする教育環境……ジュディス・ピリングス
- 地域ぐるみで取り組む子どもの教育……ジョン・ベンソン
- 最も違う点は、文化の単一なこと……ブライアン・マクナルティー
- 個性重視の教育を今模索する日本……アルバート・ザモーラ



第28号

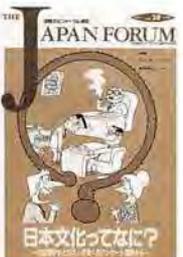
1995年9月

特集：日本文化ってなに？——

在日留学生と日本人学生への

アンケート調査から

- 文化よりも個性の違い……



ファティマ・トモーム／リンダ・チャン

(インタビュー)

- 日本の中にも多様性……
- リー・ギルバート／陸麗君(インタビュー)
- 結果分析——バリエーションに富んだ文化理解……

横山雅弘

第29号

1995年12月

特集:「私」の授業をつくるために——

小中高校教師を支援する

最新の日本語教育カリキュラムガイド

- 米国ウィスコンシン州——
- 何をどのように学び、
- 何ができるようになるかを設定……
- ポール・サンドロック／吉岐久子
- 米国ワシントン州——
- 細目にわたる学習項目を提示
- 米国オレゴン州——具体的な評価基準と検定法を開発
- ……カール・フォルスグラフ
- オーストラリア——発達段階に応じた豊富な
- リソースの提供



第30号

1996年3月

特集:本かになう国際交流——

本と人をめぐるさまざまな取り組み

- ラオス・国際協力——
- 図書寄贈から移動図書館運動へ
- ……チャンタソン・インタボン
- 日本・翻訳出版——
- アジア関連図書の普及をめざして
- ……桑原辰
- 日本・文庫活動——帰国児のために英語文庫を創設……
- 小林悠紀子
- 中国・図書寄贈——不足する日本語教材を
- 地域ぐるみで寄贈……鈴木嘉弘
- オーストラリア・図書寄贈——地域の人々へのお礼から
- 始まった日本関連図書寄贈……白田正矢／白田久美子



第31号

1996年6月

特集:広がる高校中国語教育

- 国際文化フォーラムの取り組み／
- アンケート調査概要／
- フォーラムからの提言
- 中国語を学ぶ高校生たちの声
- 高校中国語教育のガイドライン作成
- ……中野貞弘



第32号

1996年9月

特集:教育とマルチメディア——

- マルチメディアと
- 取り組む教師たち
- 交流の進化の過程——
- 手紙、ファックス、ホームページ
- ……島崎勇
- 教室の中だけの教育から
- 本物のコミュニケーションへ……古井雅子
- テレビ会議を通じて多文化学習……カトリナ・モラン
- グローバルビレッジ構築を目指す
- ホームページを通じて教師会の情報を共有
- 教材を検索できるデータベースを公開
- コンピューターをどう使うか……トニー・ラズロ



第33号

1996年12月

特集:中国の中・高校の日本語教師たち

- 自ら道を切り拓く……金香
- 就いたからには天職となす……
- 許龍哲
- 苦しいなかに喜びあり……張榮
- 平凡でいて誉れある仕事……
- 白麗春
- 世の中で最も輝かしい仕事……
- 常穎
- 研修会講師たちの声
- 好きこそものの上手なれ……加納陸人
- 頑張れ!……山口敏幸



特集：求められる外国語教育の多様化

■ 中国語——ブームに流されずに
定着化を図る……白井聖大

■ フランス語——多言語へ向けて
教育制度の改善を……橋本芳徳

■ ドイツ語——教員の養成が
第一の課題……神谷善弘

■ 韓国・朝鮮語——
高まる韓日相互の言語への関心……金東俊

■ ロシア語——地域に即した一貫教育を……金子利喜男

■ 英語——豊かな人間の育成のために……戸田康

■ 提言1……生きて働く外国語教育を……掛川久

■ 提言2……語学教育の構造変化を……鈴木孝夫



[シリーズ]

日本の高校における中国語・アジア言語教育の現場から

1. 大東文化大学第一高等学校……[第22号]
2. 千葉県立成田国際高等学校……[第23号]
3. 佐賀県立佐賀商業高等学校……[第24号]
4. 関東国際高等学校……[第26号]
5. 静岡県立静岡中央高等学校……[第27号]
6. 東邦高等学校……[第28号]
7. 慶應義塾大学志木高等学校……[第29号]
8. 敦賀気比高等学校……[第30号]
9. 埼玉県立伊奈学園総合高等学校……[第31号]
10. 石川県立金沢辰巳丘高等学校……[第32号]
11. 福井県立足羽高等学校……[第33号]
12. 神奈川県立立外語短大付属高等学校……[第34号]
13. 東京都立日比谷高等学校／東京都立西高等学校……
[第35号]
14. 自由の森学園高等学校……[第36号]

特集：設立10周年を迎えて——

国際文化フォーラムがめざすもの

■ 特別座談会……

言葉と文化を考える……

鈴木孝夫／江淵一公／
本名信行／渡辺吉銘



世界の日本語教育事情

1. ロシア連邦ノボシビルスク市……イリーナ・ブリク……
[第26号]
2. ベトナム共和国ハノイ市……小松みゆき……[第27号]
3. ドイツ……持田節子……[第28号]
4. 韓国……朴且煥……[第29号]
5. ニュージーランド……大塚美穂……[第30号]
6. インドネシア……ニニック・トゥワワジュニ・スパルワティ……
[第31号]

特集：世界の人びとと手をたずさえて

国際文化フォーラムに期待するもの

(設立10周年記念特集号)

■ 水谷修／厳安生／劉元松／

張国強／韓艶梅／

ハーバート・J・グローバー／

吉岐久子／ベギー・ハグマン／

キャサリン・マッコイ／

スーザン・澄・望月／興水優／中野貞弘／松井外恵／

鈴木一誌



日本人の生活と文化

1. 「風呂敷」と「包む」文化……[第32号]
2. 「風呂敷」と「包む」文化(中文)……[第33号]
3. 靴を脱ぐ……[第34号]
4. 世界に広がったカラオケ(中文)……張国強……[第35号]

The Japan Forum Newsletter

海外との ネットワークを広げて

Specials:

No. 1 1993

Teaching Japanese language to children in Australia—the teacher's challenge

Teacher retraining is difficult, but the effort is always rewarding, Maureen Richards

Wanted: Teaching materials for Japanese language instruction, Catherine Jonak

Replacing stereotypes with a more complex and realistic picture of Japan, Suzanne Burnham

Outlook on supplementary teaching materials, Hiroko Chinen Quackenbush

Timeline of Japanese language education and national/state language policies in Australia



No. 2 1994

Scenes behind the classroom—collaborative efforts to reach today's nihongo in Wisconsin

Timeline of Japanese language and culture education at elementary and secondary schools in Wisconsin

Collaborative efforts build Japanese language and culture programs in Wisconsin, Paul Sandrock

Wisconsin welcomes JALEX, Madeline Ura-neck

Sister schools arrangement with Chiba prefecture

First high school to offer Japanese language instruction, Romuald A. Kucinski

I wanted students to experience this new 'world' of Japanese language, Peggy Hagmann

Japanese is the most important language, so spread the word, Kenneth R. White

To present cultural information in a language class, Richard M. Kania

I can teach anyone after teaching at high schools, Keiko Taguchi

Wisconsin—a place to learn Japanese.



Pamela J. Mastalski

Japanese in Wisconsin: From yesterday to tomorrow

No. 3 1994

Goals for the 21st century: Foreign language education issues for secondary schools

Japanese language education in Australia, Suzanne Burnham

French language education in Wisconsin, USA, Paul Sandrock

English language education in China, Liu Daoyi

English language education in Japan, Kazuaki Yanase

The new teaching guidelines, Masao Niisato (interview)

Intercultural understanding through foreign language education, Kensaku Yoshida

Foreign language study: Towards the 21st century, J.V. Neustupny

The state of foreign language education in schools: A qualitative shift forward



No. 4 1995

American snapshots of Japan—regional exchange programs of USA and Japanese

Visiting is understanding, Judith Billings

Learning from each other, John Benson

Children are children everywhere, Brian A. McNulty

The common value of education, Albert Zamora

Perspectives on practical education

Portraits of American visitors



No. 5 1995

What is Japanese culture?—from a survey of Japanese and international students

The culture behind the words,
Kazuhiro Ebuchi
Surveys of dialogue interpretation
No such thing as 'typical,' Linda
Chang and Fatima Tomoum
(interviews)
Conversational considerations,
Masahiro Yokota
Teaching 'culture' in the classroom,
Kimie Shin and Tomoko Tanaka



No. 6

1996

Creating a course that works—
curriculum guides for Japanese-
language instructors
Wisconsin: Creating a curriculum
for communication, Paul Sandrock
and Hisako Yoshiki
Washington: A communicative
framework for introductory
Japanese-language curricula in
Washington State high schools
Oregon: The Oregon proficiency package for high
school Japanese, Carl Falsgraf
Australia: Yoroshiku series, Suzanne Burnham
Common concerns: Communication skill development
and cultural studies
Data on curriculum guidelines



No. 7

1996

Idea contest: Incorporating culture
into the classroom
Dos and Don'ts: Feedback from the
judges
Grand prize at the primary school
level, Catherine McCoy
Grand prize at the secondary school
level, Sandra Lopez-Richter
Outstanding lesson plan and
intercultural understanding prizes



No. 8

1997

Foreign-language education in
Japanese high schools: Toward
multilingualism in education
Chinese: Now on a tailwind, Shirai
Satohiro
French: Flexibility for the future,
Tachibanaki Yoshinori
German: Cooperation for
innovation, Kamiya Yoshihiro
Korean: Overcoming obstacles, Kim Dongjun



Russian: Regional responsiveness, Kaneko Rikio
English: Enjoyment and engagement, Toda Yasushi
Foreign language education "Alive and at work,"
Kakegawa Hisashi
New language strategy for our times, Suzuki Takao

No. 9

1997

New horizons for the Japan Forum:
Tenth-anniversary commemorative
round-table discussion—
Intercultural understanding through
language education; Suzuki Takao,
Ebuchi Kazuhiro, Honna
Nobuyuki, Watanabe Kilyong, and
Nakano Kayoko
The Japan Forum's objectives/
Relation between language and culture/
Emerging "Asian English"/ English as an international language/
Promotion of Japanese-language education overseas/
The Japan Forum's objectives through Japanese-
language education/
Encouragement of Asian language
study in Japan/
Cultural understanding through shared
interests/
Ultimate aim of cultural understanding
programs
Kudos for the Japan Forum
Toward permanent friendship, Herbert J. Grover
Action-oriented support, Yoshiki Hisako
Linking teachers, nations, and hearts, Peggy Hagmann
Enthusiastic, respective support, Catherine McCoy
Let's expand "Japan in a suitcase," Susan S. Mochizuki
In memory of an inspiring colleague
Ten years of the Japan Forum



Series:

The state of Japanese language education around the world:

- Vietnam: Miyuki Komatsu (No.5)
- Germany: Setsuko Mochida (No.6)
- Indonesia: Ninik Triwahjobni Soeparwati (No.7)
- France: Diverse circumstances, urgent needs, Nemoto Sawako (No.8)
- Australia: Pioneers of Japanese-language study in the Australian school system, Colin W. Jones (No.9)

A Day in the Life:

- A day with Kentaro (No.3)
- Right on the money (No.4)
- Obento: Lunch in a box (No.5)
- Ofuro: More than just scrubbing clean in the bath (No.6)
- Ocha: Would you like some tea? (No.7)
- Kutsu o nugu: Removing shoes (No.8)
- Kome: Rice (No.9)



財団のプロフィール

名称	財団法人国際文化フォーラム The Japan Forum (英文名)
設立日	1987年6月22日
会長	野間 佐和子〔株式会社講談社代表取締役社長〕
理事長	黒田 瑞夫〔元国連大使〕
出捐企業	王子製紙株式会社 株式会社講談社 大日本印刷株式会社 株式会社東京三菱銀行 凸版印刷株式会社 日本製紙株式会社
主務官庁	外務省
賛助会員	法人会員…95社〔会費1口年額5万円〕 個人会員…68名〔会費1口年額1万円〕
基本財産	20億円
事業規模	約1億1,469万円〔1997年度事業予算〕

(1997年10月現在)

役員・評議員

役員・評議員 1997年10月現在

役員

会長	野間 佐和子……(株)講談社代表取締役社長
理事長	黒田 瑞夫……元国連大使
常務理事	高嶋 伸和……常勤
理事	伊夫伎 一雄……(株)東京三菱銀行相談役 上原 明……大正製薬(株)代表取締役社長 牛島 通彦……常勤・事務局長 大國 昌彦……王子製紙(株)代表取締役社長 加藤 一郎……成城学園名誉学長 ドナルド・キーン……評論家 北島 義俊……大日本印刷(株)代表取締役社長 黒沼 ユリ子……ヴァイオリニスト 小林 陽太郎……富士ゼロックス(株) 代表取締役会長 近藤 親司……(株)講談社常務取締役 鈴木 孝夫……慶応義塾大学名誉教授 福原 義春……(株)資生堂取締役会長 藤田 弘道……凸版印刷(株)代表取締役社長 三角 哲生……(財)ユネスコ・アジア文化センター理事長 宮下 武四郎……日本製紙(株)代表取締役会長 山地 進……日本航空(株)代表取締役会長 山本 正……(財)日本国際交流センター理事長
監事	小田倉 正典……公認会計士 櫻井 孝穎……第一生命保険相互会社代表取締役会長
顧問	佐藤 正二……国際交流基金顧問 平岩 外四……東京電力(株)相談役

評議員

饗庭 孝典……杏林大学教授
青木 保……東京大学教授
猪口 邦子……上智大学教授
上野 田鶴子……東京女子大学教授
打越 志郎……日本製紙(株)代表取締役副社長
江淵 一公……放送大学教授
北見 鏡三……大日本印刷(株)専務取締役
興水 優……日本大学教授
鈴木 和夫……凸版印刷(株)取締役相談役
田代 忠之……(株)講談社常務取締役
田中 海南……(株)トーハン取締役海外事業部長
鶴田 尚正……日本出版販売(株)専務取締役
徳川 宗賢……学習院大学教授
奈良 久彌……(株)三菱総合研究所取締役会長
C.W.ニコル……作家
平賀 純男……講談社インターナショナル(株)
取締役副社長
文入 秀敏……(株)講談社常務取締役
鮑 啓東……(株)オリファ代表取締役社長
益本 巽……全日本空輸(株)前常務取締役
松岡 紀雄……神奈川大学教授
水谷 修……国立国語研究所所長
宮本 繁雄……(財)ユネスコ・アジア文化センター
前常務理事
茂木 友三郎……キッコーマン(株)代表取締役社長
森 健……王子製紙(株)専務取締役
渡邊 幸治……(社)経済団体連合会特別顧問

設立時の役員・評議員

1987年6月現在

役員

会長 服部 敏幸……(株)講談社代表取締役会長
副会長 加藤 勝久……(株)講談社専務取締役
理事長 黒田 瑞夫……新日本製鐵(株)顧問
元国連大使
専務理事 井上 勝……国際交流基金理事
常務理事 市原 徳郎……(株)講談社国際交流推進室長
理事 石上 實……十條製紙(株)代表取締役社長
伊夫伎 一雄……(株)三菱銀行頭取
上原 明……大正製業(株)代表取締役社長
加藤 一郎……成城学園学園長
河毛 二郎……王子製紙(株)代表取締役社長
川瀬 生郎……東京大学教授
ドナルド・キーン……コロンビア大学教授
北島 義俊……大日本印刷(株)代表取締役社長
鈴木 和夫……凸版印刷(株)代表取締役社長
アグネス・チャン……歌手
平岩 外四……東京電力(株)取締役会長
福原 義春……(株)資生堂取締役社長
三角 哲生……日本育英会理事長
山地 進……日本航空(株)代表取締役社長
山本 正……(財)日本国際交流センター理事長
監事 小田倉 正典……公認会計士
小林 陽太郎……富士ゼロックス(株)
代表取締役社長

評議員

- 饗庭 孝典……日本放送協会解説委員
石川 博……日本出版販売(株)取締役国際部長
石毛 直道……国立民族学博物館教授
猪口 邦子……上智大学助教授
今井 和也……(株)レナウン専務取締役
今村 碩……(株)講談社常務取締役
公文 俊平……東京大学教授
笹岡 太一……(財)エネスコ・アジア文化センター
常務理事
千葉 一男……王子製紙(株)取締役副社長
綱島 昭……大日本印刷(株)常務取締役
徳川 宗賢……大阪大学教授
豊田 保雄……十條製紙(株)専務取締役
奈良 久彌……(株)三菱銀行副頭取
藤田 弘道……凸版印刷(株)専務取締役
鮑 啓東……(株)オリファ代表取締役社長
松岡 紀雄……神奈川大学教授
森 孝喜……講談社インターナショナル(株)専務取締役
柳田 邦男……評論家

資料：財団法人国際文化フォーラム設立時配布案内

(五十音順・敬称略)

あとがき

国際文化フォーラム(TJF)設立10周年の節目を迎え、これまでの活動を顧みながら総括し、今後の事業を展望するために10周年記念誌『ことばと文化——相互理解をめざして』を刊行することにいたしました。簡潔な小冊子を作ろうということで、当初の計画は60ページぐらいを見込んでおりました。しかし、10年の軌跡をたどるうちに要旨のみをまとめても、100ページを超えることになってしまいました。

TJFの10年間の事業はどれも、多くの方々からの支援、協力、参加を得てはじめて行なうことができました。事業に関わっていただいた方々のお名前を本書に掲載したいと思いましたが、紙面の関係で果たせませんでした。この場を借りて、これまでお世話になった全ての方々に深く感謝申し上げます。また、各事業の説明につきましても、主要事業に限って取り上げることにいたしました。詳細につきましては、機関誌『国際文化フォーラム通信』並びに年次事業報告を参照いただければ幸いです。

本書のために多くの方々から、TJFの今後の進むべき道についてメッセージを寄せていただくことができました。改めて厚くお礼を申し上げます。

本書がTJFの事業についてのご理解を得るための一助となることを希望いたしますとともに、今後も人の輪がさらに広がっていくことを切に願うものであります。

1997年11月

10周年記念誌編集委員会

.....高嶋 伸和
.....牛島 通彦
.....中野佳代子
.....田中安男
.....小栗 章
.....古川典子
.....大川 修



ことばと文化—相互理解をめざして
国際文化フォーラム設立10周年記念

1997年11月発行

非売品

編集・発行人……………財団法人国際文化フォーラム
高嶋伸和

発行所……………財団法人国際文化フォーラム
〒163-07
東京都新宿区西新宿2丁目7番1号
新宿第一生命ビル26階
電話 (03)5322-5211
Fax (03)5322-5215
E-mail forum@tjf.or.jp
http://www.tjf.or.jp/
©The Japan Forum 1997. Printed in Japan.

アートディレクション・表丁 鈴木一誌・後藤葉子

デザイン 蒲谷孝夫・廣田清子・宗利淳一

イラストレーション 竹嶋浩二・木野烏乎

出力・印刷・製本 近代美術株式会社

校閲 有限会社天山舎

使用アプリケーション QuarkXPress/Adobe Illustrator/Adobe Photoshop

使用書体 大日本スクリーン製造株式会社
ヒラギノ明朝体シリーズ
ヒラギノ角ゴシック体シリーズ





財団
法人 国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM